522
139

始

8. 8.20

522-139

トルストイ作

復活

古館清太郎訳

春秋社

大正
13.2.15
内交

序

人生は徹頭徹尾苦だ。善いにつけ悪いにつけ、髑髏の滅しない限り、苦の世界だ。權勢を把握すればする程、黄金に埋まれば埋まる程、愈々苦だ、愈々地獄だ。併し苦に慣れた、さうした平凡人の人生は、地獄の苦がなければ恐ろしく嫌な厭なものらしい。一種の神經倒錯病に罹つてゐる譯か?。泥溝臭ひ所も、馴れればその臭ひが懐しいのと同じ道理で、人生の泥溝の臭ひに、結局酔はされて、權勢の影を追ひ、黄金の色に眼が眩み、泣いたり笑つたり、笑つたり泣いたり……幾度それを繰返すことか。

併し大觀すれば、宇宙の運行にも人生の波動にも、窮極の目的などはなかりさうだ。つまりは、五六十年の、人間と云ふ妙な形に、おさらばをして了ひ、蛆虫をわかせ、土と變じ、氣と化して、また何にならうが、兎に角それまでの、神經倒錯的發作の起伏に奔弄されてゐるにすぎない。それは皆、髑髏と云ふ妙な形に對する執着から醸される。多くの先哲が死を讃美し、自殺を喜んだのは、一面意味深いことだと思ふ。

併し大聖は、壽命を待たないで、又自殺をしないでも、生きながらにして、身を殺し得た人だ。軀髏の分解を待たないで、大宇宙に融合し得た人だ。虚無の大世界に生きながら投じ得た人だ。これが人生に投げる暗示は大きい。人生にせめて目的がありとすれば、この境致ではあるまいか。我々はこの境致に近づきたいと望んでゐる。けれども生きながら身を殺し得る第一歩は、本當に懺悔し得ることだ。世には併し、誤間化しの懺悔が餘りに多い。本當に自分を知り、本當に宇宙を知らなければ、

本當な懺悔はあり得ない。そこから、初めて新らしい生活が生まれて來るのだ。復活とはその謂ひである。宇宙の本性に悟入し、そこから新たに踏み出すことである。

自然を征服するなどゝは、痴人の囈語にも足りない。識者にとつては少くとも不用意の詞である。自然を解し、自然に順應し、自然と容合すべきが、人間理想の生活でなければならぬ。今度の震災で、自然を征服したつもりの、所謂その文明の利器のために、却つて損傷を多くしたのなどは、殊に誡愼に價する。現下の社會狀態に於ても、寧ろ時々刻々に、かうした意味の慘劇が絕えず行はれつゝある。自分は先哲の言を藉りて再び「自然に還れ」と叫びたい。勿論これは野性に還ることではない。自然を味了し、自然に順應した、靈肉融合の新生活、即ち復活の意味である。蓋し自然は本質本性の謂ひで、單なる物質的現象とのみ解してはならぬ。然も眞に自然を知ることは本當に自分を知ることを外にしてはあり得ない。

震災後端なく、復活の重版に手を入れることゝなり、久しぶりに讀み返して、如上の感想を新たにし得たことを感謝する。復興に忙しい都門の人々は、ともすれば、矢張り以前と同じことを繰返さうとしてゐる。自分も亦或はその一人に洩れないかも知れないが、せめてはこれを機緣に、一歩でも本當な復活の道に踏み入りたいと思ふ。

大正十三年甲子元旦

東京市外下落合の寓居にて

譯　者

此の書を丹澤正作氏に呈す

徳富芦花氏の紹介で、兄を甲州上野村の草庵に訪れてから既に十幾年、その後私は、芦花氏へも兄へも殆ど消息を斷ち、徒らに市井の泥溝になずんで、身も心も傷つき破れながら、尙ほ何時までともなく、人生虛無の解き難き謎に悶々反側を續けてゐます。けれども夜半の眼覺めに、殊に、不思議にも近頃は、恰もあの當時、慈悲信行の首途に立つてゐられた兄の姿が、今や一大靈光の如く、屢々眼前に髣髴して來ます。

例　言

此の作の材料は、實際法廷に起つた事件を傳へ聞いて、それに依つて、作者の根强い道德的精神を、息づまる程の力强さで表現したものである。

公けにされたのは、一八九九年で、トルストイは既に七十歳を越してゐた。當時アメリカへ移住するドウホボール宗徒を援助する財源を得るために『ニーワ』と云ふ雜誌に書き出して、二萬三千五百ルーブリの原稿料を貰つたと傳へられてゐる。

トルストイは豫て一切の版權を棄却してゐたから『ニーワ』に連載されると、他の雜誌などでも、無斷で盛んに轉載したものらしい。イギリスやアメリカでも、彼の作中では、最も廣く讀まれ且つ賣られたもので、各國に種々の飜譯が出たにも拘らず、モード夫人の譯本からの收入だけでも、三千ポンドに達したと云はれる。モード夫人はトルストイから直接飜譯を依囑された人だ。此の譯は、そのモード夫人の英譯から重譯したものである。

復活

前編

古館清太郎譯

爰にペテロ御許に來りて言ふ。主よ我が兄弟のわれに對して罪を犯さば、幾度まで許すべきか、七度までか?イエス言ひ給ふ、七度までとは云はじ、七度を七十倍するまでも許せよ。(馬太傳第十八章第二十一 第二十二節)

何故、兄弟の目にある物屑を視て、己が目にある梁木を知らぬか?(馬太傳第七章第三節)

汝等のうち罪なき者は、先づ彼を石にて擊つ可し(約翰傳第八章第七節)

弟子はその師に勝らず、されども能く敎へらるゝ時は弟子も皆其の師の如くならん(路加傳第六章第四十節)

第壹編

一

幾十萬と云ふ人間が、こた〳〵と群居してゐる小ッほけな土地を、何うにか改變しようと、殆どそれに全力を擧けて、石を敷いたり、草の根を掘り返したり、樹木を切り倒したり、鳥や獸を追っ拂つたり、石油や石炭の煙で空を濛らさうとしたりなどしても——而もそれが都會の眞中だつたにしても、春は矢張り春である。暖かな陽がほか〳〵と照り、和やかな風が薫り、根の残つた草が蘇つて、それが遊歩地の芝生や、石墨の隙間などから、其處此處に萠え出してゐる。樺や白楊や山櫻などは、護謨のやうに柔かな芳ばしい葉を擴げて、菩提樹には、若芽が脹れ上つてゐる。春の嬉しさで一杯な鵲や雀や鳩などは、いそ〳〵と巣の支度をし、日當りの好い壁には、蠅が一杯集つてブン〳〵唸つてゐる。かうして、樹木や鳥や蟲や子供などは皆喜々として樂しんでゐるのに、淺ましいことに人間だけは、もう一人前になつ

た男も女も、お互に騙し合つたり、虐め合つたりして止まないのだ。一體春の朝の、恁うした麗らかな美しさは、神が萬物を喜ばせるために與へたもので――この美は、萬物の心を和らげ、整へ、そして愛を感得せしめるもので――極めて神聖に、且つ重大に考へねばならぬのに、人間はてんでそんなことにはおかまひなく、たゞ互に他の者を壓へ虐げようとのみ企んでゐる。

殊に此の田舍の監獄では、實際誰一人として、春を神聖な大切な、そして麗しい樂しい季節だなぞと考へてゐる者はない。それよりも、丁度昨日役所の印の捺さつた番號附の通告書が廻つて來たのを大切なことに思つてゐる。その通告書には、四月二十八日午前九時、目下拘留中の三四人、男四一人女四二人（主犯たる一人の女囚は特に分離させて）出廷の事と記してあるのだ。で丁度今、即ち四月二十八日の朝八時に、此の厭やな臭のする薄暗い女囚檻の廊下へ看守長が現れたのだつた。その後からは又、金筋で飾つた袖のついたジャケツを着て、腰には、青い縁のある帶を締めた、灰色の縮れ毛の澁面をした一人の女が隨いて來た。

看守長は、鐵錠をガチヤつかせながら、檻房の戸を開くと、廊下よりも一層厭やな臭がむつと襲つて來たので、

『マースロワ、出廷』と呼んだつきり、直に又、ばたりと戸を閉めて了つた。

監獄も、その中庭には、新鮮な生々した空氣が、野の方から通つて來るけれども、廊下に這入るとその空氣は、もう窒扶斯菌や、下水の汚物や、腐敗物や、コールターなどの臭で重苦しくなる。だから始めて來た人は、皆氣が悒がつて滅入り込んで了ふ。女看守は始終それに馴れてゐてさへ、今突然

戸外からこの廊下へ這入つて來ると、何だかだるいやうな、眠いやうな氣になるのだつた。

檻房の中からは、何か駛け揩り廻るやうな消魂しい音がして、女の喚き聲や、素足で床板をパタつかせる音が聞えた。

『さあ、早くしないか！』と、看守長が呼ぶと、軈て一二分間經つてから、小柄な、然しふつくりと太つた若い女が、スルリと素速こく戸口から揩り拔けて來て、看守長の前へ進み出た。その女は白いジヤケツと下袴の上に鼠色の上衣を着てゐた。足には麻の靴足袋と牢屋靴を穿き、頭には白いハンケチを巻いて、その下からは、眞黒な髪を一房二房故意とらしく前額のあたりに縮らせてゐた。顏は、長い間牢屋住居をした者に特有な生白い色で、丁度穴倉に蔵はれてゐた馬鈴薯の芽にそつくりだつた。小さくて幅の廣い手や、上衣の大形のカラーから出てゐるその太い頸筋なども矢張り同じであつた。たゞ黒い眼が、片方は少し斜視であつたが、それでも、全體として生氣ない蒼褪めた彼女の顏に、それが一際眼立つて、人を惹きつけるのだつた。

彼女は、ふつくり太つた胸を突き出して、身體を眞直ぐ反り返らせてやつて來た。そして廊下へ出ると、頭を少し背後へ投げて、看守長の眼を凝然と見入りながら、何か命令を待つものゝやうに身構へした。

看守長が戸を閉めようとすると、その途端、皺だらけの意地惡さうな顏をした婆さんが灰色の頭を突き出して、マースロワに聲かけようとしたが、看守長は、その婆さんの頭を戸で抑へて、ハタと締め切つて了つた。檻房からは女達の笑ひ聲が聞えた。マースロワも、檻房の戸の小さな格子窓の方を

振り返つて、につこり笑つた。婆さんは、その反對の側から、格子に顔を押し當てゝ、皺枯れ聲で云つた。

『これ、氣をおつけ。何と訊かれても、たゞ同じことを云ひ張るんだよ。要らぬことは決してお饒舌りしでないよ。』

『えゝ、どつちにしたつて、モウこれよりブマな目にはあふまいからね。わたしも早く、何うにかきつぱり定めて貰はなくちや――』

『勿論どつちにか定まるさ』と、看守長はえらさうな顔付をして云つた。『さあ行くんだ！』

婆さんの眼が格子から消えると、マースロワは廊下の眞中まで進んだ。看守長が先途に立つて、二人は、女囚檻よりはもつと騒々しくて汚ならしい男囚檻の間を、戸毎の格子窓から覗いてゐる多くの眼に見送られながら、石段を下つて、事務所に這入つたが、其處には、二人の兵士が、彼女を護送するために待つてゐるのだつた。事務所の書記は、煙草の煙に燻ぶつた紙片を、兵士の一人に渡して、その囚人を指しながら「連れて行け」と云つた。

ニージユニイ・ノヴゴロド生れの百姓で、赤い痘痕面の兵士が、上衣の袖にその紙片を挾み込んで、囚人の方をちらりと見ながら、も一人肩幅の廣い、チユウアシ人の同僚へ目配せした。かくて囚人と兵士とは、正面の門から監獄の構内を出て、粗末な敷石道の眞中を通つて街を行つた。

辻馬車の馭者や、小商人や、料理人や、職人や、町役人などが多く立ち止つて、何れも好奇の眼を光らせながらその囚人を見送つた中には、「一體何麼事をしたのだらう、俺達には迚も出來ないことに相違ない……」と、頭を捻つて考へる者もゐた。子供等は、まだ何かその囚人がしでかしはしないかと恐れるやうにして見てゐたが、兵士がついてゐるのに氣がつくと安心した樣子であつた。町で炭を賣つて、その代りに茶を買つて歸りがけの百姓が一人、駛け寄りさま、マースロワに一錢の施をした。マースロワはほつと顔を赧らめて、何か口の中でブツ〳〵呟いた。多くの人々が寄つてたかつて自分を見てゐるのだとは判つてゐたけれども、彼女は眞直ぐ向いたまゝそれを振り返らうとはせず、たゞ横目を呉れたばかりで、自分が恁うして人目を率いてゐるのが可笑しくてならなかつた。それに又、監獄の中とは違つて、生々した四邊の空氣が、彼女を喜ばせた。けれども、暫く歩き馴れなかつた上に、下手に拵へた牢屋靴を穿いて、然も凸凹した敷石道を歩まねばならなかつたので、それがたまらなく苦しかつた。穀物屋の傍を通りかゝると、如何にも人馴れして、少しも物怖ぢしない鳩が、悠々と歩き廻つてゐた。傷い足を引き摺つてゐたマースロワは、危くその青鼠色した横着な鳩を蹴飛ばさうとしたが、鳩は遉に喫驚して、パタ〳〵と羽叩きして、彼女の耳を掠めながら飛び上つた。マースロワは、思はずにつこりしたが、然し又、自分の今の境遇を不圖思ひ出すと、深い溜息を吐いた。

二

女囚マースロワの來歷は、極めてありふれたものであつた。

マースロワの母は、二人の女姉妹の地主の共有になつてゐる酪農場の雇女の娘で、定つた亭主と云

つてはなかつた。しかし毎年きまつたやうに赤兒を一人づゝ生んでゐた。そして、これは田舍の人の間にはよくあることだが。恁うして別段欲しくもない子が生れると、洗禮だけは丁寧に受けさせても、それから後は、少しもかまはなくなり、却て仕事の邪魔扱ひにして、おつぽり出したまゝ乾し殺しにして了ふのであつた。それと矢張り同じ段取でこの娘も五人の子供を殺した。その子供等は皆洗禮は受けたれども、十分養はれなかつたため、餘義なく死んで了つたのである。六番目のは旅稼ぎのヂプシーと關係して出來たので、これも亦、同じ運命に狩り去られるところだつたのを、丁度折よく、その女主人の一人が、牛臭いクリームをよこしたと云つて、それを咎めに搾乳所へ出て來たばかりに、計らずも助かることになつたのだつた。若い女が可愛い健康さうな生れたばかりの赤兒を抱いて、牛小屋の中に寢てゐるのを見ると、直にその老女主人は、叱ることは叱つても、兎に角お產した大事な身體だから、そのまゝ用心して寢てゐろと勧りながら、出て行かうとした。所が又、その時不圖赤兒の顏を見ると、老女主人はたまらなく可愛い氣が起つて、その小さな女の兒の名付親にならうと云ひ出した。そして、その小さな兒に對する、この女主人の憐愍な心は、更に產婦に牛乳を與へたり、少しばかりだが金を惠んだりしたので、お蔭で、その赤兒だけは兎に角無事に生ひ育つことになつた。それで、老女主人はその兒を「救ひの兒」と呼んでゐた。所が、その兒が三つになつた時、その母親は病氣になつて到頭死んで了つた。すると女主人は又、その兒が、その祖母の厄介になつてゐるのを可哀相に思つて引き取つて了つた。

眞黑な眼をしたその兒は、段々可愛らしく、元氣よく健康に成長して行つたので、女主人は非常に

樂しく思つた。

この娘の名付親になつた、妹の方の女主人、ソフイヤ・イワーノヴナは、柔しい氣立の人であつたが、姉のマリヤ・イワーノヴナは、少し根性の毅い人であつた。ソフイヤは、この娘に綺麗な着物を着せ、讀み書きも敎へて、お孃さん風に育てようと思つた。けれどもマリヤは、この兒をなるべく働かせて、忠實な奉公人に鍛へ上げようと考へた。で、彼女は、隨分手嚴しく振舞つて、殊更にこの小女を誚めつけ、機嫌の惡い時などは、打ち打擲さへもした。恁うしてこの娘は、違つた二種の敎育を受けて來たので、何處か奉公人のやうでもあるし、又何處かお孃さんのやうでもあつた。主人達は、この娘を、カチユーシヤと呼んだ。それは、カーチエンカと云ふ程上品な呼び方ではなかいが、然しカーチカと下女のやうに呼び捨てにされるよりはましだつた。

カチユーシヤは、何時も縫物をしたり、部室の片附けをしたり。聖像の入つた金屬の厨子を、磨き粉で磨いたり、その他色々と手輕な仕事をしてゐたが、時々は、女主人達に讀み物をして聞かせることもあつた。

彼女は、幾度か緣談を持ち込まれたけれども、まだ結婚する氣にはなれなかつた。それに百姓などが幾ら云ひ寄つたところで、樂な生活が染み込んでゐる彼女には、迚もそんな者の婦になることは出來なかつた。

かうして彼女は、十六の頃まで過して來たが、丁度その時、老女主人達の甥に當る金持の若い公爵の大學生が、その伯母達の家に遊びに來て逗留した事があつた。其の時カチユーシヤは、それとなく

彼を戀しく思つてゐた。

それから二ケ年後のこと、同じ人が、士官になつて、その聯隊に赴任する途中、又伯母達の家に四日間泊つた。そして愈々立つと云ふ、その前の晩に、彼は到頭カチユーシヤを手籠めにして、百ルーブリの紙幣を一枚握らしたぎりでそのまゝほいと出立して了つた。

五ケ月後、彼女は始めて、自分が姙娠してゐるのに氣がついた。それ以來と云ふもの、彼女には總てのことが面白くなくなり、たゞ何うしたら、軈て近づいて來る耻かしいことから逃れ得られるだらうと、そのことばかりが氣にかゝつた。それからは、主人に仕へるのも、不熱心に惰け勝ちになり、一度などは、何うしてそんなことになつたのか、無論後では後悔したのであるが、ひどく主人に惡口つ(あくたい)いて、暇を呉れとまで云つたのだつた。さすがに主人達もそれには愛想をつかして了ひ、その云ふがまゝに、すぐ暇をとらすことにした。

それから彼女は、或警官の家へ女中に住み込んだが、そこでは僅か三ケ月しか辛抱出來なかつた。それと云ふのは、其處の主人が、もう五十にもなつてゐながら、彼女に惡巫山戲をし出し、到頭飛んでもない心を起して、彼女を手籠めにしようとしたからであつた。

其の時彼女は、腹立ち紛れに「畜生」「馬鹿奴郎」と毒づいて、その主人の胸をウンと云ふ程突き飛ばしてやつた。彼女は漸く氣が荒つぽくなつて行つた。それにモウ臨月が近づいてゐたので、他にまた奉公口を探す氣にもなれず、造り酒の密賣をしてゐる村の産婆の家へ身を寄せた。お産は輕かつたが、産婆の不注意で、丁度其の時、村に流行つてゐた熱病を傳染させられて、赤兒は育兒院へ遣られねば

ならなくなつた。所が、それを連れて行つた産婆の話によると、赤兒は直ぐ死んで了つたさうである。カチユーシヤが、産婆を手頼つて來た時には、自分で働き蓄めた二十七ルーブリと、薄情な戀人から貰つた百ルーブリと、みんなで都合百二十七ルーブリ持つてゐた。けれども彼女は、金の持ち方を知らなかつたので、云はれるまゝに人に呉れて了ひ、其處を出る時は、僅か六ルーブリしかなかつた。二ケ月の看護料を四十ルーブリ拂ひ、二十五ルーブリは赤兒を育兒院に遣る時に費ひ、更に四十ルーブリは、産婆に牛を買ふからと云つて借り取りにされ、その他かれこれ二十八ルーブリばかりは、着物や自分の好きな物を買つたりして失くして了ひ、結局餘すところ何程も殘らず、迚も暮しては行けなくなつたので、彼女はまた奉公口を探して、今度は林務官の家へ這入り込んだ。所が、この林務官も妻君持ちの癖に、お目見えの初めから、何だか彼女へ妙な目附きをするのだつた。それで又、彼女はその主人が無氣味で厭やになり、すぐ逃げ出さうと思つた。すると此の男は主人風を吹かして、命令的に何處へでも彼女を連れ出すことが出來る上に、又さう云ふことにかけては、中々拔目がなく、經驗も積んでゐたので、到頭カチユーシヤを巧くたらし込んで了つた。すると間もなく妻君がそれを嗅ぎ出して、丁度カチユーシヤとその良人とが、たゞ二人きりで部屋に籠つてゐる所を捕へて、カチユーシヤへ無闇と打つてかかつた。カチユーシヤも默つてはゐられず打ちかへしてやつたが、遂に激しい掴み合ひとなり、結局、カチユーシヤは、給金も貰はず、そのまゝ其の家を追ひ出されることになつて了つた。それから彼女は町に住んでゐる伯母さんの家へ手頼つて行つた。その伯母さんの亭主と云ふのは製本職で、以前は相等に繁昌してゐたが、どうしたのか御得意がメツキリ減るやうになり、

それからと云ふもの無闇と自棄酒を飲み出して、工面の出來る限りは皆銘酒屋へ注ぎ込んで了つた。それで伯母さんは自分で小さな洗濯屋を開き、子供やそのヤクザ亭主を抱へながら、辛つとその日その日を過してゐるのだつた。カチユーシヤにも洗濯女になつて手傳つては何うかと勸めたが、洗濯女の辛い慘目な生活を見ると、彼女は迚も、その氣にはなれないので、仕方なしに到頭慶庵へ頼み込んだ。すると、もう中學に通つてゐる二人の子供のある、或女戸主の家に口が見附かつたが、其處へ這入つて辛つと一週間經たぬ中に、又一番總領の口髭の生えた肥つた青年が、勉强はそつちのけにして、カチユーシヤの臀を五月蠅く追つて廻るやうになつたので、少しの油斷もならなかつた。所が早くもそれと感付いた母親は、罪を、すつかりカチユーシヤに負はせて、彼女を追出して了つた。

カチユーシヤはまた、色々と口を探して廻つたが、思ふやうに見付からないので、驕樣ことなしに再び慶庵へ頼みに行つた。すると丁度其處へ、露はなむつくり肥つた腕にぎら〳〵光る腕輪をはめ、指にも一杯指環をきらめかした女が來合せて、カチユーシヤが奉公口がなくて困つてゐると聞くと、では自分の家へ相談に來ては何うかと勸めて、その住所書などを呉れた。それでカチユーシヤは、兎も角其の家を訪ねて見ることにして出掛けて行つた。

その女は、非常に丁寧に迎へて呉れて、菓子や甘い酒などを出してもてなしながら、其の間に、何か手紙を書いて、誰に渡すのか、召使に持たせて出した。

夕方になつてから、灰色の頭髮を長く延して、白い鬚を生やした、脊の高い男が這入つて來るなり、無氣味な眼でじろりとカチユーシヤの顏を見て、ニタ〳〵と笑ひながら、すぐその傍に坐り込んで、

そして無遠慮に巫戲け出した。

軈て女將はその男を次ぎの間へ呼んで、「田舍から出たばかりで、まだ眞の初心な娘ですから」と云つてゐた。次にカチユーシヤを呼んで、あの旦那は作者で、澤山金があるから、氣に入りさへすれば、幾らでも金を出す人だと云つた。そして幸ひ氣に入つたと云ふので、早速二十五ルーブリで話が纏つた。でも、洗濯屋の伯母さんへ、屋根代や賄料を拂つて了ひ、殘金で帽子やリボンや其他色々なものを新しく買はねばならなかつたので、二十五ルーブリの金は忽ち失くなつて了つた。四五日經つと作者の旦那から迎へが來た。行つて見ると、旦那はまた二十五ルーブリ與へて、別の家に引越せと云つた。

旦那から借りて貰つた部屋の隣りに若い氣さくな店員が一人ゐたが、それとカチユーシヤとは何時の間にか出來合つて了つた。彼女は旦那にすつかりその事を打ち明けて、小じんまりした自分達の世帶を造り、それへ引越すことにした。所が、結婚すると約束をしたその店員は、或日突然彼女には何とも云はずに商賣のためニージユニイ・ノヴゴロドへ行つて了つた。てつきり捨てられて了つて、カチユーシヤは一人置き去りを喰つた譯である。で彼女はこれから獨立で世帶を續けようと思つたが、それには黃色の鑑札（賣淫婦の）が必要だし、又健康診斷も受けねばならぬと警察から通告があつたので、仕方なく又伯母の家に轉げこんだ。その綺麗な着物や、帽子やマンテルなどを見ると、今度はもう伯母も、洗濯女になれなどとは勸めなかつた。伯母は何も彼も樣子が判つたので、全く姪には一目置いて了つたのだつた。カチユーシヤも亦、今度は、洗濯女にならうかなるまいかなどと云ふ迷ひは

起らなかつた。

石鹼の湯氣が一杯立ち罩めて、それが窓から濛々と絕えず吐き出されてゐる非常に暑苦しい仕事塲で、顏の蒼褪めた、中にはもう肺病に罹つてゐるらしい洗濯女などが一所懸命になつて、その瘠せ細つた腕で、洗濯したり、熨斗したりしてゐるのを見ると、彼女は、自分も亦さうした同じ運命に落ちるのではないかと恐ろしく思ふのであつた。然しこんなことを考へてゐたのは、旣に彼女がたゞ一人の保護者もなくて危い瀨戶際に立つてゐた時なので、遂に彼女は女街に捉らねばならなくなつて了つたのだ。

カチユーシヤは少し以前から煙草を喫み始めてゐたが、例の若い店員から捨てられて以來は、更に自棄酒をひどく飮むやうになつた。

それは、酒の芳醇が彼女を魅するのではなく、彼女は只だ自分が受けて來た悲痛な思ひ出を一時も忘れたいために呷るので、素面でゐると、何うも自分が耻かしくて悲しくて耐へられないが、醉つてゐると心のわだかまりがぱつと散つて、氣が何となく大きくなるからであつた。

女街は、色々おいしかりそうな土產を持つて來て、それで伯母さんの前は巧く繕ひ、カチユーシヤへは別に酒を用意して來て、それを二人して飮みながら、都會の大きな遊女屋で稼ぐと收入が澤山ある上に、色々と面白いことも少くないなどゝ說き立てた。カチユーシヤは、多くの男に附き纒はれたり、少し油斷すると飛んでもない慰みものになつたりして、隨分踏みつけにされて來た今迄の女中奉公を、尙ほ此の後とても續けたものか、それとも、法律で許され一般に公開されて、良い金儲けも出來、

そして男との關係も公然な、さうした安全な確實な境涯に身を置いたものか、その何れかを擇ばねばならなかつたが、彼女は遂に後者に決めて了つた。愬うなれば、或は自分を最初に手籠めにした公爵や、自分を騙した若い店員や、其の他自分を愚弄した奴等へ、せめてもの面當にならうかとも思つた。それに尙ほ、彼女の心を誘つて愈々それと決心させるに至つたのは、女街の話によると、衣服の贅澤が思ふさま出來て、天鵞絨でも絹でも繻子でも、胸開きの舞踏服でも、自分の好み次第だと云ふことだつたからである。胸開きで、短い袖がついて、黑天鵞絨で緣飾をしたピカピカする黃色い絹物にくるまつた自分を想像すると、彼女はもうすつかりそれに迷ひ込んで、到頭女街から黃色の鑑札を受取つて了つた。其の晚、女街は辻馬車を驅つて、有名な遊女屋、カロリン・アルベルトワナ・キターエワへ、カチユーシヤを連れ込んで了つた。

その日からカチユーシヤは遂に人間の道、神の敎へにも背いた泥水稼業を始めるやうになつた。勿論それは、他にもまだ幾十萬と云ふ女がそれを營み、政府でも公衆の衞生を慮つて、特に注意を與へながらそれを公許してゐるのであるが、然し一度その生活に這入つた者は十中の八九は、惡い病氣を受けて、早く衰へ早く死んで了ふのであつた。

夜遲くまでの躁宴のために、翌日は何時も午後までぐつすり眠込んで了ふ。三時か四時頃やつと汚い寢床から疲れ切つたやうにして起きて來る。曹達水や珈琲を飮む、それから寢衣姿のまゝで部屋の中をたゞぶらぶらと步き廻る。カーテンの陰から窓越しに戶外をじつと慵さうに眺める。互に譯もなく喧嘩をする。それから身體や髮を洗つて香水をふりかけ油を塗りつける。衣服の吟味をする。その

事で女將と云ひ爭ふ。鏡の前へ行つて、顏や眉を彩る。食事には甘いものや脂つこいものを食ふ。軈て、肉體の大部分を露して華美な絹の衣裳をつけ、華やかに飾り立てた、電氣の光のキラ〳〵と眩い大廣間へ出る。それからお客が登樓る。囃子し立てる。踊り廻る。そして、お終ひにはお客と一緒に臥る。老人、中年、青年、青春期の若者、老いほれ爺、獨身者、女房持ち、商人、手代、アルメニヤ人、ユダヤ人、韃靼人、金持ちもあれば貧乏人もある。弱々しい者もあれば頑丈な者もある。醉拂ひもあれば素面な者もある、軍人もあれば官吏もある。大學生もあれば、中學生もある。ありとあらゆる階級、年齡、性質、何慶者とも臥なくてはならぬ。

怒鳴る。巫山戯る。口論が始まる。囃子が鳴る。煙草よ酒。酒よ煙草と、夕方から夜明けまで騷ぎ續けて、辛つと疲れ切つた揚句、ガツカリしてぐつすり睡込んで了ふ。恁うして同じ事が毎日毎週續く。そして、一週間の終り目には皆警察署へ出頭せねばならぬ。其處には政府雇ひの醫者が數人、中には眞摯な嚴格な者もゐるが、中には戯み半分な奴も居て、人間ばかりでなく、動物にさへ、その罪惡を愼むやうに天が特に賦與したその羞恥の情を蹂み躙り、それ等の女達を檢査して、更にまた一週間、尙ほ罪を犯すに可能な許可を與へるのである。かくて又、同じやうな恥を重ねて一週間が繰り返される。そして、毎晩、夏も、冬も、働き日も、祭日も、彼等は休むことがない。

カチユーシヤは斯うして七年の間過した。その間彼女は、一二度住み替へをして、一度は病院に入院つたこともあつた。然るにその廓生活の七年目に、端なくも一事件が起つて、入牢せねばならなくなつた。それが乃ち三ケ月以上も盗人や人殺しなどゝ一緒に呼吸の塞るやうな監獄の空氣の中に監禁さ

れて、今辛つと法廷に引き出されて調べを受けようとしてゐることである。

三

マースロワが、二人の兵士に護送されて、遠い道を草臥れ足を引き摺りながら、辛つと裁判所に着いた時、最初彼女に手を附けたドミトリイ・イワーノウイチ・ネフリユードフ公爵は、まだ自分の家で、高い寢臺の上に横になつてゐた。綺麗な、よく熨斗の當つた麻の寢衣を着て、彈機仕掛の寢床に、羽布團にくるまつて、煙草を燻しながら、昨日起つた事や今日せねばならぬ事などを考へてゐた。

世間では、金持貴族のコルチヤーギン家の娘と彼とが結婚するやうに專ら噂してゐるが、彼は丁度昨宵、そのコルチヤーギン家で過した樂しい事を思ひ出すと、ほつと溜息を吐き、煙草の吸半をほいと投げ捨て、又新たに銀製の紙莨函から一本取り出さうとしたが、不圖氣を變へて、滑つこい眞白な足を伸してスリツパを穿き、絹の閨衣を幅廣い肩に引懸け、ドシン〳〵と少し早足に、オウドコロンや香水の香の漂ふ化粧部屋へ這入つて行つた。彼は齒を（幾本か入れ齒してあつた）丁寧に磨いて、エリキシルの香をつけた水で口を嗽いだ。それから又好い香のする石鹼で手を洗ひ、長い爪を殊更念入りに磨き、大理石の洗面盤で顏や太い頸筋を洗つて了ふと、今度は、灌水浴の支度がしてある第三の部屋へ行つた。肥えた白い逞しい身體にザアツと冷水を浴び、粗いタオルですつかりそれを拭き乾かし、綺麗な胴着を着、靴を穿き、それから鏡の前に立つと、眞黒な髭と、額の上の方が少し薄くなりかゝつてゐる縮れ毛の頭髮へ櫛を入れた。

彼が常に使用つてゐる物、彼の化粧に要る物は、襯衣にしろ、着物にしろ、靴にしろ、ネクタイやピンや飾紐釦などにしろ、總て皆最上等の物で、高等で、便利で、保がよくて、値の高いものばかりである。十種も違つたネクタイやピンの中から、彼はどれと云ふことはなしに手當り任せに一つを取り出すのだが、然し之等の物は、今こそ恁麼風に、全く無頓着に扱はれてゐるけれども、一度は何れも眼新しくて彼の氣に入つたものばかりである。

ネフリユードフは、塵埃を拂つて、ちやんと椅子の上に支度してある衣服を着て、更に容子を直し、香水を振りかけて、食堂へ入つた。前の日に、男が三人がゝりで床を拭き込んだと云ふ長方形の食堂には、獅子脚の大食卓と、對の大戸棚が並んでゐた。大きな組合せ文字の附いた、綺麗な、糊の利いたクロースのかかつた卓の上には、香氣の高い珈琲の一杯入つた銀製の珈琲壺や、砂糖壺や、熱いクリームの罎や、出來立ての卷麵麭だの、乾餠だの、ビスケットだのが一杯入つてゐる麵麭籠などがあつて、其の傍には、一番新しい號の「兩世界雜誌」と新聞と數通の手紙とがあつた。

ネフリユードフが丁度手紙を開封しようとする途端、喪服を着てレースの帽子を被つた、でつぷり太つた中年の女が、スウッと部屋に這入つて來た。此の女はネフリユードフの母の召使で、アグラフエナ・ペトロウナと云つた。ツイ此の頃母堂が亡くなつたので、此の女が家事取締として殘つてゐるのだつた。此の女はネフリユードフの母堂と曾て十年間ばかり外國で暮してゐた事があるので、そのすべての樣子がすつかり貴婦人然としてゐた。

そして尙ほ、此の女はネフリユードフの幼時の時から一緒にゐて、彼がミーチエンカと呼ばれてゐた時から知つてゐるのであつた。

『御早う御座います、ドミトリー・イワーノウチ樣』

『御早う、アグラフエナ・ペトロヴナ。何か用かい？』と、ネフリユードフは訊ねた。

『コルチヤーギナ樣からの御手紙で御座います。奧樣からで御座いますか、お孃樣からで御座いますか、それは存じませぬが、使が先刻から私の部屋で待つてをります。』と、答へながら、アグラフエナ・ペトロヴナは意味あり氣ににつこりして、その手紙を渡した。

『では、今暫く待つように左樣申しますで御座いませうか』アグラフエナ・ペトロヴナは恁う云つて、落ちてゐる机拂ひを拾つて部屋を出て行つた。

ネフリユードフは、薰りのする手紙の封を切つて讀み始めた。それは、濃い鼠色の端切らずの紙葉に書いたので——

（あなたの記憶掛りの御用として、一筆御注意申し上げます。本月四月二十八日は、あなたは陪審員として裁判所へ御出ましにならねばなりませんのでした。それで、あなたがいつもの安受け合ひで、昨日御約束なさいました、コロソフ樣及び私共御同伴の美術館行きは、自然御流れと云ふ譯になります。裁判所へ御出でにならないと、いつぞやあなたが、馬をお求めなさるにさへ御躊躇遊ばしたと云ふ三百ルーブリの大金を罰金としてお收めにならねばなりませぬ。昨晚あなたが御歸り遊ばしてから不圖思ひ附きましたもので、取り敢へず御知らせ致します。マリヤ・コルチヤーギナ）

尙ほ追白があつて、

（今晩の晩餐は夜分まであなたの御席を保つて置きますからと、母の傳言で御座いました。御用お濟み次第、是非とも御出で下さいまし、御待ち申してをります）

ネフリユードフは、顏を顰めた。此の手紙は、コルチヤーギナ令嬢が、眼に見えない糸で、緊く〳〵ネフリユードフを搦めつけようとして、二ケ月の間絶えず行つて來た巧みな操縦の繼續であつた。けれども、青春の時を過して了つた者は、餘程の戀愛に落ちない限り一般には兎角結婚することに逡巡し勝ちであるのに、更にネフリユードフには、それと決心してゐても尙ほ結婚の申込みの出來ない十分な理由があつた。それは十年以前、彼がマースロワを手籠めにして、そのまゝ見捨てゝ了つたことを氣にしてゐるからではない。そのことは、彼はもう全く忘れて了つてゐたかち、その理由にならなかつた。實を云ふと、それは或主ある女と關係してゐたからであるが、それも實は、ネフリユードフ自身では既に關係を斷つてゐるつもりであつた。けれども女の方では中々さう思ひ切つてはゐなかつた。

ネフリユードフは、女には寧ろ臆病の方であつたが、その非常に臆病な所につけ入つて、彼が選擧に出張した時、貴族長の不品行な妻君が、彼をたらし込んだのであつた。その女は、彼に嫌はれるやうになればなるだけ、益々彼に絡み附いて、愈々深い情交の中に彼を引き摺り込むのであつた。その執拗な誘惑にツイ惹き入れられながら、ネフリユードフは、遉に罪深く心に責められてゐたが、さりとて、その女が本當に承知しないのを、無理に切れようとする勇氣も出なかつた。で、實は、彼の心には十分その氣はあつても、ついそのためにコルチヤーギナ令嬢へ結婚の申込みは出來なかつた譯である。

卓上に置かれた數通の手紙の中に、端なくもその女の良人から來たのがあつた。その手蹟と消印とで早くもそれと知るとネフリユードフは、思はずさつと顏を緋くしたが、けれども多くの人は、愈々危險の瀨戸際に立つと却つて度膽が据るやうに、彼も亦、却つてそのために全身に一種の緊張を覺えるのだつた。

だが、この昂奮は直ぐ消えて了つた。ネフリユードフの大領地のある地方を管理してゐるこの貴族長は、たゞネフリユードフへ、五月の末頃臨時會議があるので、その時は、學校道路等に關する重要議事が論ぜられ、それに對して反對黨の大運動もあるから、是非とも御出席の上、御援助を請ふと云ふことを知らせて來ただけであつた。

貴族長は自由黨の人で、その同志と團結してアレキサンドル三世の旗下に集つた反對黨と爭ひ、その家庭の不仕末などには全く氣附かない程、それに熱中してゐるのだつた。でも、ネフリユードフはこれまでこの男と一緒にゐた時などは、遉に氣咎めがして、色々恐ろしい氣持のしたことなどを思ひ出すのだつた。

或時は、この男が遂に自分と妻君との醜關係を發見して、決鬪を申し込んで來た場合などを考へ、その時は、自分は、ピストルを空中に放さねばならぬなどゝ覺悟をきめてみたりした事もあり、又或時は、實際に、愈々手切れを申込んだ時、女が失望落膽の餘り、池にはまらうとして、公園の中へ駛け込んだので、その後から又自分も追駛けて行つたやうな、あの慘憺たる演劇的な光景をも思ひ起すのだつた。

『さうだ、これはすぐ出掛ける譯には行かぬ。あの女に一應問ひ合せなくては、何うも出來ないことだ。』と、ネフリユードフは恁う考へた。一週間前に、彼はきつぱりとした手切れの手紙を女に送つた。それには、今迄のことは、總て自分の罪であるから、それに對しては、如何なる責めをも喜んで受けるが、同時に又、これまで彼が屢々云つたやうに、彼女自身の爲めでもあるから、この際斷然二人の關係を綺麗に斷つて了はうと云つてやつたのである。然しその手紙の返事を彼はまだ受けてゐなかつた。けれども、その返事が來ないのは、實は好い前兆でもあつた。と云ふのは、もし彼女が別れるのに不服ならば、これまでの例だと、直ぐ返事をよこすか、でなければ、自分で出掛けてさへ來る筈だつたからである。近頃噂に聞くと、その女は、又或士官にはまり込んでゐるとか云ふことで、それを思ふと、ネフリユードフも遉に少しは嫉妬るのであつたが、同時に又、今迄手古摺つて苦められて來た關係から、愈々逃れることが出來るのだと思ふと、ほつと安心されるやうな氣がするのだつた。

も一つの手紙は土地管理人から來たのであつた。それには、土地相續を確定するために是非とも出張して頂かねばならぬと云ふ事、尙ほ、土地は御母堂御生存當時と同樣に處理す可きか、それとも、自分が豫ねて御母堂御生存中にも屢々獻策し、今又更めて新主人に對しても御賢慮を煩し度いところの多大の收益を增す方法――、卽ち今迄百姓に貸付けてあつた土地を悉く引上げて、此方の手で耕作栽培する方法を取るか、どちらにしたものであらうと云ふ事であつた。更に彼は此の第二の方法は、財產を增殖するに最も好い手段であることを念押し、同時に、月初めに這入る筈だつた三千ルーブリを送達することの出來なかつたことを詫び、それは次便で送るとし、延滯の理由は、近頃百姓が中々橫

着になつて、お上の手を借りなければ、容易に金を納めなくなつたからであると云ふのだつた。

この手紙は、ネフリユードフには頗る愉快なやうでもあるし又不快な氣持もした。彼はそれ程大きな土地を支配するのだと思ふと愉快でもあつたが、然し又、彼は一方に於て、ハーバート・スペンサーやヘンリー・ジョーヂなどの熱心な崇拜者であつたから、何だかそれが不快な氣もするのであつた。スペンサーがその社會平衡論で、正義は土地私有を非なりとした如く、ネフリユードフも亦その青年時代には客氣に驅られ、それに習つて土地所有を罪惡なりと公言し、大學の卒業論文にもその事を書き、そればかりか、實際に彼の確信を行つて、父から直接に相續して母には全く關係のなかつた五百エーカの土地は全部百姓に呉れて了つたことさへある。然るにその自分が、今は大財產を母から相續して、その非難すべき地位に立つてゐることを思ふと遉にギクリとされるのであつた。斯くの如く母の廣大な土地を相續して、大地主になつた彼は、十年以前、父から貰つた土地を弊履の如く捨てたと同樣に、今度も亦それを捨てゝ了はねばならぬか、それとも、彼の以前の思想は誤つたものとして、そのまゝ無言でをさまつて了ふか、その何れかを擇ばねばならなくなつた。

所が、彼は官に奉仕する事は嫌ひだし、尙ほ何うしても改めることの出來ないこれまでの贅澤な習慣は滲み込んでゐるし、そんなことで、所詮土地の收入を外にしては、彼の豪奢な生活はたつて行かなかつた。で、今は、その土地を捨てる譯には行かなかつた。そして又彼には、鞏固な確信や、青年の客氣や、異常な大事業をしようと望む野心などは遠うの昔消えて了つて、さうした氣力はもう失くなつてゐたが、けれども亦、そのまゝ財產を相續してをさまつて了ひ、スペンサーの社會平衡論に書か

れた明白な疑ふ可からざる土地所有の不正な眞理、又近頃讀んだヘンリー・ジョーヂの著述の中にも論じてある、それに就ての動かす可からざる確證を打ち消して了ふ譯にも行かなかつた。

土地管理人の手紙が彼に不快を與へたのはつまりこの理由であつた。

四

珈琲を飲み終ると、ネフリユードフは、召集狀を探し出して、裁判所への出頭時刻を見、それから公爵令嬢への返事を書かうと、書齋の方へ立つて行つた。そして、その通路になつてゐる畫室を通りながら、不圖畫架に掛かつた自分の未成畫と壁に吊るした習作畫を見ると、つく〴〵その拙さ加減に吾ながら愛想がつきて、迚も藝術で立つ資格のない事を思つた。

彼は近頃屡々さうした感情に襲はれるのだつた。そして、それは畢竟自分の審美眼が餘り高上したからだと辨解もして見たが、矢張り何となく不安な感じがした。七年前彼は、自分には美術の才能があると信じて、斷然軍隊を去り、そして、その審美的眼識の高所から、他の一切の事業を總て白眼視して了つてゐた。所が今は、それも見當違ひであつたことに氣がつくと、それに關する、色々殘つた物までがすべて不愉快の種となつた。で、彼は、生中贅澤に飾り立てた畫室を見ると、氣がさして不愉快な感じがするので、急いで其處を通りぬけて書齋へ這入つた。書齋は、廣々として天井が高く、立派な裝飾が施してあつて、すべてが心地よく、便利に出來て居た。

彼は、すぐ、彼の大きな書檯に「緊急」と貼紙してある鳩穴（書類手紙類を入れ置く書卓に取り付けてある小棚）から召集狀を

見付け出した。彼は十一時に裁判所へ出頭せなければならぬことになつてゐた。

ネフリーユードフは、書檯の前に腰を下ろして、公爵令嬢へ、招待を受けた御禮と、晩餐には御邪魔に上りますと云ふ返事を書かうとした。が、最初のは餘り馴れ〳〵しく書き過ぎたので、引き裂いて了つた。すると、二度目のは、餘り素氣なく書いて了つたので、之も亦引き裂いて了つた。で、彼は電話の紐釦を押すと、澁面の、頬鬚だらけで、顎と口の周圍だけを剃つた、年老けた召使の男がエプロン姿で、部屋に這入つて來た。

『辻馬車を呼んで呉れないか。』

『はい、畏りました。』

『それから、コルチャーギナさんの使が待つてゐるから、その人に、「御招待態々有難う御座いました、何れ御邪魔に上りますから」と、さう申して置け』

『畏りました。』

『返事を書かぬのは失禮だが……なあに、何うせ今日會うんだから』と考へながら、彼はォバーコートを着に立つた。

玄關へ出ると、豫て顏馴染の馭者が、護謨輪の辻馬車を用意して待つてゐた。

『實は、昨晩、コルチャーギナ公爵様の御邸へ、御前様を御迎へに上りましたので御座いますが……』と、馭者は半ば馬車を回轉させながら恁う云つた。……『すると玄關番の瑞西人が、（もう御歸りになつた）と申しました。』

馭者は、昨晩、ネフリユードフが、コルチヤーギン家を訪ねたことを知つて、その歸りを狙つて迎へに行つたものらしかつた。

「此奴まで、俺達の關係を知つてゐるのだな。」と、ネフリユードフは思つた。すると、また、コルチヤーギナの令嬢と結婚したものか何うしたものかと云ふ問題が頭を擡げて來たが、然しこの解決は、現在胸中にわだかまつてゐる色々な他の問題よりは一番難しいものであつた。

一般に結婚の利益と云へば、家庭の樂みが增し、生活が道德的に秩序立ち、殊に家族——子供をさすのだ——それが、ネフリユードフも豫て望んでゐた如く現在の彼の空想たる生活に一個の目的を與へることである。そして、その不利益な點は、わけても青春の時を過して了つた獨身者などが殆ど皆共通に逡巡する點は、何れもその今迄の自由が失はれるからで、それに又、女と云ふ奇妙な動物に對する一種無意識的な恐怖があるからである。

でも、ミツシイ（實はマリヤと云ふ名だが、或範圍の人達からはさう呼ばれてゐた。）と結婚するとして、此の特別な場合を考へて見ると、さすがに彼女は上流の家庭に育つたゞけ、その步み方なり、話し振りなり、笑ひ方などまで、すべてのものごしが、他の普通一般の者などとは違つてゐた。特別に何うと云ふのではなく、たゞ良い育ちと云ふその生れながらにして備つた品位が、ネフリユードフには、何よりもひどく感服されたのであつた。のみならず、彼女は、ネフリユードフに深く思ひ込んで、又彼をよく理解してもゐた。その彼に對する理解、乃ち彼が普通の人とは異つてゐる所を理解すると云ふことが、彼女の見識や判斷の勝れてゐるのであると、ネフリユードフには思はれ

た。けれども亦、特に彼がミツシイとの結婚を危ぶむのは、世間にはまだ、マリヤよりもつと性質の良い娘が居ないとも限らないし、それにマリヤはモウ二十七歲と云ふのだから、ネフリユードフが果してその最初の戀人であるか何うか疑はれるからであつた。この疑ひは、彼には餘り好い氣持がしなかつた。それは過去の事だつたにしても、彼女がこれまで他の男を戀したことがあると考へることは彼の誇りが許さなかつた。彼女は自分がネフリユードフと知り合ひにならうとは、最初から知つてゐた譯でもあるまいから、して見ると、彼女は尙ほ他の男にも戀することが出來るのだと、恁う思つて來ると、彼は矢張り面白くなかつた。さうした譯で兎に角どちらにも相等な理屈があるので、結婚したくもあり、又したくもなかつたりして。彼は迷ひに迷つたが、遂には自分ながら何だか、寓話の中のどの秣を食はうかと愚圖ついてゐる螺馬みたいな氣がして、思はず苦笑するのだつた。

「何れにしても、ワシイリエヴナ（貴族長の妻君）から返事が來て、はつきり關係がついて了ふまでは、何ともすることが出來ない」と彼は一人言した。そして、それまでは自分の決心を延さう、いや延ばさねばならないと云ふことが、却つて彼には樂しみのやうにも思はれた。「まあ後でゆつくり考へ直さう」と恁ふ一人で呟いた時、馬車は丁度靜々と音も立てずに、アスフアルト道の上を辷つて裁判所の門口にさしかゝつた。

「さあ、お勤めだ。又いつもの通り十分心を入れて、爲ることにするかな。それに恁う云ふことは時には面白い事もあるて。』

門衛の傍を過ぎて・彼は裁判所の玄關へ這入つて行つた。

五

裁判所の廊下は、もう何處も皆、非常に混雜を極めてゐた。廷丁は息を切らして、足を引き摺りながら、色々な命令書や公文書などを持つて、忙はしなく往きつ戻りつしてゐた。廷吏や、辯護士や、判事なども、あちこちと往來してゐた。告訴人や拘留されない被告人などは、ふさぎこんで、壁に添うてうろついたり、又は腰を掛けたりして開廷を待つてゐた。

『法廷は何處だい。』と、ネフリユードフは廷丁に尋ねた。

『民事ですか、刑事ですか、どちらです。』

『俺は陪審員だが。』

『では刑事ですね。右へ行つて左へ御曲りなさい――その二階です。』

ネフリユードフは、指さゝれた方へ行つた。すると、その敎へられた方の戸口の所に二人の男が開廷を待ちながら立つてゐた。一人は背の高い、肥つた紳商で、柔しさうな男で、幾らか飲んだと見え、非常な御機嫌である。も一人は猶太人上りの店商人であつた。彼等が丁度毛の相場に就て語り合つてゐるところへ、ネフリユードフが上つて來て、此處は陪審員の部屋ですかと尋ねた。

『えゝ、さうです。貴方も私達の御仲間ですか。陪審員でいらつしやいますか。』と、その紳商は愉快さうに目瞬きして尋ねた。

『では、御一緒に御願ひ致します。』ネフリユードフが輕く頷くと紳商は尙ほ恁う續けて云つた。

『私は第二同業組合の商人でバクラショーフと申す者です。』と云ひながら、幅廣い柔かなしなくした手を差し出し、

『何うか何分宜しく、失禮ですが……』

ネフリユードフは自分の名前を名告つてから陪審員の控所へ這入つた。

控所には、他に色々違つた人達が十人ばかりゐた。皆著いたばかりの所と見え、或は腰掛けてゐる者、或は歩いてゐる者、互に顏を見合せて近づきになつてゐる者など樣々であつた。制服を着た退職大佐や、フロックコートの者や、モーニングコートの者や、又中には百姓服を着たものも一人ゐた。彼等は皆、公務を勤めると云ふ外見で滿足さうな顏をしてゐたが、大方自分の仕事を放擲して來たので、愚痴もこぼしてゐた。

それ等の陪審員達は天氣のことや、早くも陽氣になつたことや、事業の思惑など語り合ひ、又中には紹介し合つたり、誰れ彼れの月旦をし合つたりしてゐる者もあつた。所へネフリユードフが這入つて來ると、彼等は如何にも名譽の如く、吾先きにとあはてゝ挨拶した。ネフリユードフは、何時も、知らぬ人の中に這入ると、かうした尊敬を受けるのが、當然なことのやうになつてゐた。それは一體何故だらうと聞かれたら恐らく彼には返答が出來なかつたらう。彼が萬人に勝れてゞもゐるのなら格別だが、殊に近頃の彼の生活は、決して、特に取り立てて云はるべきものではなかつたからである。衣類に彼も、英語や佛蘭語や獨逸語などに精通して、それを立派に話したり、又、上等の襯衣や、衣服や、ネクタイや、飾紐釦など、高い價を出したそれ等の贅澤品を身に着けたりしてゐることが、崇

人に尊ばれる理由とは思はなかつた。けれどもそれと同時に彼は、腹の中では矢張り、自分が勝れてゐると皆から思はれ、又尊敬を受ける者だと云ふ觀念が失せきらないので、ひよいとして尊敬を受けそこなうやうなことがあると、餘り好い心持はしなかつた。所が彼は、この陪審員の控所で、端なくもさうした不遜な目にあつたので、氣持を惡くした。陪審員の中に、計らずも彼は、以前彼の妹の教師であつた、ピョートルと云ふ見知つた男がゐるのに氣がついた。ネブリユードフは、別に氣もかけてゐなかつたので、この男の苗字が何と云つたかは一向知らなかつた。

この男は、今は中學校の教師をしてゐるのだつた。ネフリユードフは、この男の餘りに狎れ〳〵しい、人もなげな笑ひ方をするのが――一口に云へばその野鄙さ加減がたまらなく厭やだつた。

『はつ〳〵、君も捕まりましたネ。』と、破れるやうに笑ひながら、態う云つたのが、彼のネフリユードフへ對する挨拶であつた。

『矢張り君にも逃げられないんだな。』

『僕は逃げるやうなことはしない。』

ネフリユードフは、嚴格な調子で、重々しく答へた。

『成程、それは公德心と云ふものだね。だが、腹が減つたり痛くなつたりすると、君だつて、又他の文句が言ひ度くなるよ。』

『此の坊主の二才め、次ぎには汝とでも言ひ兼ねないだらう。』と、ネフリユードフは、親戚の者が皆死に絶えたとでも聞かされた時のやうな不快な暗い顏をして、つと其處を立ち去つた。そして綺麗に

髯を剃つた脊の高い容體振つた紳士が、非常に快活さうに何か頻りと氣焰を上げてゐるのを取り卷いてゐる團體の中へ這入つて行つた。その紳士は、今現に進行中の、民事の裁判に就て、それは特に自分がよく知つてゐると云ふ顏付で、裁判官や有名な辯護士を名前と苗字とで呼びながら語つてゐた。それは、一人の老婦人が自分の方に十分の權利がありながら、有名な辯護士の巧妙な奸計にかゝつて、却つて相手に大金を拂はねばならぬやうになると云ふ奇怪な話であつた。

『何とその辯護士はえらい腕前でせう。』と、その紳士は云つた。

一同は感心したやうにして熱心に聽き入つてゐた。中には何とか嘴を入れようとする者もあつたが、然しその容體振つた紳士は、すぐそれを遮つて、これは何うしても自分一人でなければその眞相は知らないと云つた顏付をした。

ネフリユードフは遲れて來たのだが、それでも倘ほ何時まで待つても法廷は始まらなかつた。それは、何でも係りの裁判官がまだ一人來ないからと云ふので、皆待たせられてゐると云ふことだつた。

六

裁判長は早くから出勤してゐた。彼は、脊の高い、でつぷりした男で、灰色の長い頰髯を生やしてゐた。彼は妻君持ちではあるが、至つて圖法螺に育つて來たので、その家庭は、妻君も亦同樣に、無節操で、迚も秩序立つて眞面目な生活は出來なかつた。實は、今朝方、彼は、以前自分の家に仲働きをしてゐた瑞西生れの女が、今度露西亞からペテルブルグへ行く途中でよこした手紙を、受け取つたのであ

つた。それには、イタリーホテルで五六日間お待ちするから是非とも來て呉れとしてあるのだつた。それで彼は、なるべく早く開廷して公務を片附けて了ひ、それから、あの去年の夏、田舍で妙な關係になつた、その赤い髪をした、クラヽ・ワシイリエヴナと、六時前に會ふのだと氣をあせりながら早出をして來たのである。彼は私室に籠つて、戸に錠をかけ、戸棚から啞鈴を出し、前後、上下、左右へ二十度ばかり腕を振り廻はし、それから頭の上へ啞鈴を高く差し上げ、輕く膝を三度折つた。

『冷水浴と體操のやうに氣持の好いものはないテ。』恁う云ひながら彼は、左の手の金の指環を嵌めた第三指で、右の腕の上膊筋を撫でた。彼は、長い間坐らうとする前には、何時も二種の運動をやるのが例だつたので、今一度、旋回運動をやらうと用意してゐると、誰かコツ〱と戸を敲く音がした。

裁判長は早速啞鈴を投げ捨てゝ、戸を開けながら、

『ヤあ、失敬』と云つた。

同僚判事の一人で、怒り肩の、いかつい顔に金縁の眼鏡をかけた男が這入つて來た。

『マトウエイ・ニキイチッチの奴郎、まだ出勤しないよ。』と、彼は、不平さうな調子で云つた。

『まだ來ない？』裁判長は制服を引掛けながら、

『彼奴は何時も遲れるんだね。』

『圖々しいにも程があるよ。』同僚の男は、ぷん〱憤りながら腰を下ろして紙莨を取り出した。

此の男は又、餘りに嚴格な方で、今朝もその妻君と何か面白からぬいさかいをして來たのだつた。と云ふのは妻君が月末にならぬ前に金を貰つて了ひ、來月の前借を彼に強請(ねだ)つたところが、彼はそれ

を突つぱねて了つたので　到頭夫婦喧嘩になつたのだつた。妻君は、何も食事の用意がなくてもよければ、それでよござんすと云つてすねて了つた。で、彼は、その位の所で喧嘩を切り上げることにして來た。でないと、何う云ふことでもし兼ねない女だから、又何麼脅迫(おどかし)を食はないとも限らぬと妻君を恐れたからである。

『これは、いつも睦じい眞面目な生活をしてゐるからだ。』と、彼はいつも快活な、健康(じやうぶ)さうな、元氣な、お人好しな裁判長を見ると、恁う思つた。裁判長はその綺麗な眞白い手を上げて肱を張りながら、制服の金モールの笹縁へ蔽ひかぶさつた灰色の濃い頰鬚を撫でてゐた。

『この人は何時も氣樂で愉快さうだが、それにひきかへ、自分は何と云ふ惨めなざまだらう。』

其の時丁度書記が、何か色々の書附を持つて這入つて來た。

『やア有難う。』裁判長は恁う云つて、紙莨に火を點けながら、『何の件から始めるのかね。』

『毒殺事件からです。』書記は無頓著に答へた。

『宜しい、ぢや毒殺事件にしよう。』恁う云ひながら裁判長は、此の事件を四時に終つて、それから出掛けるのだと考へた。

『マトウエイは來たかね。』

『まだで御座います。』

『ブレウエは？』

『出勤しました。』と、書記は答へた。

『では、ブレウエに、毒殺事件を始めるのだと云つて與れ給へ。』

ブレウエは、此の事件を告發した副檢事であつた。

書記は廊下でブレウエに出會つた。ブレウエは肩を聳やかし、小脇に紙挾みをかゝへ、片方の手は掌を廣げて前方に打ち振りながら、どしん／＼と廊下を響かして急いでゐた。

『裁判長が、君はもう仕度はよろしいかと云つたよ。』と書記は訊ねた。

「あゝ、何時でも。」と副檢事は云ひながら、

『何の事件かち始めるのだ。』

『毒殺事件から。』

『それは宜からう。』と、副檢事は云つた。然し實は餘り良くなかつたのである。彼は、昨晩、友達の送別會で、カルタ遊びをやらかし、ホテルで一晩明かして了つたのだつた。朝の五時頃まで、飲んだり賭けたりしたので、勿論彼には毒殺事件を調べる時間はなかつたから、實はこれから調べねばならなかつた譯である。書記はそれを知つてゐたから、態と毒殺事件から始めようと、裁判長に勸めたのであつた。書記は自由主義で、寧ろ急進主義の方であつた。ブレウエは保守主義で、殊に正教派の信徒であつた。それで、書記はブレウエをひどく嫌ひ、又彼の地位を悄んでゐた。

『それから、あのスコプツィ(宗派の名稱)の事件は。』と書記が訊ねた。

『あれは證據がないから駄目だと云つてるぢやないか。法廷でもさう云はう。』

「だつて君、それでは……」

『不可んよ、あれは』ブレウエは態う云つて、ひどく手を打ちふりながら、自分の私室へ駈け込んで了つた。

スコプツィの事件は有力な證據がないと云ふので、延ばされてゐるが、實は、教育ある陪審員の前でその事件を調べると、免訴になりさうだからであつた。それで、この事件は、ブレウエと裁判長が相談の上、もつと無教育な御百姓連の多い地方の裁判所へ廻して、なるべく有罪にして了はうと云ふ下心だつたのである。

廊下の混雑は段々激しくなつて行つた。民事の法廷の入口には一等人が込み合つてゐた。其處では、あの容體ぶつた紳士が物語つた事件が恰も進行中なので、それを聽かうとして皆押し合つてゐるのだつた。

休憩時間となると、法廷から老夫人が出て來たが、この夫人の財産は、それに對して、實際何等の權利もない公事師に頼まれた、中々腕すごの辯護士のために、取られて了ふのである。その事情は裁判官なども皆よく知つてゐた。腕すごの辯護士や公事師などは更によく自分等に何の權利もないことを知つてゐた。けれども、彼等はうまく巧んだので、その老夫人の財産は、何うしても公事師の手に奪はれなければならなくなつて了つたのである。

老夫人は、でつぷりとして、立派に着飾つて、大きな花飾のついた帽子を被つてゐた。入口から出ると立ち止まつて、その短い圓つこい腕を張つて、自分の頼んだ辯護士を振り返り、

『何うしたのでせう？まア』

その辯護士は、夫人の帽子の花飾を見始めたが、然し夫人の言葉はよく聞き取らないで、何か他のことを考へてゐた。

老夫人の後から續いて、その夫人の財産をすつかり巻き上げることにうまく腕をふるつた有名な辯護士が、胸開きの胴衣の下から、糊の利いた廣い眞白なワイシャツを出し、得意な顔附で、早足に、御禮として彼に一萬ルーブリ與へ、自分は十萬ルーブリ以上をせしめようと云ふ公事師と一緒に、法廷から現はれて來た。彼の顔は滿足さうに輝き、多勢の視線を自慢さうに受けながら「決してビクつくにはあたらない」と云つてゐるかのやうに見えた。

七

やつとマトウエイも出勤して來た。すると瘦せぎすで、頸が長く、片道寄りな歩き方をし、そして下唇が一方へ突き出てゐる廷吏が陪審員の控室へ這入つて來た。此の廷吏は、正直者で大學教育を受けた男であるが、酒の癖が惡いために長い間位置が得られずにうろついてゐた。それがついこの三ヶ月前、彼の妻君を最負にする或伯爵夫人の周旋で此の位置を得たのである。それで彼は、後生大事に何時までも此處に嚙り附いてゐねばならぬと願つてゐるのだ。

『皆さんお揃ひになりましたか。』と、彼は鼻眼鏡をかけて一わたりずつと見廻しながら尋ねた。

『お揃ひのやうですよ』と、快活さうな紳士は云つた。

『では、讀み上げて見ませう』

彼は、ポケットから手帳を取り出して、或は鼻眼鏡の中から眞直ぐ、或はその眼鏡越しに上眼をしながら、其處に列つた人々を一人〳〵見詰めて、名前を呼び始めた。

『參議官、ニキフォロフ君?』

『僕だ』と、法廷の事には一切通じてゐると云つた顔の、容體振つた紳士が云つた。

『退職大佐イワーノフ君?』

『ハア』と、退職士官の制服を着た、瘦せた男が答へた。

『第二同業組合の組合員、ピョートル・バクラショーフ君?』

『待つてましたよ』と、氣さくなその紳商はニコ〳〵笑ひながら云つた。

『近衞中尉ドミトリー・ネフリユードフ公爵?』

『僕です』と、ネフリユードフは答へた。すると、廷吏は鼻眼鏡越しにじつとそれを見て、此の人は他の者達とは違つてゐたのだと云はぬばかりに殊更氣色を柔らげて丁寧に腰を屈めた。

『大尉ダンチエンコ君、商業クレショーフ君……』彼は尚ほ恁う讀み續けて行つた。

二人の缺勤者があつただけで、他はすべて出席してゐた。

『では、何うか法廷の方へ』と、廷吏はやさしい手附をして戸口の方を指しながら去つた。

一同は、互に先を讓り合つて、戸口へ出た。そして廊下を通つて法廷へ行つた。

法廷は、廣やかな長く延びた部屋であつた。正面には、三段上ると、高座があつて、そこには、同じ色の房で飾られた綠色のクロースを掛けたテーブルが立つてゐた。そのテーブルには、彫刻のある

高い椏の背の附いた肱掛椅子が三脚据ゑてあつた。その背後の壁には、禮服綬帶で一脚前へ踏み出して、劍の欛を握つた皇帝の全身像の大きな金緣の額が懸つてゐた。部屋の右の隅には、荆冠の基督の聖像の枠が懸つて、その下には、讀經臺が立ち、又その同じ側に副檢事の書檯があつた。左に檢事の書檯と向ひ合つて書記のテーブルがあつた。その下には向ふの傍聽人席と隣り合せに、椏の欄柵を隔てゝまだ空席になつてゐる四人の腰掛があつた。その外、高座の右手は、陪審員の席で、背の高い椅子が列べてあり、その下の床には、辯護士の卓が置いてあつた。これ等の設備はすべて部屋の前部を占めてゐて、後部とは欄柵をもつて區切られてゐた。

後部はすべて傍聽人席になつてゐたが、その席の前の方には、下女か女工らしい四人の女が腰掛けてゐた。又二人の職工もゐたが、何れも皆、この法廷の宏大に威壓されて、ひそ〳〵と囁くばかりであつた。

陪審員が這入つて來ると間もなく、例の廷吏が片道寄りの歩き方で這入つて來て、前へ進み出るなり恰も列席の人達を嚇しつけるやうな大聲をあげて、

『開廷！』と呼んだ。

一同は身繕ひをした。裁判官の面々も高座へ上つて來た。第一番に出て來たのは、逞しい筋骨と、立派な頰鬚を生やした裁判長で、次ぎには、例の陰氣な裁判官が、前よりは更に一層鬱ぎ込んだ顏色をして現はれた。それは彼の妻君の兄にあたる義理の兄弟が、丁度その妹を彼の家に訪ねると、家では食事の用意が出來ないんだからと云つて妹がこぼしてゐたよと告げたからであつた。そして、尙ほその義理の兄弟が笑ひながら、

『つまりお茶屋でやつて來いと云ふんだネ』と附け加へたので、

『笑ひ事ぢやない』と云つて、彼は益々鬱ぎ込んで了つたのだつた。

一番最後に來たのは、何時も遲刻する癖のあるマトウエイであつた。彼は、鬚の多い男だが、大きな、眞圓い、柔しい眼をしてゐた。豫て胃病に惱んでゐた彼は、醫者の勸めで、今朝又新たな治療を始めたので、そのため尙ほ〳〵何時もより遲れたのだつた。所で今、高座へ上つて來る彼を見ると何か考へ込んだやうにしてゐる。一體彼は、何時も自分で判斷のつかない問題になると、妙な占ひみたやうなことで決めて了ふ習慣があつて、今も實は、法廷の入口から自分の席までの歩數を算へ、それが三で割り切れたら、今度の新治療法は胃病に利き目があるのだと、そんなことを考へてゐるのだつた。そして彼は、二十六歩數へたが、それでは割り切れないので、なほ椅子の根つこの所まで數へて行き、辛つと二十七歩にしてホッと安心の息をついた。

燦然たる金モールの制服を着た、裁判長及び裁判官達の姿は、一際目立つて堂々たるものだつた。常人でもさう感じたと見え、恰も自分の壯嚴な扮裝に打たれて悄傈んだ氣持で、急ぎ足になつて、綠色のクロースの掛かつたテーブルの前へ行き、背の高い椅子に腰を下ろした。テーブルの上には、頭に鷲の付いた三角形の文鎭と、一對の玻璃器（休憩室などによく糖果を入れて置いてあるやうなもの）と墨汁壺やペンや紙や、色々種類の違つた削りたての鉛筆が幾本も置いてあつた。

副檢事も裁判官と一緒に來た。紙挾みを一方の小脇に抱へ、一方の手を打ち振りながら、急ぎ足に

窓際の自分の席に行つて、腰を下ろすと、一瞬の間も惜しいやうに一心に書類に眼を通して裁判の始つた時の用意をした。この男は就職してからまだ間がないので、この事件の他に僅か四度の告發をしたゞけであつた。

けれども彼は非常な野心家で、何れこの道で出世しようと堅く決心してゐるから、彼が告發した事件は、是が非でも有罪にして了はねば濟まされなかつた。今度の毒殺事件に就ては、その大體の顚末は知つてゐたし、已に辯論の腹案も出來てゐたが、尙ほ彼は、二三の事實を加へようとして急いでその下拵へにかゝつたのである。

高座の向ふ側に控へた書記は、自分に必要な書類を皆整理して了つてから、昨日手に入れて一度讀んで置いた、檢閲官に禁止されてゐる新聞の論說をまた窃り見てゐた。と云ふのは、その論說に就いて、意見を持つてゐると云ふ鬚面の裁判官と一と議論やらかさうとしてゐたので、さてこそは又初めから讀み直したのであつた。

八

裁判長は書類を一通り見て、廷吏と書記とに二三の質問をしたが、合點が行くと、軈て囚人の出廷を命じた。

欄柵の背後の戸が開くと直ぐ、帽子を被つた拔劍の憲兵が二人、赤ちやけた毛の、斑點だらけな顏の一人の男囚と、二人の女囚とを護衛して這入つて來た。男囚は丈の長過ぎるだぶ／＼した獄衣を著てゐたが、拇指を張つて、兩腕でしつかり横腹を抑へ、これも亦長すぎて手の上へすり落ちて來る袖を支へてゐた。裁判官の方へは眼もくれず眞直ぐに、腰掛を眼がけて進み、他の者が掛けられるやうに十分餘地を殘して、自分はその先端に腰を下ろした。それから始めてその男囚は裁判長の顏をじつと見詰めて、何か囁くかの如く、頰をピク／＼と動かした。續いて這入つて來た女囚も亦獄衣を纏つてゐたが、頭には牢屋の手拭を被つてゐた。この女囚は、然しもう中婆さんで、顏は蒼白く、睫毛も眉毛もなく、眼は赤味走つてゐた。彼女はひどく落ち着き拂つて出て來た。その途端衣服の端が何かに引つ掛かつたのを、彼女は少しもあはてないで、注意深くそれを外して、それから靜かに腰を下ろした。

三番目はマースロワであつた。

彼女が出て來ると、法廷の人達の眼は皆、そちらに向けられて、彼女の白い顏、生々とした黑い眼、獄衣の下からふくらみ上つた胸などを吸ひつけられるやうにしてじつと見詰めるのだつた。

憲兵ですら、彼女がその前を通つて席に着くまでは、じつと見入つてゐたが、不圖氣がつくと驚いたやうに、あはてながら向きかへり、身震ひして、さて正面の窓の方を眞直ぐに見詰め出した。

裁判長は、囚人がそれ／＼席に着くのを待つてゐたが、マースロワが腰を下ろすのを見ると、書記の方を向いた。

何時もの通りの順序で愈々開廷になつたが、先づ、陪審員の出席數を數へ、缺席者を申告し、缺席者から徵收すべき罰金額を定め、免官請願を裁許し、豫備陪審員中から補缺を任命した。

裁判長は、何か小さな紙片を疊んで、それを玻瑠器の一つに入れると、金モールの飾の付いた制服の袖を少しずり上げて、毛だらけの手頸を出し、手品師の格好で、一枚〱その紙片を引き出しては廣げてゐた。が、又元のやうに袖を下ろして敎職に陪審員の宣誓を請うのであつた。

黄ばんだ顏の少し腫んだその老僧は、鳶色の法服を纏ひ、金の十字架と小さな勳章とを下げてゐたが、硬ばつた足を覺束なけに運ばせて、聖像の下の聖書臺まで運んだ。陪審員等は立ち上つて何れも聖書臺へゴタ〱と歩み寄つた。

『何卒、此方へ』と云ひながら、敎職は、その肥つた手で、胸の十字架を押へて、陪審員等が集つて來るのを待つてゐた。

此の僧は、四十五年間職に在つて、もう三年經つと、ついこの間大僧正が祝されたと同じやうな鹽梅に、五十年在職の祝賀があるので、それを準備して待つてゐるのだつた。彼は此の刑事裁判所が開かれた當時から在職してゐて、既に數千人を宣誓せしめたことを非常な誇りとしてゐる。そしてモウ可なりの高齢であるにも拘らず、尙ほ、敎會の爲、祖國の爲、はた又自分の一家の爲、(それは家屋の外、利札附の三萬ルーブリを後に遺さうとして、)職務を續けてゐるのだつた。明かに一切の誓ひを禁じてある聖書に依つて、多くの人の宣誓するのを聞くのは、餘り好い職務ではないが、然し此の坊さんにはそんな考は少しも起らなかつた。彼は一向そんな事には頓着しなかつた。却つて彼は、その職務のお蔭で、上流社會の人達に屢々近接して、その知り合ひになることの出來るのを名譽にしてゐたのみならず、彼は例の評判の辯護士と昵懇になつたのを非常に喜んで、その辯護士が、彼の大きな花飾を

うけた帽子の老夫人を相手取つた事件で、一萬ルーブリもせしめたことにすつかり感歎してゐた。

陪審員達が皆高座の段を昇り切つて了つた時、老僧は、その灰色の禿頭を少し斜にして、その上から脂光りのする袈裟を通して着、さてその髪の毛の薄い頭を後に撫でながら、再び陪審員の方へ向き直つた。そして「さあ皆さん、かう云ふ風に右の腕を擧げて、指をかう一緒に……」と、皺嗄れた震へ聲で云ひながら、むくれたつた手を上げ、拇指と、第二指第三指とで、何か抓む時のやうな輪の形を作つて

『さあ私の言ふ通りにおつけなさい。全能の神に依つて、神聖なる聖書に依つて、吾々の神の活ける十字架に依つて、堅く誓ふ、この裁判に於て……』とかう云つて、一句〱句切りながら『……手を下ろしては不可ませんぞ、これ、このやうに上げて……』と、丁度一人の若い男が手を下ろしかけたのを咎めた。

『この裁判に於て……』

頰鬚を生やして勿體振つた紳士、大佐、紳商、其の他二三の人々は、老僧の指圖の通りに恰もさうすることを好むかのやうに、ひどく熱心になつて、腕を上げ、指を圓くするのだつたが、他の者は、厭や〱ながら上の空でやつてゐた。中には、度外れな高い聲を上げて『何でもかまはぬ、俺は勝手に云つてるのだ』とでも云はぬばかりの者もゐた。中には又、徐ろい低い聲で呟くやうに、然もそれが脅かされでもしてゐるかのやうにおど〱して、老僧の聲の後から續けてゐる者もゐた。或は、指を確り結んで、恰も攫んだものを、それが何だかは判らないが兎に角離すまいとしてゐるやうなものも

ゐた。或は、その指を離したり結んだりしてゐる者もゐた。何れにしても、老悄だけは、最も眞劍な大切な事として、その事に一所懸命になつてゐるのは確かだつたが、然し彼を徐いた他の者は總て、心の底では煩はしい事だと思つてゐた。

宣誓が終ると、裁判長は、陪審員長を選ぶやうに請求したので、陪審員達は、戸口でおし合ひしながら、會議室へ駈け込んで、さて其處で一同は先づ何よりも紙莨を燻し始めた。そして或一人が、例の容體振つた紳士を指名すると、皆は何等の異議もなくそれに決めて了つた。かくて陪審員達は、紙莨の燃えさしを消して投げ捨てながら法廷へ返つて行つた。容體振つた紳士は自分が陪審員長に選ばれた事を早速裁判長に報告しに行つたが、それが濟むと、一同は再び背の高い椅子に腰掛けて控へた。

總てが圓滑に、はかばかしく、そして嚴かに進行した。之等の規律と秩序と嚴粛さとは、明かに並み居る人々を滿足させた。それに依つた又彼等は自分達が如何に眞面目に大切にその公務を果してゐるかと云ふ感銘を深めた。ネフリユードフも亦さう感じた。

陪審員が着席するや否や裁判長は、彼等の權利と義務と責任とに就いて一場の説明をした。そしてその説明中彼は、始終その位置を變へ通しであつた。或は右に向き、或は左に轉じ、或は後へ反つたり、椅子の脊に凭りかゝつたり、紙を眞直ぐ立てゝ見たり、鉛筆をいぢつたり、小刀を捻くつたりしてゐた。

その説明によると、陪審員の權利は、裁判長を通して、囚人に質問し、其證據物件を調べる事など

が出來るのだつた。彼等の義務は誤りなく正當に審判する事にあつた。その責任とは、法廷の評議の祕密を破り、通信類の事を局外者に洩らしたりする時は懲罰されねばならぬと云ふことであつた。總ての人が靜粛に謹聽してゐた。例の紳商はブランデーの臭ひをあたりに漂はせて、大きな吃逆を續けながら、一句〳〵毎に感歎したやうに頷いてゐた。

九

裁判長は、陪審員の職責を説明し終ると、囚人等の方へ向いて

『シモン・カルチンキン、起立』と云つた。

シモンは、脣をピク〳〵震はせながら、跳ね上るやうにして突立つた。

『氏名は？』

『シモン・ペトローフ・カルチンキンと申しやす』

前から用意してゐたので、早口に彼はひはれ聲を上げて云つた。

『身分は何だ？』

『農で御座りやす』

『出生地は？』

『ツーラ縣クラピウエンスキー郡クラピヤンスキー教區ボールカ村』

『年齡は？』

『三十三で、生れやしたのは千八百――』

『宗教は?』

『露西亞正教會の者で御座りやすが』

『妻はあるか?』

『まだで御座りやす』

『職業は?』

『マヴリターニヤ旅館に雇はれて居りやす』

『前科は?』

『決してさやうなことは、わたくしは是迄……』

『確かにさうか?』

『それやモウ神様が御承知で御座りやす』

『起訴狀の謄本を受けたか?』

『へィ、持つて居りやす』

『宜しい、掛けろ』

『エウフイーミヤ・イワーノウナ・ボーチコワ』

裁判長は次ぎの四人へ聲をかけた。然しシモンがボーチコワの前にまだ立つたゐるので

『カルチンキンは掛けるんだ』

それでも尙ほカルチンキンは立つてゐるので、

『カルチンキン、掛けろと云ふんだ』

だが、尙ほ彼はほんやりしてゐるので、到頭廷吏が、頭を一方にかしげ、眼を眞圓く異樣に瞶つて睚けて行きながら、『こらつ、掛けるんだ、掛けるんだ』と、芝居の臺詞みたいな聲で叱つたので、辛つと彼は氣が付いたやうに腰を下ろした。最初起ち上つた時のやうに、非常にあはてゝ腰を下ろしながら、上着を確り身に卷きつけて、だんまりとして又唇をぴく〳〵と動かし始めた。

『氏名は?』裁判長は、怠儀さうな溜息を吐いて、四人には眼も呉れず、たゞ彼の前の書類をちらりと見ながら云つた。裁判長は、事を迅速に片附けるために、こんな風に一時に二爲事する事に馴れてゐた。

ボーチコワは四十三才で、コロームナ市の生れの者である。彼女も亦、マウリターニア旅館の奉公人であつた。

『わたくしも前科はありません、起訴狀の謄本は持つて居ります』と、彼女は大膽に答へたが、それは丁度『はい、わたしがエウフィーミヤ・ボーチコワで、起訴狀ならありますが、それが何になります、餘りつまらない事有仰ると承知しませんぜ』と云つてゐるやうであつた。

彼女は、最後の尋問に答へて了ふとすぐ、自分勝手に許可も待たずに、腰を下ろして了つた。

『氏名は』女好の裁判長は、第三番目の四人には殊更丁寧に向き直つて云つた。

「起立しなさい」マースロワがまだ掛けてゐるので、裁判長は柔しく穩かに尙ほかう附け加へた。

マースロワは早速立ち上つて、胸を張り、愛嬌の籠つた黒い眼に、殊更笑みをたゝへて裁判長を眤と見た。

『名は何と云ふ？』

『リユボーウイと申します』と、彼女は早口に答へた。

ネフリユードフは、これ等の尋問中、鼻眼鏡を掛けて、じつと囚人等を見詰めてゐたが、『はてな、そんなことはない』と、彼はマースロワから眼を離さずに考へた。『リユーボフ、そんな事が決して？』と、彼は又マースロワの答辯を聞くと不審さうに考へ込んだ。

裁判長は、そのまゝ尋問を續けようとすると、眼鏡をかけた同僚が、何だかブツ／＼云ひ出したので、それに遮られてちよいと止めた。だが裁判長は、うんと頷いて、又囚人の方へ向き直り、『何ッ？』と云つて、『此處にはリユーボフイとは書いてないが』

被告は默つてゐた。

『本名を聞くのだよ』

『洗禮を受けた時の名は何と云ふのだ？』

眼鏡の同僚が腹立たしさうに云つた。

『以前は、カテリーナと申しました』

『そんなことがあるものか』と、ネフリユードフは獨言したが、今はもう確かに、この女は彼が嘗て戀におちて、無我夢中になつて手籠めにし、其の揚句捨てゝ了つた、あのお孃さん風の女中に全く相違なかつた。けれども、それを今迄彼が思ひ出さうともしなかつたのは、何時も廉直を誇りとしてゐただけに、女に對してそんな淺ましい猥らな事をツイ爲出來かして了つた事が、ひどく良心に責められて、思ひ出すさへ苦しかつたからである。

所で、今端なくも此處に出て來たのは、正しくその女であつた。他のすべての人の顏とは違つて、何處にも他では見られない、一種特別な、何となくかう際立つて奇妙に人を惹き付けるやうな、その女の顏を、今やネフリユードフは、あり／＼と眼の前に見るのだつた。輪廓の好い顏が、何となく勝れないやうに蒼褪めてはゐるが、それでも、一種特別な愛くるしさが、その唇やその活々とした眼や、その聲などに、わけてもその無邪氣な笑顏や身のこなしなどにあつた。

『さうか』と裁判長は云つて、又柔しい調子で、『だが、お前の父稱は？』

『わたくし、私生兒で御座います』

『でも、名附親があつたらう？』

『はい、ミハイロヴナと申します』

『一體、此の女が何麼罪を犯したと云ふんだらう？』と、ネフリユードフは、心に思ひ惱みながら、息も吐けなかつた。

『では、お前の姓は、』と、裁判長は尙ほ問ひ續けた。

『母の方の苗字でマースロワと申します』

『身分は？』

『平民で御座います』

『宗教は、正教會か?』

『左樣で御座います?』

『職業は?お前の職業は何だ?』

マースロワは默つて了つた。

『何を爲てゐたのだ?』

『わたくし、稼いでゐました』

『何を稼いでゐたのだ?』

眼鏡の裁判官が鋭く訊ねた。

『御存じのくせに』から云つて、彼女は笑つた。そして、すばしこく法廷をぐるりと見廻して、それから又裁判長へその視線を向けた。

彼女の顏には、何だかたゞならぬ表情が見えて、呟くやうに云つたその言葉にも、その愛嬌笑ひにも法廷をじろりと偸むやうに見廻したその眼附にも、何となくおど〳〵した恐れるやうな悲しい傷ましい意味があるので、裁判長はそれと氣づくと、吾ともなく赤面して、法廷も暫く森と靜まりかへつたが、この沈默は、傍聽人の中の或一人が笑つたので破られた。と、又誰かが「叱ッ」と云つてそれを制止したので、裁判長は漸く顏を上げて、更に尋問を續けた。

『前科があるか?』

『否え、』マースロワはそつと笑つて、溜息を吐いた。

『起訴狀の謄本を受けたか』

『はい、持つてゐます』と彼女は答へた。

『宜しい、掛けろ』

で、彼女は少し後へ退つて、立派な貴婦人が、その裳をかゝげると同じやうな風に、裾をかゝげて腰を掛け、さて上着の袖に小さな白い手を入れて組み合せ、それから眼は矢張り裁判長へ注ぐのだつた。

證人が呼び出される段取になつたが、中には欠席したのもあつた。特に鑑定人として選ばれた醫師も法廷へ呼び出された。

書記は立ち上つて、起訴狀を讀み始めた。彼は、LとRとを同音に發音しながら、高い聲で明瞭と讀んで行つたが、それが餘りに早いので、言葉が互にごつちやになり、まるで蜂が唸るやうに聞えた。

裁判官達は、椅子の腕の此方へ凭れたり、彼方へ凭れたり、或はテーブルにもたれ掛つたり、後へノケ反つたり、眼をパチクリさせたり、互に囁き合つたりしてゐた。一人の憲兵は屢々欠伸を嚙み殺してゐた。

被告のカルチンキンは絶えず頰肉をピリつかせてゐた。ボーチコワは尙ほ身體を眞直ぐにして靜かに腰掛けてゐたが、時々手拭で卷いた頭を搔いてゐた。

マースロワは、身動きもしないで、その朗讀者を眤と見詰めてゐたが、時々彼女は何か聞き咎めて辯

解しようとするかの如くいらだつたり、額を顰くしたり、重い溜息を吐いたり、そして手をもが〳〵させたり、あたりを見廻したりしてはまたその朗讀者へ視線を向けるのだつた。
ネフリユードフは、背の高い椅子の前列に腰を掛けて、鼻眼鏡を動かさずに、マースロワを見詰めてゐたが、一種混亂した烈しい懊惱が彼の靈魂に深く食ひ込んで行くのだつた。

一〇

起訴狀は次ぎの如くであつた。
『千八百八十〇年一月十七日、當市マヴリターニヤ旅館の主人は、其旅館にて第二同業組合所屬の西伯利商人スメリコーフが頓死せることを警察署へ訴へ出でたり。
『第四區の地方警察官は臨檢して、其死因は「アルコール」過飮により心臟破裂したるものなりと證言せり。前記スメリコーフの死體は埋葬したり。然るにスメリコーフの死後四日目に共同町の友人にして同じく西伯利亞商人たるチモーヒンなる者、前記スメリコーフの死を聞き、ペテルブルグ市より當市へ歸り來り、其死因に疑念を起し、種々取調べしところ、果してスメリコーフは、何者にか毒殺せられたるものにして、尙ほ豫て死者が造り置ける財產目錄に依りて見れば其所有に屬する金員及び金剛石入指環なども紛失し居たりと告訴せり。其結果審問調査の後次ぎの件々を明かにしたり——
『一、前記スメリコーフが、金員三千八百ルーブリを銀行より引き出して所有し居たることは、マヴリターニヤ旅館の主人及びスメリコーフが當市着後取引したる商人スメリコーフの手代などの證言

によつて明かなれど、彼の死後封印したる旅行鞄並びに財布の中には、只だ僅かに二百十二ルーブリ十六カペイカ殘り居たること。
『二、前記スメリコーフは其死前一晝夜を娼妓リユーブカと共に過せしが、リユーブカは二回旅館の彼の部屋に來りたる事。
『三、前記スメリコーフの所有たる金剛石入指環を娼妓リユーブカが其抱主に賣りたる事、
『四、旅館の部屋附女エウフイーミヤ・ボーチコワはスメリコーフの死したる翌日千八百ルーブリを銀行へ當座預けしたる事。
『五、娼妓リユーブカの調書によれば、旅館の雇人シモン・カルチンキンは一包の散藥をリユーブカに渡し「ブランデー」の中に交ぜて商人スメリコーフに與へよと勸め、娼妓リユーブカはその通りに爲せしと告白したる事。
『審問の時の被告妓名リユーブカの陳述によれば、スメリコーフがリユーブカの所謂「稼ぎ」をなす遊女屋に於て遊興中、彼女は事實、その商人の宿なるマヴリターニア旅館より若干の會員を持ち來れと、その商人に命ぜられて、その旅館へ行き、商人より與へられし鍵にて鞄を開き四十ルーブリ取り出し、その餘の金員には手を觸れず、其儘再び錠を下ろしたる由なるが、その時は尙ほボーチコワとカルチンキンとが其場に立ち合ひ居たりし故、兩人は此陳述に證明を與へ得べき事。
「尙ほリユーブカの證言によれば、彼女が再度スメリコーフを送りて旅館へ行きし時、カルチンキンは睡眠劑と稱する一包の散藥を彼女に渡して、それをスメリコーフに飮ますれば睡りつくならんと

勸めしにより、彼女はそれを信じて、片時も早く己が身の自由ならんことを願ふ餘りに、その藥をブランデーに入れて飮ませたれど、然し其時はスメリコーフより一錢の金員も貰ひ受けず、たゞスメリコーフに打擲せられし故、泣いて歸らんと爭ひし時、スメリコーフはそれを引き止めて、彼女に指環を與へたりと、

『被告ボーチコワを審問したるに、彼女は紛失金に就ては何事も知らず、又、スメリコーフの室へは一切出入さへもせず、たゞリユーブカのみが何か其室にて忙はしげに爲し居たれば、若し紛失品ありたりとすれば、リユーブカがスメリコーフの鍵を持ちて金を取りに來し際なせしものならんと云へり――』

これには逍のマースロワもあつと驚き、口を開いたまゝボーチコワを見詰めた。

書記は更に一千八百と讀み續けた。

『一千八百ルーブリの銀行受取證をボーチコワに示して、その預金の出所を尋問したるに、彼女は十八年間働き貯めし自巳の所有金と、軈て結婚すべきカルチンキンの所有金とを合したるものと答へたり。

『被告シモン・カルチンキンは、その最初の審問に於ては、彼とボーチコワとは、遊女家より鍵を持參したるリユーブカに唆かされてつい金員を盗取し、それを三人にて平等に分配したりと自白せり。且又、スメリコーフを熟睡せしめんためにリユーブカに散藥を與へたる事も自白せり。然るに、二度目の審問に於ては、金員盜取の件も、藥をリユーブカに與へたる件も兩ながら否定して、それは皆リ

ユーブカ一人にてなせしものと云ひ變へたり。ボーチコワが預金したる金員に關しては、彼女が述べしと同樣――卽ちその金員は十八年間旅館に於て彼等二人が働き貯めしものなりと答へたり。

『商人スメリコーフの死體解剖の必要生じたれば、遺骸を發掘し、內臟含蓄物及び諸機關に起りたる變化を鑑定せしめたり。然るにその內臟の解剖に依つて、スメリコーフの死は明かに毒殺なる事を證明し得たり。

それから、各被告の陳辯、證人の證言が擧げられ、尙ほ次ぎの如く續けられた。

『第二同業組合所屬スメリコーフは豫て遊興癖ありたる者なり。キターエワ樓の妓名リユーブカと關係し、特に其女に迷ひ居たりしが、千八百八十〇年一月十七日、キターエワ方へ登樓せし際、遊興費に支拂ふきべ四十ルーブリの金員を持ち來るやう、鍵を與へて、リユーブカを使に遣りたり。然るにリユーブカは、マヴリターニア旅館に至り、同旅館の雇人ボーチコワ及びカルチンキンと共謀してスメリコーフの金員並びに貴重品を盜取し、それ等を總て平等に分配せり。』

此時マースロワは再び喫驚して、思はず立ち上つて、眞紅になつた。

『リユーブカは自己の分け前として金剛石入指環を取り、尙ほ……』と、其書記は更に讀み續けた。

『金員の分配は大方小額なりしならんも、そは隱匿したるか、或は其夜は彼女も酩酊し居たりし故紛失せしめたるか、その何れかなるものの如し。尙ほその罪跡を晦まさんために、彼等共謀者は、先づ商人スメリコーフを旅館に歸らしめ、その上、カルチンキンが所有せし砒素劑を飮ませて毒殺せんと決し、リユーブカは直ちにその心にてキターエワの妓樓へ立ち戻り、スメリコーフにマヴリターニ

ア旅館へ共に歸らんことを勸めたり。旅館へ歸り着くや、リユーブカはカルチンキンより貰ひたる散藥を「ブランデー」の中に混じて、スメリコーフに飮ませて、遂に彼を毒殺したり。

『以上の口供によれば、ボールカ村の農カルチンキン(三十三歳)、平民ボーチコワ(四十三歳)、平民マースロワ(二十八歳)は、共謀して千八百八十〇年一月十七日に、前記の商人スメリコーフの所有金員凡そ金二千六百「ルーブリ」を盜取し、更に彼等の罪跡を蔽はんがために、スメリコーフに毒を飮ませて遂に彼を殺せしなり。

『本犯罪は刑法第一千四百五十五條に規定せらるゝ所なり。依て刑事訴訟法の條項に照し、農カルチンキン、平民ボーチコワ、平民マースロワを地方裁判所に於ける陪審員の公判に附するものとす』

かくて書記は長々しい起訴狀を讀み終ると、その書類を疊み、兩手で長い頭髮を撫でながら着席した。一同は之から公判が開かれ、總てが明白になり、正義が勝利を得るであらうと思つてほつと太息を吐いた。ネフリユードフだけは何うもさう云ふ氣になれないで、十年の間、あの無邪氣な可愛らしい娘として記憶してゐる此のマースロワが、一體何うして此麼事を爲出來したのだらうと、思はず身震ひしながら、そのことばかり考へ込んでゐた。

二

起訴狀の朗讀が濟んでから、裁判長は他の同僚と評議した後『さあ、何處までも調べ上げて見せるぞ』と云はぬばかりの見幕で、カルチンキンの方へ向き、

『農シモン・カルチンキン』と、身體を左へひねりながら云つた。カルチンキンは立ち上つて、兩腕を伸ばし、それを胴へピタリと押し付け、身體を前へ屈めて、絕えず頰肉をピク〳〵動かしてゐた。

『お前は、千八百八十〇年一月十七日に、ボーチコワ及びマースロワと共謀し、商人スメリコーフの鞄から金員を盜み取り、尙ほ砒素劑を求めて來て、マースロワを唆し、それをブランデーの中に混ぜて、スメリコーフに飮ませ、遂に彼を殺させたと起訴されてゐるが、それに相違ないか?』

と、裁判長は、今度は身體を右の方へひねりながら云つた。

『飛んでもねえ事でがす。私共は御客樣の御世話を致して居りイして……』

『こらッ、餘計な事は後刻で云へ。それに相違ないか、何うかと云ふのだ?』

『何う致しやして、私はたゞ……』

『餘事は後刻で可い。その通りか何うかと云ふのだ』

裁判長は、靜かに、きつぱりとかう云つた。

『決して左樣な事は致やせん、何故と申しやすと……』

すると、廷吏が又カルチンキンの傍へ馳けて行き、例の芝居じみた容子で囁いて、彼を制し止めた。

裁判長は、書類を持つた手を働かし、肱を變へて『これは濟んだ』と云つた態度で、ボーチコワの方へ向いた。

『ボーチコワ、お前は千八百八十〇年一月十七日に、マヴリターニヤ旅館で、カルチンキン及びマ

ースロワと共謀し、商人スメリコーフの鞄より金員若干及び指環を盜取し、それを三人で分配した後、スメリコーフを毒殺したと起訴されてゐるが、何うぢや、その通りか。』

『私は何も知りません』と此の被告は中々大膽にきつぱりと恁う答へた。『私は、その部屋へは這入りもしないのです、たゞこの莫連が這入つて行つて何も彼もしてましたのです。』

『それはまあ後刻で可い』

裁判長は、再び靜かにきつぱりとかう云つて、『兎に角、それに相違ないかと云ふのぢや』

『私は、金をとりもしなければ、酒を飲ませもしないし、部屋へ這入りもしないんですよ。若し私が部屋へ這入つてましたら、この女を蹴り出してゐましたでせう』

『それで、服罪するか何うか』

『服罪しませんとも』

『よろしい』

『マースロワ』裁判長は、第三番目の被告に取りかゝつた。

『お前に對する起訴は、お前が遊女家より、商人スメリコースの鞄の鍵を持つて出で、その鞄から金員若干と指環とを盜み……』と、彼はさながら教科書を暗んじてゐるやうにさら〳〵と云つたが、その時、一人の同僚が、重要證據の目録に記載された瓶が紛失したと囁いたので、そちらへ身體を傾けた。そして『金員若干と指環とを盜み』と、モ一度繰返し、『それから、お前はスメリコーフと共に、マヴリターニア旅館へ歸り、毒酒を飲ませて殺害したとあるが、事實何うぢや、それに相違ないか？』

『わたしは、何も惡い事は致しません』と、マースロフは早口で云つた。『わたしは、前にも申しましたやうに、何も、何も、盜みなんか致しません。指環はスメリコーフさんが自分で呉れましたのです』

『お前は、二千六百ルーブリ盜取したと云ふが、それに相違ないか』

『前にも申しました通り、わたしは四十ルーブリより外何も取りません』

『よろしい、では、スメリコーフに藥を入れた酒を飲ませたと云ふことは何うぢや？』

『えゝ、飲ませました。でもあれは睡り藥で少しも害にはならないと云ふことでしたからです。わたしが、人を殺さうなんて、まあ……決してそんな事……そんなことをわたしが……、神樣が證人に立つて下さいますわ』

『よし〳〵、それでは、金と指環を取つた覺えはないが、藥を飲ませたことは事實だと云ふんだな？』と、裁判長が云つた。

『はい、それは事實で御座います。けれども睡り藥だとばかり思ひ入つてました。わたくしは、それでお客を睡らせたいばかりでしたの。決してそんな、そんな惡い事など思ひも寄らないことです』

『よろしい〳〵』と、裁判長は、事がはかばかしく進行するのを喜んで云つた。

『では、すつかりその事情を述べろ』

裁判長は椅子の背に倚りかゝり、組んでゐた兩手をテーブルの上に置いた。『さあ、すつかり話すんだ。何も彼も明白に云つて了ふがお前の爲になるぞ』

マースロワは、暫く默つて眞一文字にじつと裁判長を見詰めてゐた。

『話さないか』

『申します。かう云ふ譯なんです』と、突然マースロワは早口で語り出した。

『わたくしが旅館へ上つて、あの方の部屋に案内されました時は、もうあの方は大層醉つてらつしやいました。』彼女は、『あの方』と云ふ語を發音した時、眼を一杯睜つて、如何にも恐ろしさうな表情をした。

『で、わたし、歸らうとしましたところ、あの方が何うしても放して與れないんです』

と云つて、突然その記憶の蔓を失つたのか、或は何か他の事を思ひ出したのか、そのまゝ默つて了つた。

『で、それから』

『はい、それからですか、それからちよつとの間居て、また歸つて了ひました』

この時副檢事が妙な格好で片肱突きながら立ちかけた。

『質問があるんですが』と、裁判長が尋ねて、さうだと頷かれると、彼は身振りで副檢事へ發言を促した。

『質問したいのは、そのマースロワとシモン・カルチンキンと以前から懇意であつたか何うかと云ふことです』と、副檢事は、マースロワの方は見向きもしないで、質問し終ると、脣を緊く結んじ顏を顰めた。

裁判長はその質問を更に繰り返した。マースロワはイカツイ顏の檢事を見るとギヨツとした。

『カルチンキンさんとですか?ええ』と彼女は云つた。

『マースロワとカルチンキンとの懇意が更に何麼關係になつてるかを聞きたいのです。彼等兩人は屢々會つてゐるのですか』

『何麼關係ですつて?カルチンキンさんは、お客があると旅館へ私を呼んで與れるだけで、そんなに深く懇意にしてる譯ではありません』マースロワはかう答へて、心配さうにその眼を裁判長から副檢事の方へ向け、それから又裁判長の方へと轉じた。

『私は、カルチンキンが、たゞマースロワばかりへお客を周旋ち、他の女へは一向周旋たない譯を聞きたいのだ。』と、檢事は、半ば眼を閉ぢずるさうな惡魔のやうな薄笑を湛へて云つた。

『それは知りません、そんなこと、わたしに判るものですか?』マースロワは、おどおど四方を見廻して、ネフリユードフの方へじつとその視線を据ゑた。『あの人は、自分が呼びたいと思ふ者を勝手に呼んだんです』

『俺に氣が附きはしないかしら』ネフリユードフは、さう思ふと、赫と上氣して血が顏一杯へ漲つた。が、マースロワは、別段彼に氣附いた樣子もなく、再び心配さうに彼女の視線を副檢事の方へ向けた。

『すると被告は、カルチンキンとは別段親密な關係はないと云ふのだな、よろしい、ではもう質問することはない』

かくて副檢事は、テーブルから肱を放して、何か書き始めたが、實は、何も書いたのではなく、たゞペンを手帳の文字の上に走らせたゞけであつた。それは、他の檢事や辯護士などが、巧い質問をか

けた後で、尚ほ對手を驚かさうとする名文句を考へながら、ノートに書き込んでゐるのを見たから、その眞似をしたのであつた。

裁判長は、尚ほ直ぐには、被告の尋問にはかゝらなかつた。と云ふのは、丁度彼は、同僚の眼鏡の判事へ已に打合せが濟んで書き上げになつてゐる質問を出さうか出すまいかと、相談してゐたからであつた。

『かうと、それから何うした?』と、裁判長は漸く始めた。

『わたしは、家へ歸りました』と、マースロワは、裁判長だけには、幾らか大膽になつて、じつと彼を見詰めながら云つた。

『女將さんへ金を渡してからやすみました。所が、まだ寢つくか寢つかない時分に、朋輩の一人のベルタが、『商人のお客がまた來たよ』と私を起しに參りました。私はもう出る氣は致しませんのでしたが、女將さんが強つて云ひますもので爲方なしに出ました。するとあの方——』と云ひさして彼女は恐しくなつたやうに、また「あの方」と聲を震はしながら、『あの方は、他の多勢の女衆を揚げて、もつと酒を持つて來いと頻りに申してゐました。けれどもモウお金はたいてい了つてゐましたので女將さんが餘り信用しなかつたのです。それであの方は、私にお金のあり所と、持つて來る高とを云つて旅館へ取りに行つて來いと申しました。それだもので、わたくし參つたので御座います』

裁判長は左隣りの同僚と何かひそ〲小聲で話をして居たが、然しマースロワの陳述はすつかり聞いてゐたかのやうによそうて、彼女の最後の言葉を繰り返しながら、

『それで行つたと云ふのだね、よろしい、それから何うした。』

『それから參つて、あの方の室へ這入つて吩咐つた通りに致しました。尤も其部室にはわたくし一人で這入つたのではありません。カルチンキンさんとあの人!』と云つて、彼女は、ボーチコワを指した。

『虛言ばつかり、わたしは這入りもしないのに』と、ボーチコワはかう云ひ出したが、すぐ止められて了つた。

『二人の前で、十ルーブリ紙幣を四枚取り出しました』マースロワは、ボーチコワの方は見ないで額を顰めて尚ほ言ひ續けた。

『よろしい。では、訊ねるが……』と、副檢事が再び聲をかけた。『被告が、その四十ルーブリを取り出した時、尚ほそこには何れだけ金員があつたか?』

マースロワは、副檢事がさう云つた時、思はず身震ひした。何故だか知らないが、何だかその副檢事は、彼女をおとしいれようとしてゐるやうに感じられたからである。

『わたし、算へなんかしません。たゞ百ルーブリ札が幾枚かあつたのを見ましただけで御座います』

『うむ、では、被告は百ルーブリ札を見たのだな。よろしい』

『それから、お前は、その金員を持つて歸つたのだな』裁判長は、時計を見ながら云つた。

『持つて歸りました』

『ふむ。それから』

『それから、あの方は、またわたしを旅館へ引張つて行つたので御座います』と、マースロワは云つた。

『よろしい。それから何麼にして藥を飲ました、酒に入れたのか?』

『何麼にしてつて?さうです、御酒に入れて飲ませました』

『何故飲ませた?』

彼女は、重い深い太息を吐いて、

『あの方が、少しもわたしを放さないものですから』と云つて、又暫く默つてゐたが、

『實はわたし、ひどく疲れ切つてゐましたもので、廊下へ出て、丁度其處にゐたカルチンキンさんに、「本當に草臥れて了つたのに、歸して吳れないので困つて了ふ」と申したことでした。するとカルチンキンさんが、「自分達もあの人には困りぬいてゐるが、睡り藥を飲ませて睡らせては何うかと思つてゐる。すればお前も歸れるぢやないか」と有仰るのでした。それでわたしも宜ござんせうと申しました。そして全く害にはならないものだと思ひまして、カルチンキンさんから一包の藥を貰ひ受けました。それから部屋へ這入りますと、あの方は、衝立の陰に倒れて、頻りとブランデーを吳れつて呼んでるのです。で、わたしは、テーブルの上から上等シャンパンの瓶を取つて、一つはわたしの分、一つはわたしの分としてコップへ二杯注いで、あの方のには藥を入れて差し上げました。ですけれど、それが毒だと判つてたら、わたしが何で差し上げるものですか』

『よし〳〵、そして、指環は何うしてお前の手にあるのだ。』と裁判長は訊ねた。

『あの方が私へ吳れました』

『何時吳れたのだ?』

『一緒に旅館へ歸つた時で御座います。わたしが歸りたいと申しますと、あの方は、わたしの頭を毆つて、櫛を折つて了ひました。わたしも本當に腹が立ちましたから、何うしても歸るつて云ひますと、あの方は歸すまいとして、自分の指に篏めてゐた指環を拔いて私へ下さつたのです』と、彼女は述べた。

すると、又副檢事が少し立ちかけて、例の無造作な風をよそひながら、尙ほ二つ三つ質問したいことがあると願ひ出た。許されると、彼は金モールの筂緣の上に首をかしげて

『私は、被告がそれから、幾時間スメリコーフの部屋にゐたかを聞きたい』

マースロワはまたギクリとした樣子で、心配さうに副檢事と裁判長に眼を配つて、

『幾時間ゐたか覺えてません』と、早口に云つた。

『よろしい。然らば、被告は、スメリコーフの部屋を出てから、尙ほその旅館の何處か他の部屋へ行きはしなかつたか、覺えてゐないか?』

マースロワは、暫く考へてゐたが、

『はい、その隣りの空室へ參りました』

『何しに其處へ行つた?』と、副檢事は吾を忘れて、直接に彼女へ訊ねた。

『辻待馬車が參りますまで、ちよつと息休めに參つたので御座います。』

『して、カルチンキンも一緒に其部屋にゐたのか?』

『はい、後から這入つて來ました。』

『何しに彼は這入つて來たのか』

『ブランデーがまだ幾らか殘つてましたもので、二人でそれを飮んだのです』

『はゝあ、二人で飮んだのか、よしと、それから被告は、カルチンキンと何の話をした。何れ話したらうが、何麼事を話した。』

マースロワは俄かに顏を顰めて、眞赧くなり、

『何麼話をつて、わたし、何も話なん感致しませんワ。わたしもう、知つてるのはこれつきりです。あとは何うにでもあなた方の御隨意におまかせします。わたしは何も惡い事はしないんですから、』と早口に云つた。

『私も最う質問することはない』と、云つて副檢事は、肩を妙な具合に搖り上げながら、辯論の控帳に向ひ、「被告は、カルチンキンと共に、隣りの空室に在りたりと自ら證言したり」と、書き付けた。

暫くの間、法廷は森と靜まつてゐた。

『お前は、もう云ふことはないか』と、軈て裁判長が云つた。

『もうすつかり申し上げて了ひました』と、

マースロワは太息を吐きながらかう云つて着席した。

それから裁判長は、何か書き付けてゐたが、左側の同僚が何事か小聲で囁くと、すぐ頷いて、十分間の休憩を宣言し、先づ自分達から急いで立ち上るなり退廷して了つた。これは、あの丈の高い鬚の生えた柔しい眼の同僚判事が、俄かに腹の加減が惡くなつて、ちよつと一休みして、手當をしたいと云ひ出したからで、そのため休憩となつたのであつた。

裁判官達が退廷すると、辯護士、陪審員、及び證人なども皆立ち上つて、何れも、大方仕事が片附いたことを喜びながら、思ひ〳〵違つた方へ行き始めだ。

ネフリユードフは、陪審員の部屋へ這入つて行つて、窓際に腰を下ろした。

一二

『果して、此の囚人はカチユーシヤであつた。』

ネフリユードフとカチユーシヤとの關係は次ぎのやうであつた。——

ネフリユードフが、始めてカチユーシヤに遭つたのは、大學の三年生の頃で、暑中休暇を、田舍の伯母の家に行つて、借地法に關する論文の準備をしてゐる時だつた。それまでは毎年、母や姉などゝモスクワ附近の母の大きな別莊へ行つて、夏を過すのが常例だつた。然しその年は、姉は結婚し、母は外國の湯治場へ出掛け、彼はまた論文を書かねばならなかつたので、その夏は田舍の伯母の家で過さうと決めたのであつた。伯母の家は、遠い田舍の極く閑かな所であつたから、心を亂すやうなもの

は何もなかつた。そして伯母達は、自分達の財産相續者であるこの甥を、大層柔しく可愛がつて呉れた。ネフリユードフも亦、非常に伯母達が氣に入つて、又その質朴な古風な生活を喜んだ。

伯母のところで過したその夏は、ネフリユードフに取つては、丁度青春の氣の充ち滿ちた時代であつたので、他の誰の教へは受けずとも、自らこの人生に於ける美、人生に於ける意義、人生に於ける重大な職務を感得して、自巳及び全世界の爲に、何處までも猛進し得るの勇氣を養ひ、單に希望ばかりでなく、一度希望を起したら、飽まで彼岸に到達するやう精勵刻苦せねばならぬと思ふのであつた。その年彼は、學校でスペンサーの社會平衡論を讀んだ。そしてその土地私有に關するスペンサーの意見は、軈て廣大な土地を相續すべき彼に取つては、殊に感銘深きものがあつた。彼の父は別段富有でもなかつたが、母は一萬エーカの土地を持參して嫁に來たのだつた。然るに彼は、土地私有の殘忍不正なことをつくづく感じ、人間は良心の要求に從ひ一身を犧牲にして崇高な精神の愉快を樂まねばならぬと考へ、間もなく父より讓り受く可き土地に對してはその所有權を放棄し、それを百姓達に皆分配してやらうと決心した。則ち彼が書かうとしてゐた論文は、かうした土地問題に就てゞあつた。

彼は、伯母の領地では、次のやうな生活をした。

彼は朝早く起きた——時には三時頃——そして日の出前に、朝霧のかけてゐる中を、小山の下の小川へ水浴に出掛けて、倘ほ草や花の上にはしつとりと露のおりてゐる間に返つて來た。時には珈琲を終ると直ぐ、參考書の中に埋つて、論文を書いた。が、又時偶には讀み書きを止めて、人家を離れ、

田圃や森林を彷徨つた。又午餐前などには、庭の何處かに轉がつて睡ることもあつた。食事の時には何時も非常に元氣ではしやいで見せ、伯母達を樂しく笑はせた。それから、馬に乘つたり、或は小川へ船を漕ぎに行つたりして、夜になると、讀書するか、或は伯母達と一緒に骨牌の當て物をした。

多くの夜は、殊に月明の夜などは、何となく情慾にそゝられて容易に睡られないので、色々な事を夢み、色々な事を考へなどして、庭の中をあちこちと、時によると夜明けまで歩き續けてゐた。

かくて彼は、伯母の家に於ける最初の一ヶ月間は、たゞもう面白く可笑しく空に暮して、女學生のやうな下女のやうな、黒い瞳の、足の早いカチユーシヤには、格別注意もしなかつた。それに彼は、その時まだ十九歳で、母の羽交下で育てられた、ほんの初心な純潔な青年であつた。で、女を夢みるとすれば、それは全く單に未來の妻とすべきものに就てばかりであつた。其の時の彼の考では、妻としない他の女は、すべて、女でなくて、たゞの人間だつたのである。

然るに、その夏の昇天祭に、伯母の隣家の人が、その家族——二人の若い娘と學生の子供——と、同居してゐた百姓上りの美術家と一緒に遊びに來た。お茶が終ると、皆は、家の前の、もう草を刈つて了つてある牧場へ遊戯をしに出て行つた。彼等はゴレールキ（遊戯の名、鬼ごつこのやうなもの）を始めたが、カチユーシヤもその仲間に加入つた。幾度か駈け廻つたり、組を變へたりしてゐる中にネフリユードフはカチユーシヤと組になつた。それまでとても彼は、カチユーシヤの容子に幾らか氣は留めてゐたが、然し慇懃に近しくなつて、一緒に遊ばうなどゝは、つい思ひもしなかつたことである。

『轉びでもしなけれや、迚もこの二人は捉まらんぞ』と、快活な青年が、鬼になつてかう云つた。彼は、短くて太い強健な百姓足を持つてゐて、中々よく駛ける男だつた。

『貴郎が鬼ですか？　では一寸待つて下さい。まだいけませんよ』と、カチユーシャは云つた。

『一、二、三』と、美術家は手を拍つた。

カチユーシャは、噴き出したいのを辛つと耐へながら、ネフリユードフと交代つて美術家の背後へ廻り、その小さい荒れた手でネフリユードフの大きな手を推し退け、糊の利いた下袴をパサ〳〵云はせて左の方へ逃げた。ネフリユードフも美術家に捉まるまいとして右へ駛け出したが、不圖振り返ると、カチユーシャが美術家に追はれながら、しつかりした若やかな足つきで、素速こく駛けてゐるのを見た。すると丁度その前にライラックの茂みがあつたが、カチユーシャはそれを見ると、その背後へ廻つて一緒にならうと、ネフリユードフへ目配せした。二人が首尾よく其處で一緒になつて再び手を握り合へば、鬼はもう彼等を捉へる譯には行かないからである。――それが此の遊戲の規則だつた。でネフリユードフは、その合圖を呑み込んで、その茂みの背後へ廻つたが、けれども、そこに、イラクサが一杯生えた中に小さな溝があらうとは氣がつかなかつた。彼はつい躓いてその中におつこち、露にびしよ濡れになつておまけに手まで引搔いたが、でもすぐ起き上つて、自分のその失策を照れ隱しにはつはつと笑つた。

コスモスの實のやうな眞黒な眼をしたカチユーシャは、嬉しさうな顔を輝かせて、ネフリユードフへ飛びかゝりさま互に確り手を握り合つた。

『引搔かれなすつて？』彼女は、息をはづませ、嬉しさうに眞直ぐネフリユードフを見詰めて、別の方の手で、髪のほつれを撫で上げながら云つた。

『溝があるとは少しも知らなかつたもので』と、彼も亦笑ひながら、カチユーシャの手をじつと握つたまゝかう答へた。彼女はずる〳〵と彼の方へ引き摺られるやうにしてぴたりと寄り添ふと、彼も現心になつて、彼女の方へ寄りかゝつた。そして、彼女がそのまゝじつとして動かないので、彼はその手をぐいと緊く握り締めて、唇を推し付けた。

『まあ、嫌やだ』と、云つて彼女は手を振りほどいて、男から駛け離れた。

彼女は花がもう散つて了つた白いライラックの枝を二本折つて、それで燃えほてる自分の顔を煽ぎ立てたが、もう一度男の方をちらりと振り返つて、すぐに、前へ大きく手を打ち振りながら、スタ〳〵歩み出して、他の組へ這入つて行つた。

その時から、ネフリユードフとカチユーシャとの間には、初心な青年男女の間によくあるやうな、」互に思ひ思はれる特別な關係が成り立つたのである。

カチユーシャが部屋に這入つて來たり、或はその眞白なエプロン姿が後から見えたりなどしてさへネフリユードフにはもう總ての物が輝やかしく思はれるのだつた。それは丁度朝日が登ると同時に、萬象悉くが一層陽氣づき、一層喜ばしくなり、一層活々となるやうに、その生活全部が悦びで滿たされるのだつた。カチユーシャも亦矢張り同じ心持だつた。尙ほその心持は、カチユーシャが實際目の前にゐる時ばかりではなかつた。單にカチユーシャが此の世の中に生きてゐると云ふこと、又カチユ

ーシヤに取つては、ネフリユードフが此の世の中に生きてゐると云ふこと、たゞさう考へるだけでも二人は互に樂しく思つた。母から不愉快な手紙を受け取つた時でも、論文か思ふやうに進まなかつた時でも、又は、青年によくあり勝ちな、譯もない悲しさを感じた時などでも、彼はカチユーシヤを一目見さへすれば、或は、彼女の事を思ひ出しさへしても、すべての煩はしさが忽ち消え去つて了ふのだつた。

カチユーシヤは可なり忙しくはあつたが、それでも暇を見てはよく讀書してゐたから、ネフリユードフは、彼女に、ツルゲーニエフやドストエフスキーなどの小説（それは丁度彼自身が讀んだばかりだつたので）を貸してやつた。カチユーシヤはしんみりしたツルゲーニエフの物が一番好きだつた。二人は、椽側や庭などでよく會つてはちよつと立ち話をしたり、又時偶には、カチユーシヤが何時も働いてゐる、老婢マトリヨーナの部屋へ態々御茶飲みに出掛けて行つたりした。マトリヨーナが傍にゐて三人の時には、皆元氣に燥いで愉快だつた。

けれども、マトリヨーナがゐないで、彼等二人きりの時は、何となく互に氣遲れがして拙かつた。二人の眼は、口で云つてゐることよりもつと違つた、もつと重大な何かをすぐ語り始めるのだつた。すると、彼等は、互に何かしら氣が咎めるやうで、脣をすぼめてすぐ別れて了ふのであつた。

ネフリユードフとカチユーシヤとのかうした關係は、あの遊戯以來、ネフリユードフが此の家に逗留してゐる間中續いた。伯母達もそれに氣が付くと驚いて、ネフリユードフの母へ手紙さへ出した。伯母の一人のマリヤは、ネフリユードフがカチユーシヤと惡い關係になりはしないかと恐れたのだが、

それは取越苦勞にすぎなかつた。ネフリユードフは、殆ど自分でもそんなところまでは氣も付かなかつた位で、ただカチユーシヤが戀しいと云ふだけで、全く純潔な心からばかりであつたから、彼と彼女との間は、頗る安全なものであつた。彼は、女の身體を何うしようなどゝ、そんなことを考へたことは微塵もないばかりか、ひよつとしてそんな考が少しでも起らうものなら、ぞつと戰慄する程であつた。それよりか、モ一人の詩人肌の伯母のソフイヤが、ネフリユードフの例の無鐵砲な思ひ切つた性格から、何の考もなく氏も素性もないカチユーシヤと結婚するやうな決心をしやしないかと恐れるのが、もつと根據があつた。

其の時若しネフリユードフが、カチユーシヤに對する自分の戀を本當に意識し、又は、誰か他の者が、あんな素性の女と結婚しては可けないと特に忠告でもする者があつたら、或は例の生一本な彼の性情で、惚れてさへゐたらどんな素性の女と結婚しようがかまうことはないと云ひ出したかもしれなかつた。然し伯母達は、自分達の心配をネフリユードフへは何とも云はなかつたので、彼は其處を立ち去るまで、まだカチユーシヤに對する自分の戀心を明瞭とは意識しなかつた。で彼は、彼女に對する妙な自分の心持を、青年の全身に溢れてゐる生の喜びの單なる一表現だと解釋し、その喜びをこの柔しい快活な女が共に汲んで與れるのだと信じてゐた。けれども、愈々ネフリユードフが歸るやうになつた時、カチユーシヤも伯母達と一緒に玄關まで送つて來て、眞黒い少し斜視な眼に涙を一杯ためて、じつと彼を見詰めた時、過に彼も二度と手に入らない何か美しい貴いものを置き去りにして行くやうな感じがして胸が塞つた。

『さよなら、カチユーシヤ』ネフリユードフは馬車に乘り込んだ時、ソフイヤの帽子越しにカチユーシヤを見てから云つた。『色々何うも御世話でした。』

『さようなら、ドミトリー・イワーノウイチ樣。』と、眼に一杯たまつた涙を拂つて嬉しさうな柔しい聲で、カチユーシヤは云つた。そして、急いで家の中に駈け込んでしく〳〵と泣いた。

一三

その後ネフリユードフは、カチユーシヤを二年以上も見なかつたが、二度目に彼女と會つたのは彼が士官に昇進してその所屬の聯隊に赴任する時だつた。その途中彼は、伯母さん達の家に四五日逗留しようと思つて立ち寄つたのであるが、然しその時の彼は、丁度三年前の夏休暇に來た時よりはまるで見變すやうな違つた若者になつてゐた。

あの當時は、正直で、無我的で、善い事には如何なる事にも身を犧牲にしようとしたのであるが、今の彼は、墮落した、立派な自我主義者で、ただもう自分の樂みのことばかり考へるやうになつてゐた。あの當時は、神の世界の神秘を熱心に喜んで解決しようとしたものであつたが、今はもう世の中の總てのことが解り切つたやうで、すべて何も彼も自分の生活から割り出して決めて了ふのだつた。あの當時は、天然や、又は彼以前に生活し思考し感得した哲學者や、詩人やなどに親むことの大切であり必要であることを感じたが、今は、人間の造つた法律とか、友達交際の方が、重大な必要なものと考へられるのだつた。あの當時は、女が神秘な魅力あるものと思はれてゐた——彼等を包む一種の神秘に依つて魅せられてゐたが、今は、女と云ふものは、彼の家族と友達の妻君などを除いた他の女は總て、全くきまり切つたもので、つまり、女はこれ迄自分が經驗して來た享樂の中の最も好い機械たるに過ぎなかつた。あの當時は、金の必要も餘りなく、母から貰ふ三分の一もあれば澤山で、父から讓られた財産も自分には受けず、百姓に與へて了ふ事が出來たが、今では、月々千五百ループリの仕送りでは足らず、その事に就ては、これまでもう度々と不愉快な交渉などもしてゐるのだつた。あの當時は、精神を以て自我と認めてゐたが、今は强健な動物的本能を自分自身だと認めるのだつた。

此等の大變化が來たのは、自分の信念が失くなつて、他の者を過信し、それに無闇と動かされるやうになつたからである。畢竟かうなつたのは、自分の信念に從つて生活して行くことが非常に困難だからであつた。自分の信念に依つて生きて行かうとするには、常に浮いた快樂の方へ流れ行かうとする動物的本能を戒め、極力それと鬪つて、すべてのことを決めて行かねばならぬが、他の者の行ふまゝに從つて行くには、何もモウ自ら決定してかゝるには及ばぬ。總て世間の事は既に決定されてゐて、それは常に動物的本能に支配され精神は無みされてゐるのである。そればかりではない、自分の信念を强ひて行はんとすれば、何時も世間の非難に身を曝してゐねばならぬ。他の者の爲すまゝに從つてゐれば賞讃を博するのである。例へば、ネフリユードフが、神とか、眞理とか富とか、貧乏とか、人生の眞面目な問題を考へたり話したりすると、彼の周圍の者は皆、つまらないこととして、嘲笑さへするのである。彼の母と伯母達までが、柔しい反語で（家の哲學者先生）と呼ぶのだつた。然し、彼が小說を讀んだり、呆けた馬鹿話をしたり、佛蘭西劇場に茶番狂言を見に行つたり、燥いで冗談話をしたり

すると、皆面白いと云つて彼を賞めそやす。彼が節制しなければならぬと思つて、古外套を着たり、禁酒したりすると、皆は不思議がつて、故意とあんなことしてるのだと惡口を云ふ。けれども獵に莫大な金を費したり、或は、書齋を特別に贅澤に飾り立てたりすると、皆は、その趣味を賞讃して、彼の道樂を勵ますために立派な贈物をしたりする。結婚するまでは、純潔に童貞を守つてゐなければならぬと思つてゐると、又友達仲間が、それは身體に障ると云つて心配し出し、母親もまた、まさかそれを悲しみはしなかつたが、然し彼が、友達から或フランス女を取つたと聞いた時は、彼も世間並の男になつたわいと、寧ろそれを喜んだのであつた。尤もカチユーシャと彼の間に起つた挿話に關しては、公爵夫人も遉に、もしや二人の間に結婚の約束が出來てはゐないかと、恐れたのであつた。ネフリユードフが丁年になつて、土地私有を不正なりとし、父から讓られた少しばかりの土地を百姓共に與れて了つた時も、それと同じ鹽梅で、母親を初め家族の者は皆喫驚して、親戚の者一同へ申譯のため彼を嘲笑するのだつた。百姓共は、土地を貰つて後も決して富有にはならず、却つて村に料理屋が三軒も出來、皆働かなくなつて、一層貧乏になつたと云ふことをネフリユードフは屢々聞かされた。然し、ネフリユードフが軍隊に這入つて、貴族仲間と賭博をして費ひ込んだ時、母親のエレナ・イワーノウナは辛つとそれの始末をしたのであるが、それでも、そんな惡い道樂は、若い時分や上流社會には有り勝ちな當然な事として、その息子がそんな事をするやうになつたのを寧ろ彼女は喜んだ位であつた。最初ネフリユードフは煩悶した。彼が信念を持つてゐる時正しいと考へた所の總てが彼の友達仲間では不正と認められ、惡事と思つた事が善事と見做されたので、その煩悶の度はひどかつた。そして

彼は遂に、自分の信念を捨て、他の者の行動に從ふやうになつた。最初は遉に自分の信念の放棄は不愉快であつたが、然しそれは長くは續かなかつた。それから彼は、煙草や酒を飲む習慣がつき、信念の放棄を全く何とも思はなくなり、却つてそのために大なる慰安をさへ感じるのだつた。

元來移り氣なネフリユードフは、かくて彼の周圍の者に依つて是認された、新しい生活の道へ突進して行つた。そして、尙ほ內面から、何か違つた或物を要求する聲が起つて來ても、斷然抑へ付けて了つた。これは、彼がペテルブルグへ行つてから始つた事で、軍隊に這入つた時は、恰もその頂點に達してゐたのであつた。

全體軍隊生活は人間を墮落させるものである。正しい有益な仕事は御留守にし、徒らに懶惰放逸に流れて、普通一般の人間としての義務はないがしろにし、その代りに、聯隊、軍服、軍旗などを尊敬し、尙ほ且つ、一方に於ては他の者の上には絕對權力を振はせ、それと同時に又、上官には、絕對服從を强ひるのであつた。それから尙ほ、その虛禮的名譽、軍服、軍旗、公然許されたる橫暴と殺人などに依つて生ずる軍隊生活の一般的墮落に搗てゝ加へて、富豪や貴族との近接に依つて生ずる墮落が(近衞士官の總ては、富有で門閥家であるから）伴ふから、遂には立派な驕慢病になつて了ふのである。ネフリユードフも軍隊生活に這入つた瞬間からその驕慢病に襲はれて、彼はその仲間達と同じやうな生活をし始めたのである。彼は、何の爲事をもしないので、たゞ他の者に依つて綺麗に作られ、丁寧に塵を掃はれた軍服を着、これ又他の者に依つて造られ、磨かれ、そして手渡される武器を帶び、他の者に依つて飼養され、敎練された駿馬に跨り練兵場へ出て行く。其處では、彼と同じ仲間と一緖

に劍を閃めかしたり、鐵砲を射つたりし、そしてその同じ事を又他の者に敎へたりする。それ以外何の爲事もないのであるのに、高いも卑しいも、若いも老いたるも、皇帝も彼の近親も皆、彼の爲事を認め、然もそれを賞讃し感謝してゐるのである。

これ以外に彼等の大切な爲事と云つたら、士官俱樂部や上等料理屋で、出所の知れない莫大もない金を散財して、食つたり飲んだりし、わけても飲むことであつた。それから、芝居、舞踏女、それから又、馬に乘り、劍を振つたり飛んだりして、そして又散財する——酒、カルタ、女

この種の生活は、他の職業の者より殊に軍人を餘計墮落させる。軍人以外の者で、もしかうした生活にはまり込んだら、心に深く耻ぢて迚も耐へられるものではない。然るに軍人は、却つて此の種の生活を誇りにし、わけても戰爭の時は尙ほ更らひどい。ネフリユードフが軍隊に這入つたのは、恰も土耳古に宣戰を布告して間もない時だつた。『吾々は命を的に戰爭に出掛けるのだから、淫蕩狼藉の生活は、許して貰はねばと云ふよりは絕對に必要なのだ——それでやつてるのだ』と云はぬばかりであつた。

これが其の時分ネフリユードフの混亂した考で、從來自分を束縛して來た道德的規範から全く自由になつて每日〳〵浮かれ廻つてゐたのである。そしてその頃の彼の生活は、全く慢性驕慢病者其儘であつた。

三年ばかり無沙汰して後、再び伯母達の家を訪ねて來たネフリユードフは實にかゝる有樣になつてゐたのであつた。

一四

ネフリユードフは、旣に前進してゐた彼の所屬の聯隊に加はるために、それを追ひかけて行く途中丁度その寄り道に當るので、伯母達の家を訪ねた。それは豫てから是非遊びに來いと云ふ伯母達の溫かな柔しい手紙も屢々あつたし、殊にカチユーシヤに會ひたくてたまらなかつたからである。或はその時旣に、ネフリユードフの心の底には抑へがたい性慾に示唆されて、カチユーシヤに對する惡い考が起りかけてゐたのかも知れない。けれども彼はそれを明瞭と意識しなかつた。彼は、たゞ面白可笑しく過した懷しいその土地をも一度訪ねて、少し變つてはゐるが、然し何時も敬愛の心を傾けて親切に優待して吳れる年老つた伯母さん達に會ひ、且つ戀しい思ひ出が殘つてゐるカチユーシヤの顏が見たいばかりであつた。

彼が其處へ着いたのは、三月も終り方の、雪解けの始つた、復活祭前の金曜日であつた。然もその日は雨が車軸を流すやうで、着てゐる物は何も彼も濡れて了ひ、又たゞならぬ寒さが犇々と身に食ひ込むやうであつたが、その頃の彼は、非常な元氣で、一向それにはひるまず、却つて勇み立つてゐた『カチユーシヤはまだゐるかナ?』低い煉瓦塀で圍まれ、屋根から下ろされた雪で一杯になつてゐる、馴染み深い古風な邸內に馬車が這入つた時、彼はかう考へた。

馬車のベルの響きを聞いたから、屹度カチユーシヤが出て來るだらうと豫期してゐたのに、彼女は姿を見せなかつた。今迄床を拭いてゐたらしい女が二人、何れも素足で裾をからげて、馬穴を下げなが

ら戸の傍から現れて來た。カチユーシヤの姿はあたりには一向見當らないで、エプロン掛けて忙しさうに掃除してゐた下男のチホンが唯一人玄關へ出て來た。伯母のソフイヤは絹の着物に帽子を被つて、應接間で彼を迎へた。

『まア、よく來てお呉れだつたネ』

ソフイヤは、彼に接吻しながら云つた。

『マリヤがちと氣分が悪いので、教會へ行くのも息儀だと云ふから、家で晩餐式をしようとしてゐるところだよ』

『それはお目出度う』ネフリユードフは、伯母の手に接吻した。

『やあ御免なさい、貴方の着物をすつかり濡して了つた。』

『まあ部屋へいらつしやい、大變お濡れだよ、おや立派なお髯が生えたのねエ――カチユーシヤ、カチユーシヤや、珈琲を持つて來てお上げ、急いでだよ。』

『はい、只今』聞き覺えのある嬉しい聲が廊下からした。『居るな』と、ネフリユードフは、窃かにかう心の中で叫んで、雲間から太陽の光が漏れるやうな氣がした。

ネフリユードフは、チホンに案内されて、何となく嬉しいやうな氣に唆られながら、着物を着更へに昔馴染みの部屋へ行つた。彼はチホンを捕へて、カチユーシヤは何うしてゐたか、何をして居たか、もう結婚するのではないかなど、訊ねて見ようかとも思つたけれども、チホンが、糞眞面目に糞丁寧に更つて、手に水をかけませうかなどゝシカツメらしく云ふので、カチユーシャの様子を訊くのも妙にばつが悪くなつて、チホンの孫達の事や、年を老つた種馬の事や、ボルカンと云ふ犬の消息などを訊くのであつた。ボルカンだけが去年の夏、恐水病に罹つて死んだゞけで他は皆壯健だつた。

濡れた着物をすつかり脱いで、新しく着更へようとする時、ネフリユードフは、小刻みな聞き馴れた跫がして、それが軈てコツ／＼と戸を敲くのを聞いた。その跫音、その戸を敲く音でそれが誰だかネフリユードフには直ぐ判つた。それはカチユーシヤでなくて誰であらう。

彼は、濡れた大外套を肩へ引掛けて、戸を開けながら

『お入り！』と云つた。

這入つて來たのは果してカチユーシヤで、前よりは一層美しく色つぽく見えた。少し斜視の無邪氣な黒い眼で、懐しさうにネフリユードフを見上げた。今も、昔と同じやうに白いエプロンを掛けてゐた。彼女は、主人から封を切つたばかりの香入りの石鹸と、二枚のタオル、一枚は長くて露西亞風の刺繍のあるのと、一枚は、入浴用のとを持つて來た。浮型のちやんとついてゐる、まだ一度も用ゐない石鹸、新しいタオル、それから、彼女自身――總てが皆、清淨で、純潔で、無垢で、心持がよかつた。カチユーシャは彼を見ると、包み切れない嬉しさを微笑みに見せて、可愛らしく緊つた唇を昔のやうに綻ばした。

『よくいらつしやいました、ドミトリイ様』と、彼女は、おど／＼して口吶りながら、薔薇色にさつと顔を染めた。

『やあお早う！御機嫌よう』彼も顔を染めて云つた。『壯健かい。』

『はい、有難う御座います、お氣に入りのピンク石鹼とタオルとをお伯母さまから』と云つて彼女は、机の上に石鹼を置き、椅子の背にタオルを掛けた。

『皆お持ちだよ』と、チホンが傍から口を出して、ネフリユードフの蓋の開いた化粧匣を指さした。それには、ブラッシだの、香水だの、銀の口の付いた澤山な瓶だの、その他色々な化粧道具が一杯這入つてゐた。

『伯母さんに御禮を云つてお吳れ、あゝ、本當に此の家は愉快だよ』と、ネフリユードフは昔のやうに心が浮き立つてのんびりするのだつた。

カチユーシャはにつこり笑つてそれに答へながら出て行つた。

常からネフリユードフを可愛がつてゐる伯母達は、今度は前よりも大層大事に彼を優待した。ネフリユードフは今度は戰爭に行くので、死ぬか負傷するか知らないので、殊に伯母達の心を動かしたのである。

ネフリユードフは、たゞ一日一晩逗留して行く筈だつたが、カチユーシャの顏を見ると復活祭を終るまで居たくなり、オデッサで一緒になる筈だつた友達のセンボックに、矢張り彼の伯母の家まで來いと電報を打つた。

カチユーシャの顏を見るや否、ネフリユードフは、すぐ又彼女に對した以前の感じが眼覺めて來た。以前と同じやうに、彼は、白いエプロンをかけた彼女の姿を見ると心がワク／＼した。彼女の跫音や話し聲や笑聲などを聞くとたまらなく嬉しかつた。コスモスの實のやうに眞黑なその眼、わけてもその笑顏を見るとネフリユードフは全く心が溶けさうであつた。尙ほ、何よりも、互に出會つた時、はつと眞紅になつた女の顏を見ると、彼はもう遣瀨ない惱ましい氣に襲はれるのだつた。

彼は戀をしてゐるなと自分で感じたが、然しそれは以前感じた戀とは性質が違つてゐた。以前の戀は一種神秘的なもので、隨つてまたそれが明瞭と自分の戀であつたか何うかも知らず、尙ほ戀と云ふものは、一生涯にたゞ一度ほか感じられないものであると彼は思つてゐた。所が今度は正しく自分が戀に落ちてゐることを知り、何となく嬉しく感じたが、然し、その戀が、何麼な種類のものであつて、何麼所に行き盡くか、それは朧ろけながら判つてゐたが、彼は可成く自ら欺いて、その卑しい心根を隱さうとしてゐた。他の總ての人と同樣、ネフリユードフにも、亦二個の我があつた。一つは、自己の幸福を覓めると同時に他の幸福を計らんとする精神的の我、他の一つは、單に自分一個の幸福をのみ願つて、他の一切を自已の幸福の犧牲にしようとする動物的我である。ペテルブルグ及び軍隊の生活に依つて釀された、自我狂時代に於けるネフリユードフは、動物我が全く他の精神我を壓倒して了つてゐた。

でも、彼はカチユーシャに會ふと、三年前と同じやうな感じが再び起つて、一度ならず精神我が頭を擡げて、その權利を立て直さうとし始めた。そして、復活祭まで、まる二日の間と云ふもの、彼の心内では、人知れぬ間斷なき苦鬪が續いた。

彼はその心の奧底では、自分は早く此處を立ち去らねばならぬ、伯母の家に特別に逗留せねばならぬ理由もなし、又此處にかうして長くゐれば必ず好い事は出來ないと云ふことも知つてゐた。けれど

も倘ほ、自分で何故とは判らぬ程、嬉しくて愉快でたまらないので、到頭逗留して了つた。

復活祭の前夜、儀式をするために牧師と補祭とが招かれて來たが、彼等は、教會からこの伯母達の家まで、水溜りや泥土の多い三哩の道を橇で來るのは大抵な難儀ではなかつたと云つてゐた。

ネフリユードフは、伯母達初め召使などゝ一緒に儀式に臨んだが、彼はカチユーシヤの方ばかり見詰めてゐた。カチユーシヤは戸の近くに居て、坊さん達に香爐を運んでゐた。軈て、ネフリユードフは坊さん達と伯母達に復活祭の接吻をして、まだ宵の內で復活祭は始つてはゐなかつたが、寢ようと思つて立ちかけた。すると老婢のマトリヨーナ・パーウロウナが夜半の儀式の後祝福された供物のクリイチ（復活祭の菓子）とパーハ（復活祭に供へるチーズの一種）を貰ひに、教會へ行く仕度をしてゐると聞いたので、『俺も行つてやらう』と彼は思つた。

教會へ行く道は、橇でも車でも覺束なかつたので、伯母の家を自分の家同様に振舞つてゐるネフリユードフは「兄弟の馬」に鞍を置くやうに命じた。そして、寢室には行かず、華かな軍服を着、きつちりした乘馬用のヅボンを穿き、外套を引掛け、道中嘶き通しに嘶いた、肥りすぎて、ヨタヨタした老馬に跨り、泥路と雪とを冒して、闇夜を教會へと行つた。

一五

ネフリユードフに取つて、この早朝の法會は、彼の生涯中最も生彩ある記憶の一つとして、長く後まで殘つた。此處彼處斑らにある眞白な雪の光で、纔かに闇の道を辿りながら、教會堂を取り圍んでゐるランプの列で輝らし出された教會の境內に馬を乘り入れた時は、儀式は旣に始つてゐた。

ネフリユードフがマリヤ・イワーノウナの甥だと判ると、百姓等は、俄かに明るい所に來たので耳引き立てゝゐる馬の口を取り、乾いた所へ連れて來て、其處でネフリユードフを下ろして、もう參詣人で一杯になつてゐる教會堂の內へ彼を案內した。右側は百姓の男達で、老人は、手織りの上衣に、綺麗な白い麻の細布を膝から下に卷きつけ（露西亞の農夫は靴下の代りに麻の布を卷く）若い者は、新しい木綿服に華美な色の帶を腰に卷いて長靴を穿いてゐた。

左側は婦人連で、赤い絹のハンケチを頭に卷き、黑い綿天鵞絨の袖なしジヤケツや、眞紅の筒袖シヤツを着、綠や、青や、赤やの華美な色のスカートをつけ、厚い皮の靴を穿いてゐた。その背後にゐるひどい地味な扮裝の婆樣連は、白いハンケチ、手織りの上服、黑つぽい手織物の古風なスカート、そして短靴を穿いてゐた。綺麗に着飾つた子供等は、頭の毛を香油でぴかぴかさせ、大人達の間を出たり入つたりしてゐた。

男連は、十字を切つて、前へ屈んでは拜み、又頭を上げては、髮の毛を後へ振り返してゐた。

女連は、特に婆さん連は、蠟燭に圍まれた聖像を見詰めて、十字を切り、額のハンケチや、肩や、腹に、合掌した手をしつかり當てゝ、何か小聲で念じながら、立つたりしやがんだりしてゐた。子供達も大人達の眞似をしながら、人が見てゐると思ふと倘ほ熱心に祈りをするのだつた。鍍金した聖像の這入つた厨子は、金色の螺旋形の飾りの付いた高い蠟燭に八方から照らされて、キラキラと輝いてゐた。キヤンデブラ（萬燭燈）には、小蠟燭が一杯點火されてゐて、樂席からは、素人唱歌手の唱ふ吼える

やうなベースと、それ等に子供の金切聲が入り交つて、大變面白い調子が響いて來た。

ネフリユードフは前の方へ出て行つた。敎會の中央は特別席で、妻君と子供（水兵服を着た）とを連れた地主や、警察官や、電信局員や、長靴を穿いた商人や、胸に徽章を佩けた村長などが席を占めてゐた。そして、法壇の右側に、丁度その地主の妻君の背後に、雜色織りのライラツク色の着物に、房の付いた白いショールを掛けてゐるマトリヨーナと、胸襞と、赤い飾帶のついた白い衣服を着て、眞黑な髮に赤い髮飾をしたカチユーシャが控へて居た。

總てが壯麗に嚴肅に輝かしく美しく見えた。黃金の十字架を幾つも下げて銀糸で織つた祭服を纏つた牧師や、補祭や、金銀の飾りを着けた白法衣の敎會書記や、唄手や、最上の晴衣を着て、香油をテカ〳〵頭に塗つた素人唄手や、舞踏樂のやうに響く面白い頌歌や、花で飾つた大きい蠟燭を手に持つた牧師が次ぎから次ぎと續いて來る信者に一つ〳〵祝福を授ける有樣や、「基督は復活り給へり、基督は復活り給へり」と、幾度も〳〵繰り返す叫び聲など、總てが美しかつた。けれども、中にとりわけ靑い飾帶のついた白い着物を著て、眞黑な髮の頭に赤い髮飾をし、恍惚とした眼を輝かしてゐるカチユーシャが一等美しく見えた。

ネフリユードフは、カチユーシャが自分の方を見向かないでも、自分の來てゐることは旣に知つてゐるのだと判つてゐた。で、祭壇の方へ歩み出ようとして、彼女の傍を通りながら、顏を合せた。何も云ひかけることはなかつたけれども、不圖思ひついたので、

『伯母さんは、法會が濟んだら精進挪ひをすると云つてたよ』と、囁いた。

何時もネフリユードフの顏を見るとさうだが、カチユーシャはその可愛い顏にパツと若やかな血汐を漲らした。嬉しさうに輝いてゐる、眞黑な眼で無邪氣に凝乎とネフリユードフを見上げて、

『存じてますのよ』とニツコリした。

此の時、敎會書記が、聖水を入れた銅の珈琲壺を持つて出て來たが、カチユーシャには眼も吳れず、法衣で彼女を押し拂つて通つた。書記は勿論、ネフリユードフに尊敬を拂つて、道をよけるためにカチユーシャを押し拂つたのであるが、けれどもネフリユードフは、書記がカチユーシャを何と心得てゐるかと思つて腹が立つた。此の敎會にあるものは、いや世界中の凡てのものは、皆カチユーシャのために存在するやうに彼には思はれたので、よしや他の一切のものが侮蔑されることがあつても、カチユーシャだけは總ての中心であるから、決して侮辱されてはならないものであつた。聖像の周圍の黃金もカチユーシャのために輝き、カチユーシャのために、キヤンデブラや燭臺の總ての蠟燭も燃え「基督は復活り給へり、喜べや人の子等」といふ喜ばしい讃美歌も彼女のために歌はれてゐるので、總てのもの——世界中のあらゆる美しいものは皆、彼女のために存在してゐるのだつた。カチユーシャ自身も、それを信じてゐるやうに彼には思はれた。襞付きの白い衣服を着た格好の良いその容子、恍惚として嬉しさうなその顏の表情などをつく〴〵見て居ると、彼自身の靈魂の中に鳴り響いてゐるものが、彼女の靈魂の中にも傳つて、相共鳴してゐる事がはつきり判るのだ。

始めと終りとの儀式の間にネフリユードフは敎會を出た。人々は道をよけて腰を屈めた。彼を知つた者もゐたが知らない者は、誰方だと訊ねてゐた。

彼は、入口の階段に立ち止つた。するとそこにゐた乞食共が周圍に集つて來たので、彼は錢人の中の小錢をすつかりはたいて彼等に與へて降りて行つた。漸く夜が明けかゝつてゐたが、まだ日は上らなかつた。會衆は、教會の境内にある墓地へ集つて來た。カチユーシヤは倘ほ堂内にゐたので、ネフリユードフはそれを待つてゐた。倘ほ段々と出て來る會衆は裏へ鋲を打つた靴で石段をコツ〳〵踏みながら境内へ散らばつて行つた。

伯母の家のひどく年老つたコックの爺さんが、頭を打ち振り〳〵ネフリユードフを呼びとめて、復活祭のキッスをした。その女房の皺くちやの婆さんは、ハンケチから、黃色く染めた卵を一つ取り出してネフリユードフに與れた。すると又、今度は、新しい着物に綠色の帶を締めた愛想の好い一人の若い百姓が出て來て、

『基督は復活り給へり』と云ひながら、ニコ〳〵としてネフリユードフの傍に近寄り、一種特別な、然し愉快な氣持のする百姓の臭ひを浴びせかけて縮れた鬚でチク〳〵と顏を刺しながら、苦々しい唇で緊く三度、彼の唇を接吻した。

この若者がネフリユードフに接吻して、暗褐色の卵を與れてゐる時、マトリヨーナのライラック色の着物と、赤い髮飾をつけた懷しい黑い頭とが現はれた。

カチユーシヤは、自分の前の多くの人達の頭越しに、ネフリユードフを見つけたが、ネフリユードフは、その時カチユーシヤの顏がほつと嬉しさうに輝いたのを見た。

彼女は、マトリヨーナと入口へ出て來たが、立ち止つて乞食に施し物をした。失くなつた鼻の跡に

赤い痂のある一人の乞食が彼女に近づいた。すると彼女は、幾らかそれに施物をして、倘ほ近寄つて行き、少しも厭ふ氣色もなく喜びの眼を輝かせて、三度その乞食に接吻した。そして、さうやつてゐる間、彼女は『わたしのしてることは、善いことではないでせうか？』と、訊ねるやうな容子で、自分の眼をじつとネフリユードフの眼に會せるのだつた。『さうだよ、善いことだとも、すべて善いことだ。本當に何も彼も美しい。お前は實に可愛い女だ』と、答へるやうな眼付をネフリユードフはした。

二人が入口の石段を下りて來ると、ネフリユードフは、ツカ〳〵と吾から其方へ步み寄つて行つた。それは別に、復活祭の接吻をしてやらうと云ふ心からではなく、たゞ彼はちつとも早くカチユーシヤの傍へ行きたかつたからであつた。

マトリヨーナは、頭を下げて、『基督は復活り給へり』と微笑みながら稱へたが、その詞の調子に『今日は皆平等ですよ』と云つてゐるやうな所があつた。玉に丸めたハンケチで口を拭いてから、ネフリユードフの方へその唇を突き出した。

『寔に基督は復活り給へり』と、ネフリユードフは應へて、マトリヨーナに接吻した。それから彼はカチユーシヤを見ると、彼女は眞絓に顏を染めて、近づき『基督は復活り給へり、ドミトリー樣』『寔に復活り給へり』と、ネフリユードフは應へて、二人は二度接吻したが、もう一度する必要があるか何うか考へながら、有繫にちよいと躊躇つたが、でも思ひ切つて、また三度目の接吻をしてにつこり笑つた。

『お前は牧師さんの所へ行かないのかい？』と、ネフリユードフは訊ねた。

欠

「いゝえ、わたし暫く、此處で腰を下ろしてゐますの、ドミトリィ樣」と、彼女は、何か嬉しい仕事をやつと爲果せたかのやうに、力をこめてかう云つた。そして、ほォつと、胸一杯の深い溜息を吐いて、ほんの少しばかり斜視の眼に、『熱情と童貞と戀愛との色を現して、凝乎とネフリユードフの顏を見詰めた。

男女の戀愛には、必ず一度は、その頂點に達する瞬間が來る。その瞬間には、意識もなく、道理もなく、何等の肉感的な感じも交らないものである。さうした瞬間が、この復活祭の晩にネフリユードフにもやつて來た。カチユーシヤを憶ひ起すことのある場合には、何時もその瞬間、彼女を見た印象だけがまざ〳〵と浮び出て、他の總てのことは、それに依つて皆、蔽ひ隱されて了ふのである。滑らかな光澤ある黑い髮、美しい處女の容姿にぴつたりと釣合つてゐる襞のある白い衣服、まだ發達しきらない胸、ぱつと紅くなる頰、柔しい光を持つた黑味勝ちの眼差、そして、純潔と貞節との二つの愛を刻印した身體全體――この愛は獨り彼にだけではなく(それはネフリユードフも知つてゐるのだが)誰にでも又何物にでも、善惡の別もなく、世界のあらゆる物に對して、例へば、實際自分で接吻してやつた、あの汚ない乞食にさへ持つ愛である。

カチユーシヤが、かう云ふ廣大な愛を持つてゐることをネフリユードフは初めて知つた。それは復活祭の前夜と朝、彼自身に戀を自覺し、その戀愛に依つて、彼女と彼とが一緒に融け合つたのを感じたからであつた。嗚呼！もしもネフリユードフの戀が、其處で止まつてゐたならば、その夜進んだ點で止まつてゐたならば！

此の家を訪ねて來た。此の男のさつぱりとした柔しい親切な擧動や、氣品の高いことや、鷹揚なことや、わけてもドミトリーに對するその眞情の深いことなどが、伯母さん達をすつかり、感服させて了つた。

けれども、その鷹揚さは、餘りに度外れなやうにも思はれて來たので、遉の老夫人達も感服するよりは呆れて了つた。彼は、門へ來た盲目の乞食に一ルーブリ惠んでやつたり、僕婢達に十五ルーブリの心附けをしたり、ソフィヤの大事な犬が、前足を怪我して血を出した時は、縁に縫飾のしてある麻のハンケチ（ソフイヤの知つてゐる所では、それは廉く積つてもダース十五ルーブリは出さうな）を引き裂いて、犬の足の繃帶をしたりなどした。老婦人達は、實際こんな種類の人間には、これまで一度も出遇つた事がないので、少なからず驚いたが、然し此の男は、その實二十萬ルーブリからの借金を持つてゐて、然もそれを返濟しようとも思つてゐなかつたから、二十五ルーブリやそこら何でもないのだと云ふことには誰も氣が付かなかつた。

シエンボックは、僅か一日逗留したゞけで其の晩ネフリユードフと一緒に其處を立つた。彼等は、二人とも聯隊への請暇の日限が切れたので、愈々伯母の家を去らうと云ふその日は、まだ昨夜の記憶がまざ〳〵と新しく殘つてゐたので、ネフリユードフの胸には、二つの感情が戰つてゐた。一つは勿論まだ食ひ足りなくはあつたが、兎に角目的を果して滿足だと云ふ感じの伴つた、昨夜のあの燃えるやうな獸慾の肉感的回想である。も一つは、大變惡い事をして了つたと云ふ自省で、それに就ては、女の爲はともあれ、自分の爲に何とか筋道をつけて置かねばならぬと云ふことであつた。

欠

彼の利己病は、既に、自己以外の事は何も考へられない程度まで進んでゐた。これがもし世間に知れたら、自分はひどく非難されはしないか、それとも何でもなく濟んで了ふかしらと、そんな事ばかり心配して、今カチユーシャは何うしてゐるか、此の後何うなるだらうなどゝ云ふことは少しも考へなかつた。

シエンボックが、彼等二人の關係を感附いたと知つても、却つて彼はそれを自分の己惚れにしてゐた。

『成程、君が俄かに此の家に一週間もゐたくなつた理由が判つた。』と、シエンボックはカチユーシヤを見た時に云つた。

『なあに、介意はないよ君。……僕だつてやるにきまつてる。本當に可愛い女だね。』

けれども又ネフリユードフは、カチユーシャに對する自分の戀情を十分滿足させないで別れるのは誠に殘念だが、長く關係を續けてゐると、後で切れるのに却つて面倒だから、何うしても今の中にきつぱり別れて置く方が得策だとも考へた。それで彼は、カチユーシャに幾らか金を與らうと思つた。勿論それは彼女の爲を思つたからではなく、又先々彼女に必要が起るだらうと察したからでもなく。此の場合さうすることは寧ろ當然なので、御用を仰せ付けた女に、何の心附けもしないのは、體面に關すると思つたからである。

そこで彼は、自分と女との地位を考へて、自分でこれならばと思ふ適當な額を女に與へた。出立の日、彼は食事を濟してから、食堂を出て、その入口の傍でカチユーシャを待つてゐた。彼女は、ネフ

リユードフを見ると、眞赧な顏になつて、女中部屋の戸が開いてゐるのを眼付で知らせながら、行き過ぎようとしたが、ネフリユードフは、それを呼び止めた。

『いよ〳〵御別れだ。』と、彼は百ルーブリの紙幣が一枚入つた狀袋を手に握つて云つた。『さあ――』

カチユーシャはすぐその意味を知つたので、眉を顰めながら、頭を打ち振つて、ネフリユードフの手を放ね退けた。

『取つて吳れ、是非』と、彼は吃りながらかう云つて、カチユーシャのエプロンの衣兜にその狀袋を無理に捻ぢ込んだが、それでも何だか氣が咎めるやうで、そのまゝ顏を顰めて重い呼吸を吐きながら自分の部屋へ驅け戻つた。そして長い間、苦しさうに悶へながら、部屋の中を往つたり來たり大股に歩き廻つてゐたが、昨夜のことを憶ひ出すと足摺りして呻き出しさへした。『然し。あの外何うすることも俺には出來なかつた。なあに誰でもすることなんだ。シエンボックにだつて、何時もお自惚けを云ふあの女教師の一件がある――伯父のグリーシャだつて勿論だ。それから死んだ俺の阿父だつて田舍にゐた頃、百姓女を娠ませて、今でも生きてゐるあの私生兒のミーチエンカを產ましたぢやないか。皆ながさうだ。いゝさ、どうも仕方のないことだ。』

こんな風に彼は自ら辯解して、安心しようとしたが、駄目だつた。憶ひ出しては良心に責められた。魂では――靈魂の奥底では――ネフリユードフは、自分の行爲が、如何にも卑劣で殘酷で卑怯であることを知つてゐた。そして、實際そんな行爲をしたと自ら知つた以上は、もう他人の瑕瑾を探す權利がないのみか、他の者と眞直ぐ顏を合せることすら出來ない筈で、のみならず、以前の如く自分を

立派な崇高い人物だなぞと考へることは愚か、此の後は、今迄行つて來たやうに、大膽に愉快に大手を振つて世間を歩くことも出來ないのである。此の苦境から逃れるにはたゞ一つの方法があつた――考へないことである。ネフリユードフは、この手段に依つて苦みから逃れた。彼が今這入つて行かうとしてゐる生活、卽ち新しい周圍、新しい友達、戰爭などゝ云ふのが、總て彼の忘却を助けた。それで、思つたよりも早く彼は、全くそれを忘れて了ふことが出來た。

戰爭が終つてから彼はたゞ一度、カチユーシヤに會ひたさに伯母達の家を訪ねた。けれども、カチユーシヤは其の後暇を取つて出たが、何んでも噂によると、何處かでお產をし、それから全く墮落して了つてゐると云ふ伯母達の話だつたので、ネフリユードフはギクリとした。お產の月日を繰つて考へると、その兒は自分の兒のやうでもあるし、又さうでないやうにも思はれた。伯母達はカチユーシヤを罵つて、母親の浮氣根性が遺傳したのだと言つたが、ネフリユードフはそれを聞くと、何だか自分だけ脫れたやうな氣がして嬉しかつた。最初は彼も、カチユーシヤと子供とを探し出さうと思つたが、然し、カチユーシヤの事を考へると、內心深く慚恨に堪へないので、遂に探さうともせず――その事はもう考へることさへ止めて、再び自分の罪を忘れようとした。

然るに今思はぬ事件に出遇つて、すつかり其の事を憶ひ出し、十年の間も、そんな罪惡を懷きながら、よくも良心を持して生きて來られたものだと、自分の無情殘酷卑劣さが思ひ知られるのだつた。けれども彼はまだ、潔くそれを承認して了ふ所までは行かず、總てが今暴露して了ひはせぬか、又カチユーシヤか、或はその辯護士かゞ、全部その事を陳述して、衆人列座の中で、自分に耻をかゝせる

やうなことになりはせぬかと、その事ばかり恐れてゐた。

一九

ネフリユードフはこんな心持で法廷を出て、陪審員の控室へ這入つて行つた。窓際に腰を下ろして、周圍の人達の話に耳傾けながら、始終紙莨を燻かしてゐた。

例の氣さくな紳商バクラシヨーフは、被害者スメリコーフ流の世渡り法に心から同情したらしかつた。

『親爺め、味な事をやつたもんだ。本當なシベリア氣質つて人ですね、何うなつてもかまはないとまではまり込んだ所は。彼女なら私だつておつこちますよ。』

陪審員長は、兎も角、鑑定人の報告が最も必要だと云ふ意見を陳べてゐた。學校敎員のピヨートル・ゲラシモーウイチは、猶太出の店商人と何か戲談を云ひ合つて盛んに皆と笑つてゐた。ネフリユードフは、何を話しかけられても、半答へをするだけで、自分にはお介意ひなく皆がそつとして置いて吳れゝば好いにと思ふのだつた。

片道寄りの步き方をする例の廷吏が、陪審員を法廷へ呼び出しに來た時、ネフリユードフは自分が裁判するよりは裁判されに行くやうな氣がして、ドキッとした。魂の底では、自分はもう他の人とは顏を合せるのも耻ぢねばならぬ不埒な奴だと思つたけれども、習慣の惰性で、尙ほ落ち付いた風で、高座へ上つて行き、足を組んで鼻眼鏡を弄つてゐた。

被告なども退廷を命じられてゐたが、また呼び入れられた。法廷には、證人の新しい顏が見えた。その中の一人で、欄柵の前の列に腰を下ろしてゐる肥滿した女を、マースロワがじつと眼も離さずに見詰めてゐるのに、ネフリユードフは不圖氣がついた。絹と天鵞絨の華美な衣服を着て、頭には大きな縁のついた黑い帽子を被り、肱まで露はに出した腕には、綺麗な小形な網袋を下げてゐた。後で解かつたのだが、この女は、證人の一人で、マースロワが勤めてゐた妓樓の女將であつた。

證人の審問が始つた。彼等は性名、宗敎などを訊ねられた。それから證人等に宣誓せしむ可きや否やに就いて相談があつて後、以前の老牧師が覺束なげに足を引き摺りながらまたやつて來た。そして胸の黃金の十字架を指しながら、前と同じく落ち着き拂ひ、何か重大な事でもしてゐるやうに眞面目な態度で、證人と鑑定人とを宣誓させた。

宣誓を濟ますと、證人は、妓樓の女將キターエワの外凡て退廷させられた。キターエワは、此の事件に關して知つてゐるだけの事を訊ねられた。彼女は一句每に、容子振つた微笑を浮べて、頭と大きな帽子を動して頷きながら、ひどい獨逸訛りで、十分詳細に且つ要領ある陳述をした。最初、豫ねて知つてゐた旅館の雇人シモンが、シベリア商人の金持ちに、一人女を見立てゝ呉れと云つて妓樓へ來たので、リユボーウイを遣つた。暫くするとリユボーウイはその商人のお客と返つて來た。商人のお客はもう少しばかり『逆上せて』ゐた——此の言葉を云ふ時、キターエワは微笑した——そして他の女をも揚げて、盛んな酒宴を始めた。客は金が盡きたので、矢張り前のリユボーウイを自分の旅館へ取りに遣つた。彼は、リユボーウイに「參つて」ゐた。キターエワはかう云ひながら、被告の方を見た。

復活

ネフリユードフは、此の時マースロワも笑つたやうに思つて、何だか厭やな氣がした。一種奇妙な名狀し難い嫌惡の情が苦悶と交つて、胸中に湧き起つた。

『それで、マースロワを一體何う思ふか?』と、マースロワの辯護士に指定された判事補が顏を紅くしてドギマギしながら云つた。

『そりやア好い玉ですわ。』と、キターエワは答へた。『縹緻がよくて敎育がある女です。良い家庭に育つたのでフランス語も讀めます。酒は隨分飮みますが、けども前後を忘れるやうなことはありません。本當に好い妓ですの。』

この時まで女將の方を見てゐたカチユーシャは、急に視線を陪審員の方へ轉じて、ネフリユードフをじつと見たが、彼女の顏は俄かに眞面目に屹となつた。片眼斜視のその屹とした奇妙な眼付で、彼女は輕くネフリユードフの方を見詰めてゐた。ネフリユードフは、はつとしたが、それでもそのつや〳〵光る白い斜視の眼を避けることが出來なかつた。

ネフリユードフは、あの恐ろしかつた晩の事を思ひ出した。霧が深く立ち罩め、下の川では氷の碎ける音が聞え、夜明け方の、朦朧とした下弦の月が、眞黑な怪しげな物の影を照し出してゐた。今、彼を見詰めてゐる二つの黑い眼が、あの怪しげな、眞黑い物の影を思ひ出させるのであつた。

『氣付いたな』と、思ふと、彼は、恰も打たれようとする拳を避けるかのやうにして身を退いた。けれどもカチユーシャは彼に氣付いたのではなかつた。靜かに溜息を吐いて、また裁判長の方へ向いた。ネフリユードフも太息を吐き

『あゝ、もつとテキパキ進行して呉れゝば好いがなア』と、思つた。

彼は今、獵に行つて、射留めた鳥が、たゞ負傷したゞけなのを、殺さない譯に行かない時のやうな、一種厭やな不愉な因惑を感じた。傷づいた鳥が獲物袋の中でもがいてゐるのは、可哀相で厭やな心持ちだが、然し又一思ひに殺して、それを忘れて了ひ度くもある。

證人の審問を聞きながらネフリユードフの心はかうした錯雜した感じで一杯だつた。

二〇

然し、審問は、寧ろ腹立たしい程、だら〳〵と非常に長引いた。證人等は一人々々別々に調べられて、最後に鑑定人の番になつたが、澤山な無用な質問が、副檢事や兩方の辯護士などから、如何にも重要な事のやうにして試みられた。それから裁判長は陪審員等に向つて、證據物件として提出された品々を調べるやうに請求した。それ等の中には、儲か被害者が食指に指してゐたらしい、小さいダイヤモンドの嵌つた花雕りの素晴らしい指環が一つと、毒物を分析した試驗管などがあつた。此等の物は何れも封印を施し、一々貼紙がしてあつた。

證人達が特に證據物件を見調べようとすると、副檢事が起立して、それに先き立つて、醫者の檢屍報告の朗讀を請求した。裁判長は、少しも早く瑞西女に會はうとして、出來るだけ裁判を急いでゐたし、それにその朗讀は、徒らに皆を退屈せしめ、且つ食事時を遲らせる外何等の効果もなく、又副檢事がそれを請求するのは、自分の職權だから一應讀んで見るのだと云ふにすぎないことも知つてゐたが、そ

れでも、何うもそれに許可を與へるより外仕方がなかつた。

書記は、醫者の報告を出して、再び舌の廻らぬ聲で、RとLとの發音をごつちやにしながら朗讀し始めた。

身體外部の調査は次ぎの通りに記されてあつた。

『(一)フエラポント・スメリコーフノ身長、六フイート五インチ。』

『どうして中々好い體格だ』と、例の紳商は、興がつて、ネフリユードフの耳に囁いた。

『(二)年齢四十歳前後ニ見ユ』

『(三)全身悉ク水腫ヲ生ズ』

『(四)肉ハ濃藍色ヲ呈シ、處々黑キ斑點ヲ生ズ』

『(五)皮膚ハ大小種々ノ發胞ヲ生ジ、中ニハ壞裂セルモノアリ』

『(六)毛髮ハ栗色ニテ濃密、手ヲ觸ルレバ容易ニ脫毛ス。』

『(七)眼球ハ眼窩ヨリ脫出シテ、角膜ハ暗色ヲ呈ス。』

『(八)鼻孔、耳腔、及ビ口ヨリ水ノ如ク濁キ粘液流レ出デ、且ツ半バ口ヲ開ケリ。』

『(九)頸ハ、顏面及ビ胸部ノ脹レ上レルタメ殆ド區別シ難シ。』

以下云々。

四頁二十四行の詳細な檢屍報告書は、ツイ此の頃、此の町で遊蕩した商人の、非常に肥つた、水脹れした腐つた死體の外觀を悉く說明した。これを聞くとネフリユードフは、今まで何がなし厭やな感

じがしてゐたのが益々増大して行くのを覺えた。カチューシャの生活、死體の鼻から流れ出た粘液、眼窩から飛び出した眼球、それから彼がカチューシャに對して行つた行爲、そんなものが總て、同じ種類のものゝやうに思はれ、そして、自分がさうした同じ汚穢い性質のものに取り卷かれ、全くその中に吸ひ込まれて了ひさうな氣持がした。

外部の檢死報告の朗讀が終ると、裁判長は吻と息を吐き、まづお終いになつたと顏を上げたが、すると又書記は、內部の解剖報告を讀み出した。裁判長は、再び兩手の中に頭を落して兩眼を閉ぢた。ネフリュードフの隣りの紳商は、到頭眠氣が催して來て、時々コクリ〳〵とやつてゐた。被告と憲兵とだけは、靜肅に腰を下ろしてゐた。

內部の解剖報告は次ぎの通りであつた。

『(一)頭蓋骨ノ皮ハ容易ニ骨ヨリ剝離シ、血液ノ凝結シタルヲ見ズ。』

『(二)頭蓋骨ハ普通ノ厚味アリテ完全シタリ。』

『(三)腦膜ハ鈍色ヲ帶ビ、長サ四吋ノ變色シタル斑點二ケ所アリ。』

云々。他に尙ほ十三項あつた。

その次ぎには助手の記名調印があつた。尙ほ、醫師の檢案書には、死體解剖に就いての報告に記されてある胃中の變化、並びに腸と腎臟中の小變化に由つて、スメリコーフの死が、アルコールと混つて胃へ這入つた毒に原因してゐると論結してあつた。胃の狀態から推して其の毒の何たるやを決定するのは困難であるが、然し、スメリコーフの胃中に多量のアルコールのある所から見て、其の毒がアル

コールに混入して胃に入つたのだと云ふことは明かであつた。

『飮んだんだ。それに違ひないテ』と、丁度眼を覺ました紳商がまた囁いた。

此の報告の朗讀は、たつぷり一時間かゝつたが、それでもまだ副檢事は中々滿足しないらしく、その時裁判長が、彼を顧みて、『內臟解剖の報告を讀むのは無駄のやうに思ふが？』と云ふと、副檢事は裁判長を振り向きもしないで、嚴乎とした調子で『私は、朗讀を請求します。』

副檢事は、少し身を起して、自分はこの報告朗讀を請求する權利があるからそれを主張するので、若し許可されなければ、それを廉に控訴してやると云つた態度を示した。

胃カタルを病つてゐる、長い腮鬚のある判事は、全く此の朗讀にあてられて、裁判長に向ひ、

『一體何の必要あつて、こんな事をすつかり讀まねばならぬのだ。時間がかゝるばかりぢやないか、こんな新しい帚木は、掃除の役には立たないよ。たゞ暇潰しになるだけだ。』

金緣眼鏡の判事は、悒ぎ込んだ顏をして、前の方をじつと見ながら、何にも云はずに、自分の妻に於けると同樣、一般の世の中からだつて、何うせ好い事の期待されよう筈はないと考へてゐた。報告書の朗讀がまた始つた。——

『千八百十〇年、二月十五日、醫務局ヨリ委任サレタル下名ハ、……』と、書記は、恰も、列席の人々を襲ふ睡魔を追ひ拂はうとするやうに、一段聲を張り上げ、嚴然として再び讀み始めた。『檢屍官助手立合ノ上ニテ、第六百三十八號ノ內臟檢視調書ヲ作ル——

『(一)右肺ト心臟(六ポンド硝子罎入)

『(二)胃の含有物(六ポンド硝子罎入)
『(三)胃腑(六ポンド硝子罎入)
『(四)肝臓、脾臓、腎臓(九ポンド硝子罎入)
『(五)腸(九ポンド陶製罎入)

こゝまで讀んで來た時、裁判長は、同僚の一人に囁き、もう一人にも身を屈めて、同意を求めた上で、『法廷は、此の報告書の朗讀を無用と認める』と、云つた。書記は、直ちに朗讀を止めて、書類を疊んで了つた。副檢事は、むつとしながら何事かを書き始めた。

『陪審員諸君は、證據物件をお調べ下さい。』と、裁判長は云つた。陪審員長初め一同は各自立ち上つて卓の所へ行つたが、何うして可いのか薩張り判らなかつた。彼等は、指環と硝子罎や、試驗管などを順々に見た。例の紳商は、指環を自分の指に嵌めて見たりなどまでして、

『やあ、こいつア大きな指だ――。』と云つて、自席へ歸りながら『まるで胡瓜みたいだ。』とつけ加へた。確かに彼は、その被害者の商人が莫迦げて大きな男だつたことを想像しながら、面白がつてゐたのである。

二一

證據物件の調べが濟むと、裁判長は、その終結を報告し、直ちに副檢事に論告を命じた。そして副檢事も亦人間である以上、煙草を喫みたからうし、食事もしたからうから、他の者に對して、幾らか

同情して呉れてもよからうと思つた。けれども副檢事は、人へも自分にもそんな同情などは氣振りも見せなかつた。然るに此の男は元來愚鈍な上に、不幸なことには、中學を出る時金牌を貰ひ、大學で羅馬法を研究してゐる時、地役論の論文を書いて褒美を貰つたので、すつかり増長せ上り、その上女に款てたのが更に手傳つて、到頭飛んでもない大たはけになつて了つた。

論告を命じられたので、副檢事は金モールの繡のある制服に堂々たる威儀を示しながらやほら立ち上つた。片手を机の上に置いて、法廷をぐるりと見廻し、少しく頭を下げて被告の視線を避けつゝ、先刻報告書の朗讀中に準備して置いた辯論を始めた。

『陪審員諸君、今諸君の前に提起されたる事件は、私をして云はしむれば、非常に特徴ある事件であります。』

此の男の考へだと、副檢事の辯論は、後年名を揚げた辯護士の著名な初辯論と同様に必ず公衆の注目を牽くものだと思つてゐた。所が、事實傍聽人と云つたら、僅か三人の女――針女と、飯炊き女と、シモンの妹と――と、一人の辻馬車の馭者とだけであつたが、そんな事には彼はおかまひなかつた。實はこんな事をやるので彼も漸く評判になりかけてゐた。いつもえらさうな意見を持ち出して、犯罪の心理的意義を捜り、社會の病弊を赤裸々に指摘するのが、此の副檢事の主義であつた。

『陪審員諸君、諸君の眼前には、今、私をして云はしむれば、此の十九世紀末に於ける特色ある犯罪があります。つまり、現代社會に於ける慘憺たる現象のあらゆる特徴、卽ち社會各要素悉くの腐敗が此の事件に含まれてゐるのであります――私をして云はしむれば、つまり、この事件が現代社會の

腐敗を最もよく代表的に暴露してゐるのであります。』

副檢事は、折角の腹案だから、一箇條も漏すまいとしながら、又それと共に、滔々と流れるやうに陳べようと努めながら、殆ど一時間と十五分間も、少しの淀みなく長々と辯じ立てた。其の間、たつた一度休んで、一寸の間唾を飲み込んで立つてゐたが、軈て氣を得て盛りかへし、更に一層雄辯になつた。或時は、足を交る〳〵踏みながら、陪審員の方を向いて、柔しい皮肉な調子の聲を出したり、或時は手帳を見ながら落ちついた、事務的な調子になつたり、或時は、聽衆や辯護士に眼を配りながら、叱るやうに聲を張り上げたりして述べた。けれども彼は、自分を睨と見詰めてゐる三人の被告の方だけは見ることを避けてゐた。その頃彼等の社會に流行したあらゆる新しい癲狂の名と、科學的知識の術語を、現在行はれてゐるのも、もう廢つて了つてゐるのも、總て皆最近のもの〻やうに考へて、悉く其辯論中に取り入れて並べ立てた。例へば、遺傳、先天的犯罪、ロンブロゾやタールド、進化及び生存競爭、催眠狀態及び催眠暗示、シャールコート及びデカダン等。

彼の說明によると、商人スメリコーフは、質朴正直な粗野な露西亞人の典型で、人を信じ易い鷹揚な性質だつたために、深く墮落し盡した奴等の手に陷つて非業の死を遂げたのであつた。

シモン・カルチンキンは奴隷制度の因襲的產物で、腑脱けで、無智で、無節操で、宗教さへもない無頼漢であつた。エウフイーミヤは、その情婦で、之も矢張り遺傳の犧牲で、墮落者のあらゆる特徵を悉く具へてゐた。それから、此の事件の主となつた操縱者はマースロワで、これは最も下劣な形でデカダンの現象を示してゐた。『この女は』と云つて、副檢事は、マースロワを見ながら『今日、その抱主

が法廷で陳べしが如く、教育を受け、單に讀み書きが出來るのみならず、佛蘭西語をも知つてゐる。この女は、孤兒であるから、或は生れながらにして罪惡の芽を持つて來たのかも知れない。この女は立流な身分ある家に引き取られて育つたのだから、正直に働いてさへゐれば正しい生活が送られたのに、自墮落がしたいばかりに、到頭主人を捨て〻、妓樓なんかに這入つて來たのである。妓樓では、教育があるので他の女達とは違ひ、陪審員諸君も今その抱主から聞かれた通り、近頃、科學に由つて、殊にシャールコート派の學者に由つて研究されてゐる催眠的効果と云ふ一種不可思議な魔力で客を騙し込んでゐる。か〻る魔力で、この女は、好人物のサーツコ（傳說の主人公）とも云ふ可き金持ちお客の露西亞人を丸め込み、最初すつかり信用させて置いて、金を奪ひ、そして揚句の果には無殘にも殺して了つたのである。』

『どうも、よく饒舌り立てるぢやないか。』と、裁判長は、微笑みながら、同檢事の方へ身體を屈めて云つた。

『恐ろしい馬鹿奴郎だな。』と、しかつめらしく判事は云つた。

そのうちにまた副檢事は辯論を續けた。

『陪審員諸君』と、彼は氣取つた風に身體を振つて『諸君の手の中にはこの人達の運命が握られてゐるばかりでなく、又、或程度まで、社會の運命も諸君の裁決に影響される所が多いのである。依つて、此の犯罪の性質を十分御考へあつて、私が所謂病的人物と假稱するマースロワの如き者のために、再び社會が亂さる〻如き危險なきやう希望します。罪惡の傳染を防ぎ、健全無垢なる社會の分子をし

て、病毒に感染し、破滅に至らしむるやうのことなからんことを切に望む。』

　と、マースロワに對する判決の重大なことを吹き立てゝ、自分自身までがそれに吹き倒されたかのやうに、副檢事はどつかり身體を椅子に埋めたが、如何にも自分の辯論に滿足したやうに、得意の色があり〳〵と見えてゐた。この形容詞澤山に飾り立てた、副檢事の辯論の意味は、マースロワは、商人をすつかり騙し込み、氣を許させて置いて、全部その金員を捲き上げようと思ひ、鍵を持つて一人で、その商人の旅館へ出掛けて行つたが、折惡しく、シモンとエウフィーミヤとが來合せて、現場を見られたので、金は三人で分けなければならなくなつた。さうして、その罪跡を蔽はんために、再び彼女は、商人を旅館へ連れ戻り毒殺したのであつた。

　副檢事の辯論が終ると、燕尾服の胸開きの胴衣の下から、糊のついたワイシャツを出した中年の紳士が辯護士席から起立して、カルチンキンとボーチコワのために辯護した。此の辯護士は三百ルーブリの約束で彼等に依頼されてゐたのだ。彼はこの二人の無罪を主張し、マースロワ一人に責めを負はせ、マースロワが金を取り出す時、ボーチコワもカルチンキンも立ち合つたと云ふマースロワの陳述を否認し、毒殺の嫌疑を受けた者の證言は、信ずるに足らぬと、その點に殊に力を入れて云つた。この辯護士の云ふ所によれば、例の一千八百ルーブリは、此の正直な勤勉な兩人が、毎日旅客から貰つた三圓五圓の心附けを貯めたものであることは、容易に頷かれることで、商人の金は全然マースロワ一人で盜んだに相違ないが、丁度その時彼女は、常軌を逸してゐたから、金は誰かに遣つたか、或は失くして了つたかも知れない。毒殺は無論マースロワ一人の所爲である、と云ふのだつた。それで、カルチンキ

ンとボーチコワとは、竊盜犯から放免して呉れと、その辯護士は陪審員に願つた。もし竊盜犯から全然放免出來ないとしても、少くとも毒殺事件に關係してゐないことは認めて貰ひたいと云ふのだつた。

　副檢事の論告に對しては、遺傳に關するその該博な卓論は、十分科學的事實を説明してゐるけれども、ボーチコワの如き兩親共に不明な者には適應し難いと斷定して非難した。副檢事は、怒つた顏をして何か書き付けた。そして、その辯護士を蔑むやうに肩を搖つた。

　マースロワの辯護士も起立して、臆病さうにおど〳〵しながら、辯護し始めた。金を盜んだ件に就ては少しも否定しようとはせず、マースロワはたゞスメリコーフを睡らせ度いばかりに散藥を飲ませたので、毒殺する意志は毛頭なかつたのだと云ふ事實に就てのみ主張した。尚ほ彼は少し元氣を出して、マースロワを墮落させた男は罰せられないで、獨り彼女のみが罪の重荷を背負はされてゐるのだと辯じ出したけれども、此の心理學の範圍へ傍それした辯論は至つて奮はなかつたので、一同は皆すつかり退屈して了つた。男の殘忍性、女の頼りなさ等に關して何かモグ〳〵辯じ立てた時、裁判長は、此の事件の事實以外に渡らぬやうに彼に注意を與へた。

　辯護士がその辯論を終ると、副檢事が又起立してそれに答辯した。彼は、ボーチコワの辯護士の辯論に對しては、ボーチコワの兩親が不明であらうがあるまいが、それに由つて遺傳の道理に變化はないので、遺傳の法則は科學に由つて確實に證明されてゐる通り、遺傳から犯罪が生ずるばかりでなく、犯罪が又遺傳を作るのでもあると駁論した。マースロワの辯護士に對しては、たとへマースロワが或

誘惑者に欺かれたと假定（この「假定」と云ふ語に特に力を入れて）しても、目前の證據から云へば、却つて彼女が、その手中に陷つた犧牲を誘惑したことは明かである、と云つて、勝ち誇つた樣子で席に着いた。

それから被告は、各自に直接自分の辯護をすることが許された。

エウフイーミヤ・ボーチコワは、再び、自分は何も知らぬ事、何等の關係もないことを繰り返して、罪をすつかりマースロワになすりつけた。カルチンキンは、『御調べでは御座りますが、私は何も知らねえ事で、ヘエ、屹度それや間違ひで御座りやしよう』と、云ふことを幾度も繰り返したゞけだつた。マースロワは何も辯疏しなかつた。裁判長が、何か辯解することはないかと訊いても、彼女はたゞ眼を上げて、裁判長を見、それから獵り取られた動物のやうにキヨト〳〵と法廷內を見廻したゞけで、軈て頭を垂れてわつと泣き出して了つた。

これを見ると、遉にネフリユードフもまた咽せ返つた。すると例の紳商が、聞き咎めて、『何うなすつた』と訊ねた。けれども、ネフリユードフも一體何うしたのか自分でも知らなかつた。咽び泣きだけはやつと制し止めても、尙ほ涙は一杯眼にたまつてゐた。これはつまり自分が氣の弱いせゐだと彼は思つた。涙をかくすために彼は、鼻眼鏡をかけ、それからハンケチを取り出して、涙をかみ出した。自分の昔の不行蹟がこの法廷の總ての人々に知れたら、何麼に不面目な事だらうと云ふ恐れが、この時も矢張りネフリユードフを脅して、彼の折角の內心の反省を鈍らせて了ふのだつた。この恐怖は、この裁判の始つた暫くの間は、他の何よりも強いものだつた。

三

被告等の陳述が終ると、陪審員の審議に移す諸問項目の形式を論するために又幾らか時間を費した。それが出來上ると、裁判長は、その大要を說明し始めた。

陪審員の裁判に附託する前に、裁判長は、暫くの間、快活な打ちくつろいだ親しみのある態度で、次ぎのやうな說明をした。強盜は強盜で、竊盜は竊盜で、錠前のかゝつた場所より盜み出したのは、錠前のかゝつた場所より盜み出したのであると云ふのである。かうした說明中に裁判長は屢々ネフリユードフの方を見たが、それは恰も此の重大な眞理を彼にだけは是非會得して貰ひ、更に彼の同僚をも理解させて與れと賴んでゐるやうであつた。陪審員達が十分此の道理を會得したと思ふと、裁判長は更に他の說明に進んだ。即ち殺人とは、その結果として、人を死に至らしむる行爲で、毒殺も亦その理由に依つて殺人であると云ふのであつた。この道理も陪審員が又合點したと見ると、彼は更に、もし竊盜と殺人とが同時に行はれた場合には竊盜殺人罪として論ずべきものであると說き進めた。

裁判長は、出來るだけ早く終結にしたいとあせりながらさぞ瑞西女が待つてゐるだらうと氣にかゝるのだつたが、それでも、遉に職務にたづさはると、ツイ吾を忘れて、一度饒舌り出したら中々止める事が出來ず、陪審員等に十分會得させてやらうと、更に次ぎのやうに陳べ立てるのであつた。即ち陪審は、もし被告を有罪と認めたら有罪の決定を與へ、もし無罪と認めたら無罪の決定を與へ、もし一つの犯罪を認めて他の犯罪を認めなければ、一方を有罪とし他方に無罪の決定を與へるの權利があ

ると說いた。それから尙ほ、その權利は、陪審員に與へられては居るが、道理を以て行はねばならぬものだと云ふことを說明した。更に又、陪審員に附議された諸問の中、單にその何れかの條項に就いて確答を與へても、その諸問の全條項を悉く認定したものと見做す故、もしその條項全部を確認しない場合には、丁々の件を除きて確認すと云はねばならぬと注意した。然し、此の時、ふと時計を見るともう三時に五分前なので、これ以上說明しなくとも、陪審員には十分理解されたものだと決めて了つた。

『此の事件の眞相は次ぎの如くである』と、裁判長は、已に辯護士や檢事や證人等に依つて數回述べられた事を又初めからすつかり繰り返し始めた。

裁判長が辯論を續けると、他の者は注意深い表情をして聞いてゐたが、たとへそれが有益にしろ——いや有益には相違あるまいが、それにしても少し長すぎると思つて皆時々掛け時計の方を見やつた。副檢事辯護士初め其の他法廷の總ての人は皆それに同感であつたが、裁判長は、やつとその槪略を述べ終つた。

總ての事はもう云ひ盡されて了つたやうだが、それでもまだ裁判長は中々自分の發言權を棄てる事が出來なかつた。人を感動させてゐるやうな自分の聲を聞くのが自分自身でも心持ちよかつたので、尙ほ數言、陪審員に與へられた權限の重大な事や、その權利を行ふには細心の注意を要する事や、それを濫用してはならぬ事や、彼等の宣誓を重んずべき事や、彼等は社會の良心である事や、會議室の秘密は神聖なるべき事や、その他の事などに就いても陳べずにはゐられなくなつた。

裁判長が、その辯論を始めた時から、マースロワは、一言もそれを聞き漏すまいとするやうにして、裁判長の顏をじつと見詰めてゐた。それでネフリユードフは、マースロワの眼と打衝かる恐れがないので、暫くシゲ〱彼女を見てゐた。すると彼の心には樣々な顏形が現はれて通つた。長らく會はなかつた人の顏は、最初突然見ると、その間に隨分變つたやうに思はれるが、然しその變化は、軈て段々消え去つて、次第に昔の面影に返つて行き、我々の心の眼の前には、二つとはないその人特有の、精神的個性の主要な表情だけが現れて來るものである。さうだ、獄衣を著てゐても、大人臭くなつて、胸が張り、下脹れな顏になつてゐても、額や顳顬に小皺が出來て、腫れぼつたい眼になつてゐても、それは矢張りあの復活祭の晩に、喜びに充ちた活々した、さうして甘へるやうな愛くるしい眼で、自分の戀する男をじつと無邪氣に見上げた時のカチユーシヤに違ひなかつた。

『幾年かの間、今迄一度も會はなかつたのに、自分が陪審員になつて出廷した今日と云ふ今日、然も被告席にゐた彼女と面會しようとは、何と云ふ思ひがけないことであつたらう。一體何うなる事か、兎に角一時も早く片を附けたいものだ。』

でも、ネフリユードフは、心に悔悟の念が起りかけたと云ふだけで、まだすつかり悔悟し切つてはゐなかつた。彼は、すべてが偶然の出來事で、時さへ經てば直ぐ忘れて了ふものだと考へ、だからそれに依つて自分の生活が害はれるやうな事は全然ないと信じようとしてゐた。さうして彼は、その身を、主人に首ねつこを捉へられて、何かに無闇と鼻面を擠り付けられてゐる小狗のやうに考へようとしてゐた。小狐は、キヤン〱泣き聲あげて、後退りして、出來る限りその折檻から逃れようと悶躁

いても、無慈悲な主人は中々放しては呉れないのだ。

そこで、ネフリユードフは、自分の嘗てしたことを厭はしく感じ、また、それに對する神の力強い手をも感じたが、然し彼はまだ自分の行爲の惡いと云ふ根本の意味が、すつかりは解らなかつたので、隨つて、神の手が自分の上に加へられるのを正當だとは認めたくなかつた。彼は、今自分の前に横たはつてゐる責苦を自分の過去の行爲の結果だとは思ひ度くなかつたが、神の無慈悲な手が何と云ふ譯もなしに自分を捕へて放さないので、何うしてもモウ自分は逃れられないと觀念した。でも彼は尙ほ、元氣を失ふことはなく、矢張りいつもの通り落ち著いた態度で、第一列の椅子に腰掛け、無造作に足を組んで、鼻眼鏡を弄つてゐた。けれども、その間絶えず彼の心の底では、この特別な一件ばかりではなく、その他一體に自分の吾儘な、墮落した、殘忍な、怠慢な生活の殘酷と、臆病と卑劣とがしみ〴〵と感じられた。そして、彼の罪惡と、その後十幾年間のちのすべての生活とを、或得體の知れぬ方法で自ら欺き隱して來た恐ろしい幕が、今や漸く捲ぎ出して、其の陰に隱されてゐたものがちら〴〵と瞥見されるやうな心持がして來た。

二三

裁判長は漸く說明を終ると、諮問の項目書を勿體振つた手附で取り上げて、それを受け取りに來た陪審員長に手渡した。陪審員は會議室に行かれるのを喜んで、立ち上り、今度も自分達は何をすれば可いのだか、それは判らないと云つたやうな、何かしら羞しさうな顏附をして段々に法廷を出て行つた。彼等が皆出て了つて戶が閉まるとそれと同時に憲兵が出て來て、劍を拔いて肩に捧げ、戶口の傍に立つた。裁判官連も立ち上つて出て行つた。被告達も連れ出された。陪審員連は、會議室に這入ると前と同じく先づ紙莨を取り出して燻らし始めた。法廷の席に列してゐる間は、不自然な態とらしい自分達の姿勢が何だか窮屈に感じられて苦しかつたが、今評議室に這入つて來て、紙莨を一服ふかすとほつと救はれたやうな氣になつてどつかり腰を下ろしながら、すぐ又ガヤ〳〵饒舌り出した。

『あの妓の罪でありませんな。あの妓は連累を食つたんですぜ』と、好人物の紳商は云つた。『あの女には慈悲をかけてやらねばなりませんね』『そこが大に考へねばならぬ所です』と陪審員長は云つた

『吾々は個人的印象に偏して了つてはなりません』

『裁判長の說明は巧かつたね』と大佐は云つた。

『巧い？へえ、私は危く睡らされる所でしたよ』

『つまりその、もしマースロワが共謀してゐなかつたとすれば、その旅館の雇人共が金の事を知らう筈がない譯でせう』と、猶太出の店商人は云つた。

『では、君は金を盜んだのはマースロワだと有仰るんですな』と、一人の陪審員が訊ねた。

『私は何うしたつてあの女がしたとは思はない』と、好人物の紳商は叫んだ。『すべて皆、あの赤眼玉の鬼婆の仕業です』

『好い相棒だね、あいつらは皆』と大佐は云つた。

『だけど、あの鬼婆は被害者の部屋へは足踏みしなかつたと云ふぢやありませんか』

『では、あの婆の云ふ事を君は信じなさるんですか、何うしても？』

『あんなすべつたの云ふことを眞に受けてたまるものか、どんなことがあつたつて』

『あなたがあの婆を信じると信じないとでこの問題が決まる譯ぢやありませんよ』と、店商人が云つた。

『だが、あの妓が鍵を持つてゐたのだからな』と、大佐は云つた。

『持つてたら何うなんです？』と紳商は云ひ返した。

『それから指環もぢやないか？』

『だけど、それに就いては、あの女が既に逐一陳述したぢやありませんか』と、紳商は再び叫んだ。『スメリコーフと云ふ奴が一體變人なところへ酒を飲み過ぎたのとで、あの妓を擲つたんですな、然し根が善人なんですからね、すぐ氣の毒になつたんでさァ。これや當然なことです。「まァ氣にかけるな、さあこれを與らう」と、彼奴、かう云つたに違ひありません。それから彼奴は六尺五寸も背丈があつたと云ふから、目方も三十貫以上は乾度あつたに相違ないと思ふんです』

『それは問題ぢやないよ君』と、ピョートル・グラシモーウヰチが云つた。『問題は、あの妓がこの事件を思ひ付いて敎唆したのか、あの旅館の雇人共がしたのかと云ふ所にあるのだ』

『だが雇人共だけでは出來ないことだ、鍵はあの妓が持つてたんだから』

こんなとりとめもない評定が暫く續いた。遂に陪審員長が

『失禮ですが、諸君、テーブルに着いて討議しようぢやありませんか、さあ、何うぞ』と、云つて、

て、彼は先づ自分の席に着いた。

『だが、あんな賣女は何麼事もやり兼ねないよ』と、云つて店商人はマースロワが主犯であると云ふ自分の意見を確證するもの丶如く、嘗てその友達が大通りで惡女から時計を盗られた話をした。すると、退職大佐はもつとひどい例を話した。それは銀の湯沸しの窃盗の話であつた。

『諸君、何うか諮問條項を御聞き下さい』と、陪審員長は、鉛筆でテーブルを叩きながら云つた。

一同は靜り返つた。

諮問は次ぎのやうな條項であつた。

(一)クラビエンスキー郡ボールカ村の農、シモン・ペトローフ・カルチンキン三十三歳は他と共謀して、千八百八十〇年一月十七日——町に於て、商人スメリコーフの所有品を奪はんとし、彼に毒酒を飲ませて謀殺し、且つ凡そ二千六百ルーブリの金員と、金剛石入りの指環を盗取したりしが、こは有罪と裁決すべきや？

(二)平民、エウフイミヤ・ボーチコワ四十三歳は前項同罪と裁決すべきや？

(三)平民、カテリーナ・ミハイロウナ・マースロワ二十八歳は第一項犯罪と同罪に裁決すべきや？

(四)被告エウフイミヤ・ボーチコワの犯罪が蓋し第一項に該當せざるものとすれば、千八百八十〇年一月十七日——町に於て、マヴリターニア旅館に傭はれ中、宿泊の旅客商人スメリコーフ所有の鎹の下りたる鞄中より合鍵を用ひて、二千六百ルーブリを盗み出せし事につきてのみ有罪と裁決すべきや？

陪審員長は先づ第一項を讀み上げた。

『さて、これに就いて諸君の御意見は？』

この項は卽座に決まつた。カルチンキンは毒殺にも竊盗にも關係したとして、一同は何の異議もなく有罪と云ふことに一致した。たつた一人職工組合頭取の老人だけが無罪を主張した。陪審員長は、此の老人がよく理解してゐないと考へ、カルチンキンの犯罪に關する事項を一々示摘して聞かせた。然し此の老人は、それは十分解つてゐるが慈悲をかけてやる方が一層善い事だからだと答へた。『私達は、お互に皆聖人ではありませんからな』と云つて、中々自説を曲げなかつた。

ボーチコワに關する第二項は、いろ〳〵議論が出て喧しかつたが、結局毒殺に關する證據不充分と云ふので、彼女の辯護士が極力主張した通り『無罪』と決めた。例の紳商は、マースロワを放免にしたいばかりにボーチコワが此の事件の主謀者であると主張した。陪審員の他の多數もこの意見に賛成したが、嚴格に法律通りにやらうとする陪審員長は、皆がボーチコワを共犯者と考へる何等の根據のないことを述べ立てた。そして、種々議論の結果遂に陪審員長の意見が勝ちを占めた。

ボーチコワに關する第四項は『有罪』と決まつた。然し職工組合頭取の主張で、寛大な處置を取ることに決めた。

マースロワに關する第三項は、激しい議論が起つた。陪審員長は、毒殺竊盗二罪共彼女が關係してゐることを主張し、紳商はそれに反對した。大佐と店商人と、職工組合頭取とは紳商に味方し、他の者はどつちつかずであつたが、陪審員長の意見が勢力を得始めた。それと云ふのは陪審員達が皆もう

疲れ切つて了つて、何でも可いから早くきまりをつけて自由な身體になり度いと思ひ出したからであつた。

此の事件の顚末から云つても、以前知つてゐるマースロワの性質から云つても、ネフリユードフは、彼女が、毒殺にも竊盗にも關係のないことを信じてゐた。そして他の人達も皆必ず同じ決議に達するものと思つてゐた。然るに紳商の他愛もない辯護（紳商は明かにマースロワの美貌にすつかり參つてゐたからで、それをまた、彼は匿さうとさへしなかつた）と、陪審員長のそれに反對な頑固な自論と、そしてわけてもそれに飽き〳〵した他の陪審員達の嫌怠とが何でもマースロワを有罪にして了ひさうな形勢になつたので、それを見るとネフリユードフは、たまり兼ねて、一つ自分の意見を述べてやらうと思つたが、然しさうすると、ひよつとして自分とマースロワとの關係が曝露されはしないかと恐れて躊躇した。けれども、そんな風に事を進まさせて置く譯にはゆかないやうに思はれたので、赤くなつたり青くなつたりして、愈々口を切り出さうとした時、ピョートル・ゲラーシモキッチが、陪審員長の横柄な態度に怒つて、異議を唱へ出し、丁度ネフリユードフが云はうとしたと同じ事を云ふのであつた。

『暫くお待ちなさい』と彼は云つた。『あなたは、マースロワが鍵を持つてたのが竊盗罪の何よりの證據であるとお考へのやうだが、然しあの女が歸つたあとで、旅館の雇人共が合鍵で鞄を開けたのだと云つた方が、信じられ易いぢやありませんか』

『さうですとも、全くさうですよ』と、紳商は云つた。

『第一あの女は金を盗む筈がない。あの女の境遇では、金を盗んだところで何うすることも出來ますまいから』

『私も丁度さう云はうと思つたんです』と、紳商は云つた。

『あの女が丁度旅館に來たので、あの雇人共の頭に悪企畫が浮み、その好い機會を利用して、あの女にすつかり罪を負はせて了つたのだと云ふ方が遙かに眞理らしくはありませんか』

ピョートル・ゲラシモーウィチは激昂した調子でかう云つたので、陪審員長も亦激昂し出し、片意地になつて、反對説を固持した。然し、ピョートルは、陪審員の大多數が彼に贊成するやうになつた程熱心になつて、マースロワは金を盗むのに關係しなかつた事、又指環は貰つたので決して盗んだのではないと云ふことを極力主張した。

それから毒殺事件にマースロワが關係したかと云ふ問題になつた時、マースロワの熱心な辯護者たる紳商は、毒殺の動機がなかつたのだから、當然無罪でなければならぬと主張した。然し、陪審員長は藥をすゝめたことは被告自身が既に自白してゐるのだから、何うしても罪は免れないと云つた。

『だけど』あの女は、阿片劑だと思つたんですよ』と紳商は云つた。

『阿片劑だつて、命を絶つ事が出來る』と、兎角問題外に走りたがる大佐が云つた。そして、自分の義理の妻が、阿片の過量で危く死なうとした時の話を持ち出し、もしその時、直ぐ近くに醫者がゐて手當をしなかつたら當然死んでゐたんだと語り出した。大佐は、非常に落ち着いて、勿體ぶつて、一所懸命に眞面目になつてその話をするので、誰もそれを止める勇氣が出なかつた。すると店商人が

たゞ一人その話に釣り込まれて、

『ですがね、世間には、それを服みなれて了つて、四十滴位服んでも一向平氣な者がありますよ、現に私の親戚に——』と、自分の話を持ち出して大佐の話を打ち破らうとしたけれども、大佐はそれには滅消ず義理の兄弟の妻の阿片事件を尙ほ晳々と饒舌り續けた。

『しかし諸君、もう五時になりますよ』と、一人の陪審員が云つた。

『では諸君、何うしたものでせう?』と、陪審員長は尋ねた。『マースロワの事實は認めるが、然し彼女は盗む意志はなかつた事、又、何も盗まなかつたと、かうしたら何うでせう?』

ピョートル・ゲラシモーウイチは、自分の説が勝つたのを喜んで、贊成した。

『寛大に取り計らつてやらねばなりませんな』と紳商は云つた。

一同は皆贊成した。たゞ一人、例の職工組合頭取だけは、『無罪』としなければならぬと主張した。

『つまり同じ事になるのです』と陪審員長は說明した。『盗む意志はなかつた。そして何も盗まなかつた。だから無罪。これは明かな事です』

『よし、それで結構。寛大な上にも寛大を願ひ度いばかりだ』と、紳商は、上機嫌になつて云つた。

陪審員一同は、大變疲れて、議論で頭が混亂してゐたので、マースロワが藥を與へたのは事實だが命を取る意志はなかつたのだと云ふ但し書きを附け加へなければならぬことを誰も皆忘れてゐた。ネフリユードフも大變昂奮してゐて、その手落ちには少しも氣がつかなかつたので、諸問書の答辯は、

たゞその通りの形式に書かれて、法廷へ提出されることになつた。

ラベレーの物語の中に、一人の法律家があつて、或事件を判決しようとする時、あらゆる種類の法文を引照し、無意味なラテン法文まで二十頁も讀み上げた後、さて愈々となると骰子を投げて、もし奇數が出たら、被告の勝、さうでない時は、原告の勝と云ふことに決定せんと判事に申告したと云ふ咄がある。

この事件も、丁度それによく似てゐる。犯罪の判決は、總ての者がそれに一致したからではなく、裁判長が、あれ程長々と説明しながら、かうした場合にはいつも『事實は承認するが、命を取る意志はなかつた』と、答へねばならないと云ふことを、陪審員達に注意するのを忘れたからであつた。大佐が義理の兄弟の妻の話を長たらしくしたからであつた。ネフリユードフまでが餘りに昂奮してゐて『命を取る意志はなく』と但し書きするのを忘れ、その『意志なく』と云ふ言葉が罪を打ち消すやうになることに思ひ到らなかつたからであつた。ピョートル・グラシモーヴイチが答辯書朗讀の時、退席して居なかつたからであつた。殊に、その主な理由となつたのは陪審員一同が皆疲れ切つてゐる所から、出來るだけ早く片附けようとして、何も彼もお終ひになりさうな事にはどし／＼贊成して了つたからであつた。

陪審員連はベルを鳴した。すると拔劍を捧げて戸口の傍に立つてゐた憲兵は、劍を鞘に納めて、そこを退いた。裁判官達は法廷の席に復し、陪審員連も一人／＼這入つて行つた。

陪審員長は勿體ぶつた樣子で、答辯書を持つて這入つて行き、それを裁判長に手渡した。裁判長は

それを擴げて見て、喫驚しながら、同僚の方を向いて相談した。裁判長は、陪審員等が、『盜む意志なく』と云ふ但し書をしながら、『命を取る意志なく』と云ふ第二の但し書をしなかつたのに驚いたのであつた。陪審員の判定によると、マースロワは、竊盜も横領もしたのでなく、又、何等明かな理由なくして一人の人間を毒殺したことになるのだつた。

『まあ見給へ、何と云ふ不合理な判定をしたものだらう』と、裁判長は、その左側の同僚に囁いた『これだと、西伯利亞へ流し者だ。あの女には何も罪はないのに』

『何？　あの女に罪はないと云ふのか』と、嚴格な同僚は反問した。

『さうだよ、確かに罪はないね、これは訴訟法第八百十七條を適用する場合だ』（第八百十七條には法廷は陪審員の判定を不法と認めたる場合破棄するを得、としてある）

『君は何う思ふ？』と、裁判長は、も一人の同僚を振り返つて云つた。そのお人好しの同僚は直ぐには答へなかつた。自分の前に置かれた答辯書の番號を見て、それに或數字を加へて、彼はそれを三で割つたが割り切れなかつた。實はそれが三で割り切れたら裁判長の提議に贊成しようと決心してゐたのであるが、根がお人好しなので、割り切れなかつたけれども、到頭それに同意して了つた。

『僕も矢張りさうだと思ふね』と彼は云つた。

『それから君は？』と、裁判長は、嚴格な同僚を振り返つて尋ねた。

『斷じていけない』と、その男はきつぱりかう答へた。『事實新聞紙は陪審員が罪人を放免したがると攻擊してるぢやないか。もし我々判事がそれをしたら何と云ふだらう？如何なる事情があらうと斷

じてそれには不賛成だ』

裁判長は懐中時計を出して見た。『可哀さうだが何うするかな?』裁判長は、その答辯書を讀み上げるやうにと陪審員長に渡した。一同起立した。裁判長は足踏みしながら、咳拂ひをし、その諸問條項と答辯書を讀み上げた。法廷の者は一同——書記も、辯護士も、副檢事ですら——喫驚して了つた。被告等はその答辯書の意味が何だかはつきり判らないので、平氣でゐた。一同は再び着席した。それから裁判長は、如何なる刑を被告に適用すべきかを副檢事に質ねた。

副檢事は、マースロワを有罪にした意外な成功を喜んで、これはすべて自分の能辯のためだと思ひ、必要書類を調べて、それから起立して云つた。

『シモン・カルチンキンは刑法第一千四百五十二條、並びに一千四百五十三條第四項に照らし、エウフィミヤ・ボーチコワは刑法第一千六百五十九條に照らし、カテリーナ・マースロワは刑法第一千四百五十四條に照らして各々處分すべきものと私は信じます。』

此の求刑は三つとも出來るだけ重いものに問ふたのであつた。

『法廷はこの決定を議するため暫く休憩を命ず』と裁判長は起立して云つた。すると皆一同彼に續いて立ち上り、一仕事うまく終つたと云ふ愉快な心持になつて、部屋を退出し始めた。中には部屋の中をあちこちぶらついてゐるものもゐた。

『ねえ、君、飛んだ耻曝しをやつたもんぢやないか』と、ピョートル・ゲラシモーウイチは、陪審員長が何か話しかけてゐるネフリユードフに近づいて云つた。『何んだい、到頭あの女を西伯利亞にやつて了つて』

『何うしたつて?』と、ネフリユードフは叫んだ。此の時は、此の中學校教師の厭やな馴れ〳〵しさに氣をかけなかつた。

『何故つて、我々は、あの答辯の中に「事實は認めるが、殺意なし」と云ふ但し書をぬかして了つたんだ。丁度今書記が、副檢事は、あの女を十五年の徒刑に處しようとしてゐると云つたぜ』

『さうです、その通り決まつたんです』と陪審員長は云つた。

ピョートル・ゲラシモーウイチは、マースロワが金を盗まなかつた以上は、勿論人を殺す意志のなかつたことも當然判るぢやないかと盛んに論じ出した。

『だが、先刻僕は法廷へ出る前に答辯書を讀み上げたんですが?』と、陪審員長は自ら辯護して云つた。『誰も異議を唱へませんでした』

『其の時僕は丁度退席してゐたんだ』と、云つて、ピョートル・ゲラシモーウイチは、ネフリユードフに向ひ『君がまた、そんな事にして了ふなんて、餘程ほんやりしてたに違ひないね』

『僕もつい氣がつかなかつた——』と、ネフリユードフは云つた。

『氣がつかなかつた?』

『然し訂正が出來る』とネフリユードフは云つた。

『だつて君、もう出來ないよ、濟んで了つたんだから』

ネフリユードフは、被告等を見た。今やその運命が定まらうとしてゐる彼等は、憲兵を背後に、勾欄

を前にして、身動きもせずじつとしてゐた。マースロワは微笑んでゐた。ネフリユードフの心はムシヤクシヤと掻き亂されて來た。今の今まで彼は、マースロワは放免されて、此の町に殘るのだと思ひ込んでゐた。そしてこれから先き彼女を何う始末しようかと云ふことはまだ決めてゐなかつた。彼女と關係のあることはすべて彼にとつては非常に困難だつたに相違ない。然し、西伯利亞へ徒刑になつて行つて了へば、彼女との關係はすつかり緣が切れて了ふ譯である。手負ひの鳥は今や獲物袋の中でもがくのを止めた。そしてそれはもう息の根が絕えるのであらうとネフリユードフには思はれるのだつた。

二四

ピヨートル・グラシモーウイチが想像した通りであつた。

裁判長は宣告文を持つて、評議室から戾つて來て、次ぎのやうに朗讀した——

『千八百八十〇年四月廿八日、皇帝陛下ノ勅令ヲ奉ジテ、當M——裁判所ハ刑事訴訟法第七百七十一條ノ第三項、第七百七十六條及ビ第七百七十七條ノ第三項ニ由リ、陪審員ノ決定ニ從ヒテ宣告ス。農シモン・カルチンキン三十三歲、並ビニ平民カテリーナ・マースロワ二十八歲ノ兩名ハ、刑法第二十五條ニ照シテ公權及ビ財產所有權ヲ剝奪シ、カルチンキンハ徒刑八年、マースロワハ徒刑四年ニ處シ、何レモ西伯利亞ニ於テ服役ヲ命ズ。平民ボーチコウ四十三歲ハ刑法第四十八條ニ照シテ、公私ノ特權ヲ剝奪シ、禁錮三年ニ處ス。本裁判ノ費用ハ被告各自平等ニ分擔スベキモノトス。若シ被告等支

辨シ能ハザル時ハ國庫ノ負擔トス。證據物件ハ公賣ニ附シ、指環ハ原所有者ニ還附シ、試驗用硝子管ハ破棄ス。』

カルチンキンは兩腕を確り胴に押し付け、唇をもぐ〱させながら立ち上つた。ボーチコワは平氣をよそつてゐた。マースロワは、宣告文を聞くと、顏を眞赧にした。そして、

『寃罪です、寃罪です』と、部屋中に響き渡るやうに俄かに叫んだ。

『あんまりですわ、罪も何もない者を。わたしがあんなことをしようなんて——思ひもしないことです。わたしの申し上げるのが本當です、本當です』マースロワは腰掛に泣き頽れて、大きな聲で歔欷り上げた。カルチンキンとボーチコワとが出て行つた後でも、尙ほ彼女は腰を下ろしたまゝ泣いてゐたので、憲兵は、その外套の袖を引張らねばならなかつた。

『いや、このまゝには置いとけない』と、ネフリユードフは、自分のずるい考は全く忘れて、獨語した。彼は急いでマースロワの後から續いで廊下へ出て行つた。たゞ何となく、も一度彼女の顏が見たかつたからである。戶口は一杯の人集りであつた。辯護士や陪審員等が用事の濟んだのを喜んで、どや〱と出て行くので、ネフリユードフは暫く待たねばならなかつた。そして、彼が辛つと廊下へ出た時には、マースロワはもう遙か前方へ行つてゐた。ネフリユードフは、人が怪訝な顏をして見るのも關はず、その廊下をあたふたと急いで、彼女を追ひかけ、行き過ぎさま呼び止めた。マースロワはもう泣き止んではゐたが、尙ほ啜り上げながら、ハンケチの端で、淚で赤くなつた顏を拭いてゐた。そして、ネフリユードフには少しも氣が付かずに、その儘行き過ぎて了つた。で、ネフリユードフは裁

判長に面會しようと思つて又急いで引きかへした。すると裁判長も、もう遲延して了つた後だつたので、彼は又その後を追つて控所に行くと、そこで丁度、薄鼠色の外套を引掛けて銀の把柄のついたステッキを、給仕から受け取らうとしてゐる裁判長に追ひ付いた。

『一寸御話したいのですが、只今の裁判の一件に就いて』と、ネフリユードフは云つた。『私は陪審員の一人です』

『おゝ、ネフリユードフ公爵でしたね、いつかお眼にかゝつた事がありましたつケ』と、云つて、裁判長は、ネフリユードフの手を握り、最初ネフリユードフに會つた晩、他の若い人達よりも上手に大變浮かれてダンスをした事を思ひ出した。

『何か御用ですか?』

『マースロワに關する答辯書に間違ひがあるのです。あの女には毒殺の罪はありません。それだのに徒刑の宣告を受けたのです』と、ネフリユードフは、夢中になつて顏を曇らせて云つた。

『法廷は、あなた方陪審員の裁決に從つて宣告しましたんで』と、裁判長は、玄關口の方へ歩きながら云つた。『尤もあれは少々撞着してゐるやうには思はれましたが』そして、彼は、自分が陪審員へ說明した時、『殺人の意志なし』と云ふ但し書がなければ、たゞ「有罪」とだけでは、それは謀殺罪の意味であると云ふことを、餘り仕事を急いだので、つい忘れて了つたのに氣がついた。

『さうです、然し、この間違ひは修正出來ますまいか』

『控訴の理由は十分ありますナ。辯護士に相談なさつたら可いでせう』と、裁判長は帽子を片方に

少し傾けて、戸口の方へ歩きながら云つた。

『然しそれは困りますよ』

『尤も、あなたも御承知の通り、マースロワには二つの道があつたのです』と、裁判長はネフリユードフに出來るだけ叮嚀に氣持ちよくならうとして云つた。そして、襟の上に蔽ひかぶさつてゐる頰鬚を撫でながら、自分の手をネフリユードフの肱の下へそつと差し入れ、尙ほ入口の方へスタ／＼と歩き續けて、

『あなたも御歸りでせう?』と云つた。

『え』と答へて、ネフリユードフも手早く外套を引つかけて裁判長の後に續いた。

彼等は氣持ちの好い明るい日向へ出ると敷石道に車の轆る音が喧しいので、聲を張り上げた。

『何うも妙な具合になつたものですね』と、裁判長は云つた。このマースロワの場合は、殆ど放免になつて、ほんの少しの間收監されるか、それとも情狀酌量して一時拘留されるか、この二つのうち一つ位なところです。西伯利亞なぞにやられる譯はない筈です。何も文句がなかつたんですからね。もしあなた方が「殺人の意志なし」と云ふ詞をお附け加へになつてゐたら、あの女は當然放免なんでしたが。』

『さうです。それをぬかしたのは、私達の大失策でした。』とネフリユードフは云つた。

『そこが最も大事な所です』と云つて、裁判長はニッコリして懷中時計を出して見た。瑞西女のクララに會ふ約束の時間までもう四十五分ほかなかつた。

『もし、何なら、辯護士に話をして御覽なさい。控訴する理由を考へ出さねばなりますまいが、それは何でもありません』それから辻馬車の方を振り向いて呼んだ。『ヅヴォリヤンスカヤまで三十カペイカ、それ以上はやらないよ』

『よろしう御座います。さあ旦那』

『さようなら、御用がありましたら私の宅はヅヴォリヤンスカヤ町のヅヴォールニコフと云ふ所ですから何うぞ、覺え好い名です』と、親しげに腰を屈めて、馬車へ飛び乘つて別れた。

二五

裁判長との會話と、新鮮な外氣とが、幾らかネフリユードフを落ち着かせた。彼の感情が今迄何となく大袈裟に上摺つてゐたのは、午前中ちよつと普通にない色々な事に邂逅したからであることが判つた。

『本當に思ひがけない驚いた出來事だが、兎に角あの女の運命を是非とも全力を盡して、出來るだけ早く輕くしてやらねばならぬ。さうだ今直ぐにもだ。ファナーリンかミキーシンは何處に住んでるか、裁判所へ行つて訊ゐなければならぬ。』と、彼は二人の有名な辯護士の名前を憶ひ出した。裁判所へ引き返して外套を脫いで二階へ上つた。すると丁度出會ひ頭に廊下でファナーリン自身に會つた。呼び止めて、丁度今用があつて探してゐる所だつたと告げた。

ファナーリンは、ネフリユードフの顏も名前もよく知つてゐたので喜んでその依賴を受けようと云つた。

『もう大分疲れてはゐますが、さう手間が取れませんでしたら、今すぐ御用件を伺ひ度いのですが、何うです、こちらへいらつしては？』と、彼はネフリユードフを、ある法官の部屋らしい所へ導いた。二人は、テーブルを挾んで腰を下ろした。

『で、御用件は何ですか』

『何よりも、まづ、この事に就ては秘密を守つて頂き度いのです。私が物好きでこの事件に手を出したと云はれるのは何うも嫌やですから』

『如何にも御尤もです、承知しました。』

『私は今日、陪審員として出頭したのですが、私達は誤つて一人の女を西伯利亞行きの徒刑に處して了ひました。罪も何もない女を、それが何うも氣になつてならないんですが』と、ネフリユードフは、自分でも驚く位、どぎまぎして眞赧になつた。ファナーリンは、ちらと素速くその容子を見たが再び下を向いて、耳を傾けた。

『如何にも』

『私達はその女を旣に判決したのですが、私は更に高等裁判所へ控訴したいと思ふのです』

『元老院へですか』と、ファナーリンは云つた。

『さうです。そこで此の事件をあなたにすぐ御引き受けして頂き度いのですが。』と云つてネフリユードフは、一番厄介な問題を片付けて了はうと思つて、尙ほ附け加へた。『この事件の費用は、幾らか

〻つても皆私が支辯します』

『え〻、御引き受け致します』と、辯護士はネフリュードフがこんな事件には不案内なのを見ると、慇懃に微笑を浮べて云つた。『何んな事件ですか』

ネフリュードフは一伍一什を述べた。

『宜しう御座います、明日よく調べて見ませう。ですから明後日――いや――木曜日の方が都合が好いんです。午後六時に私の宅まで來て頂きますと、御返事致します。では、今日はこれで失禮致します。尙ほ數件取り調べ物がありますので』

それで、ネフリュードフは、辯護士をのこして出て行つた。

辯護士と話をして、マースロワの辯護を引き受けて貰つたので、ネフリュードフは一層落ち着いた。彼は町へ出て行つた。晴れ渡つた美しい天氣なので、氣持ちがせい〳〵して、新鮮な春の空氣を胸一杯に吸ひ込んだ。辻待馬車が周圍に寄り集つて來てうるさく勸めたが、彼は尙ほてく〳〵步いて行つた。すると、カチューシャの顏や姿や、彼女に振舞つた自分の行爲などが色々とすつかり思ひ出されて、くる〳〵彼の頭の中を馳け廻り始めたので、一種壓へつけられるやうな氣持ちになり、何も彼も總てが憂鬱に思はれた。

『いや、こんな事は皆後でよく考へる事にしよう、今は一切不快なことを思ひ出してはならぬ』と彼は心の中で思つた。

彼は、不圖コルチャーギン家の晩餐會を思ひ出したので、時計を出して見た。時間までにまださう

おそくはなかつた。折柄通りかゝつた軌道車のベルを聞いたので、走つて行つてうまくそれに飛び乘つた。市場まで行くと、其處で降りて、今度は綺麗な辻待馬車を雇ひ、それから十分ばかり經つと、コルチャーギン家の宏莊な邸の玄關に着いた。

二六

『何うぞ御入り下さい、閣下』とコルチャーギン家の宏莊な邸の、なれ〳〵しいでつぷり肥つた玄關番が恁ういつて、音のしない專賣の英國製の鐵鋲のついた戶を開けて、『皆樣がお待ちでゐらつしやいます。今御食事で御座いますが、閣下が御出でになつたら、御通し申せとのお云ひ附けで御座いました。』玄關番は階段まで行つてベルを鳴した。

『他にも御客樣があるかい』と、ネフリュードフは外套を脫ぎながら云つた。

『お宅の方の他にコロソフさまとミハイル・セルゲーウイチさまだけで厶います』

燕尾服に白手袋を穿めた、頰髯のある非常に美男な用人が中階段からじつと下を差し覗きながら『何うか御上り下さい、閣下』と云つて、『皆樣御待ち兼ねで御座います』

ネフリュードフは階段を上り、お馴染みの莊大華麗な舞蹈室を通つて、食堂へ入つて行つた。コルチャーギンの家族は、部屋を一步も出たことのない夫人のソフイヤ・ワシリエウナを除いた他は、總てテーブルを圍んでゐた。テーブルの上座には老主人公、その左には醫者、右には主人の友達で、自由黨員で、以前ば地方の貴族長で今は銀行頭取であるイワーン・イワーノウイチ・コロソフがゐた。チ

ーブルの左側には、ミッシー孃の可愛らしい妹の、今年四歳になるのと、その保姆のレトデル孃とがゐた。その對席には、公爵の一人息子で、中學六年生のペーチャが腰掛けてゐた。この一家がまだかうして町にゐるのはこの子の試驗が濟まないからであつた。その次ぎにはペーチャの家庭教師の大學生と、それから普通ミーシャと呼ばれてゐる、ミッシーの從兄弟のミハイル・セルゲーエウヰチ・テレーギンとがゐた。その對席にはスラブ主義の四十になる老獨身婦人カテリナ・アレキセエーウナがゐて、テーブルのお終ひの所に令孃ミッシーが控へ、その隣りの席が空けてあつた。

『おゝ、これや丁度好い所だつた。さあ御掛けなさい。今始めたばかりの所です』と、老公爵はネフリユードフの方へ充血した眼（眼瞼のはつきりしない）を揚げ、義齒で念入りに肴を嚙みながら覺束ない口調で云つた。

『ステパン』と、老公爵は口には一杯物を頰張りながら、肥つた、勿體振つた執事に空席を目で指示した。ネフリユードフは、コルチャーギン公爵をよく知つてゐて、度々食事も一緒にしたことがあるが、今日は、その下卑たピチャ〳〵舌打ちする唇や、赧ら顔や、チョッキへぴたりと付けたナプキンの上へ出てゐる太つた頸筋や、全く軍隊的に鍛へ上つたその身體つきなどが非常に厭やな氣持ちを起させた。ネフリユードフは、この老公爵が、嘗て職にあつた時、非常に殘酷に人を扱つたことを不圖思ひ出した。彼は金持ちなので別に他人の歡心を買つてまで在職を願ふ必要がなかつた所から、何の理由もないのに無闇と人々を苔刑に處したり、或は絞刑に處したことさへもあつた。

『はい、只今』と、ステパンは、澤山の銀器で飾り立てられた戸棚から、大きな匙を取り出しなが

ら云つた。そして、美男の用人へ顋で合圖をすると、その男はすぐ新しいナイフとフォークと、それから一番上に定紋の刺繡の附いてゐる、丁寧に折り疊まれたナプキンとをミッシー孃の隣りの空席の前へ並べた。ネフリユードフは總ての人と握手をして廻つた。老公爵と、婦人達とを除いた他の人達は皆、ネフリユードフが近づくと立ち上つて挨拶した。此のテーブル廻りや、今迄少しも話したことのない多くの人達と握手するのが、何だか不愉快で莫迦〳〵しく思はれた。彼は、遲刻した云ひ譯をして、ミッシーとカテリーナ・アレキセエーウナとの間へ腰掛けようとすると、老公爵は、もし、ウォツカを飮らないのなら、傍のテーブルへ行つて何か食べて腹を作つて下さいと云つた。そこには、蝦だの、鹽漬けの魚卵だの、乾酪だの、鹽鰊だのが準備してあつた。ネフリユードフは食ひ始めるまでは、格別空腹だとも思はなかつたが、麵麭とチーズとを食つてゐる中に、段々夢中になつて平げて行つた。

『何うです。首尾よく社會の基礎を顚覆しましたか？』と、コロソフは、陪審制を攻擊する反對新聞の慣用文句を皮肉に引照して云つた。

『有罪者を放免し、無罪者を處分したのでせう、はつ〳〵はつ』

『基礎を顚覆？　基礎を顚覆する？』と、コルチャーギン老公爵は笑ひながら云つた。老公爵はこの親友の見識學問を深く信じてゐた。

失禮とは思ひながら、ネフリユードフは、コロソフの問ひには答へずに、たゞじつと腰を下ろしたまゝ湯氣の立ち上るスープを啜つてゐた。

『まあ、あの方は食べさして置きなさいまし』と、ミッシーはニッコリして云つた。彼女はいつ

も自分、とネフリユードフとは、如何にも親密であると云ふやうな物の云ひ振りをするのだつた。コロソフは聲を張り上げ、意氣込んで彼を憤起させた陪審制反對の論說の內容を說き出した。ミツシーの從兄弟のミハイル・セルゲエーウイチも、それに雷同して、同じ新聞紙の他の論說の內容を語つた。ミツシー孃は、いつものやうに、華やかなお化粧をして立派な衣裳を着け、遠慮勝ちに控へてゐた。

『さぞ御疲れで、お腹がおすきになりましたでせうね』と、彼女はネフリユードフが口の中の物を呑み込んで了ふのを待つてから云つた。

『そんなぢやありません。時に、あなたは、畵を見に行らつしやいましたか?』と、彼は尋ねた。

『いゝえ、あれは延ばしました。そしてサラマートフさんの所でテニスをして遊びましたわ。成程クルウクスさんは本當に飛びぬけて御上手ですのよ』

ネフリユードフは、自分のムシヤクシヤする考へを紛らすために此處へは來たのであつた。それは第一此處の萬事粹を盡した贅澤が心持ちよく、それに又周圍の人々が皆ひどくへりくだつて丁寧に彼を款待してくれるからであつた。けれども、今日は何うしたものか、玄關番を初めとして、幅廣い梯子段、盛り花、用人、食卓の飾付け、それからミツシーまでが、何だか空々しく、いやにめかし込んでゐるやうで厭やな氣がしてならなかつた。自由主義を氣取つたコロソフの獨りよがりな愚にもつかない議論、老公爵の下卑た橫柄な牛面、スラブ主義のカテリナ・アレキセエーウナの佛蘭西語など、何も彼も不愉快であつた。保姆や家庭敎師などの氣兼ねした窮屈さうな顏付も厭やだつたが、何よりも一番厭やなのはミツシーがいつも使ふ「あの方」と云ふ言葉であつた。ネフリユードフはミツシーに對して

は二つの考への中にまださまよつてゐた。或時は、月の光で物を見るやうに、彼女の美しい一面ばかりが目につき、さうかと思ふと又忽ち、輝かしい日光の下に晒らし出して殆ど見るに堪へないやうな彼女の瑕瑾があり〳〵と見えるのだつた。今日は丁度その瑕瑾ばかり見える日であつたのだ。彼女の顏の皺が見え、髮の毛の縮れが見え、肱の尖つたのが見え、そしてわけても彼女の拇指の爪の大きさがまるで父親のとそつくりなのに眼がついた。

『テニスなんか間の拔けたものだよ』と、コロソフは云つた。『我々の子供の時は、ラプター（遊戯の名）をやつたものだ。あれの方が餘程面白いね』

『いゝえ、だけどあなたは、テニスをおやりにならないぢやありませんか。それや素敵に面白いものですよ』と、ミツシーは云つた。ネフリユードフは、ミツシーが、何だかその素敵にと云ふ言葉に殊更ら力を入れて云つたやうに思つた。それから、ミハイル・セルゲエーウイチとカテリーナ・アレキセエーウナとが口を容れたので、無言で退屈さうに腰掛けてゐる保姆と家庭敎師の大學生と子供とを除いた外の者の間に議論が始つた。

『よくまア議論があるもんだ』と、老公爵は笑ひながらチヨツキからナプキンをはづして、椅子をがた〳〵云はせて（すると用人がすぐそれをしつかり押へたが）テーブルを離れた。

一同は彼に續いて起ち上り、他のテーブルの方へ行つた。そのテーブルの上には幾つかの香水をたらした微溫湯の入つた玻璃器が立てゝあつた。皆はそれで口を嗽いで、それから又、面白くもない話を再び始めた。

『ねエ、貴郞はさうは思ひなさらなくつて?』とミッシーはネフリユードフに向つて、遊戯の趣味程人の性質を表はすものはないと云ふ自分の說に贊成して貰はうとして云つた。けれどもネフリユードフが、何か他の事に氣を取られてゐるのに氣がつくと、何だかその不滿足らしい顏付が氣にかゝり、どうしたのか、その理由が知り度くなつた。

『實際、私にはお答へが出來ません、そんなことを私は考へたことがないんです』と、ネフリユードフは笑つた。

「阿母様の所へいらつしやらない』と、ミッシーが尋ねた。

『さうですね』と、彼は、行き度くなささうな、困つたやうな口調で云つて、紙莨を取り出した。

ミッシーは怪訝さうに無言つて彼を見詰めたので、遉に彼も恥かしくなつた。『他人の家へ來て、人に不快を與へるなんテ』と、反省しながら、快活にならうとして、公爵夫人さへよければ喜んで行かうと云つた。

『えゝ〳〵阿母様は屹度お喜びになりますわ。あちらで煙草を召し上つていらつしやいまし、イワン・イワーノウイチさんもゐらつしやいますわ』

公爵夫人、ソフイヤ・ワシリエウナは全身不隨であつた。お客があつても、レースとリボンにくるまつて、應接することもう八年で、何時も天鵞絨や鍍金物や、象牙細工や青銅や蒔繪や花やに取り圍まれて、一歩も部室の外へは出なかつた。そして、かねて親密な人達と云つてもそれは、普通の平民共より遙かにかけ離れてゐると彼女に思はれる人達だけが此の部室には迎へられた。

ネフリユードフも、此夫人には悧巧だと思はれてゐたし、又彼の母が特に此の家族とは親密でもあつたし、倘ほ彼はミッシーの婿にまで望まれてゐたので、勿論この特別待遇を受ける一人であつた。

公爵夫人の部屋は、大小二間續きの客間を通り拔けて奥にあつた。ネフリユードフを案內して來たミッシーは、大きな客間に來ると突然思ひつめたやうに立ち止つて、小さな金塗りの女椅子の背を押へて、屹とネフリユードフの顏を見詰めた。

ミッシーは、結婚の事に非常に氣を揉んでゐたが、ネフリユードフは丁度自分には持つて來いの配合だし、又好いてもゐたので、何うでも彼を自分のものにしようと（自分を彼のものにするのでなく）思ひ込んでゐた。彼女は、はつきりと意識してゞはないが、心の弱い人にはよくあり勝ちな、ネチネチした曖昧な手管で、自分の目的を果たさうとしてゐたので、今度は愈々何う云ふ考へなのか男の心を聞かうとして

『何か起つたんぢやありませんか?』と、彼女は訊ねた。『有仰つて下さいましな、何麼事なんですの?』

ネフリユードフは、不圖裁判所であつたことを思ひ出して、顏を顰めて赧くなつた。

『え、或事件が起つたんです』と、彼は正直に答へた。『非常な珍事で、又眞面目な事件なんです』

『では、何ですの、私に御話し下さる譯には參りませんのですか』

『今はいけません。何うか何も訊ねないで置いて下さい。これはよく熟考した上でないと御話し出來ない事なんです』と云つて、彼は益々眞赧になつた。

『さう、では話して下さらないのですわね』と、云つて、彼女は顔の筋肉をぴく〳〵させて、押へてゐた椅子を後ろへ押しやつた。

『えゝ、出來ません』と、彼はきつぱり答へたが、この言葉は實際、彼に重大な何事かゞ起つた事を彼自分に思ひ知らせる返答であつた。

『ではよございますわ。さあ參りませう』と、彼女は何にもならない屈託を拂ひのけるかのやうに頭を打ち振つて、いつもより早足に彼の先きに立つて歩み出した。

ネフリユードフは、ミツシーが涙をのみ込むためにその口を無理にゆがめたやうに思つた。遂に彼は、女を苦めたのを恥ぢたが、然し、此の場合生中自分の氣が弱かつたら、慘めな破目になつて、彼女と一生涯結びつかねばならなくなると思つた。それが何よりも恐ろしいので、努めて何も云はぬやうにして彼女の後について公爵夫人の部屋に行つた。

二七

ミツシーの母、公爵夫人、ソフイヤ・ワシリエウナは、非常に贅澤な滋養に富んだ食事を丁度終へるばかりの所であつた。(夫人は、自分の殺風景な食ひ方を見られるのを嫌つて、何時もたゞ一人で食事をするのであつた)寢椅子の傍に小さなテーブルがあつて、それにはコーヒーが載つてゐた。夫人はパチトス(紙莨の一種)を喫つてゐた。黒い髪の毛と、長い黒い眼と、長い齒を持つたひよろ長い痩せた婦人で、尚ほ若がらうとしてゐた。

夫人は抱への醫者と特別な關係があるやうに噂されてゐた。ネフリユードフも何時かそれを聞いて知つてゐたが、今目のあたり、顎鬚を油でテカ〳〵光らしそれを眞中から分けてゐるその醫者が、夫人の寢椅子の傍に腰掛けてゐるのを見ると、ネフリユードフは、不圖その噂を思ひ出したばかりでなく、ひどく厭やな感じがした。夫人の次ぎにはコロソフが、低い柔かい安樂椅子に掛けてテーブルに向ひ、珈琲を攪き廻してゐた。テーブルの上には、リキユールのコップが載せてあつた。ミツシーは、ネフリユードフを連れて來たが、自分は其處に留まらなかつた。

『阿母樣が御疲れになつたら、私の部屋へいらつしやいまし』と、彼女は、コロソフとネフリユードフを顧み、何も變な事は起らなかつたやうな口振りで云つて、にこやかに微笑みながら、地厚な絨氈の上を音のしないやうに踏んで、出て行つた。

『御機嫌よう、さあ御掛けなすつて御話し下さい』と、公爵夫人ソフイヤ・ワシリエウナは、昔美しかつた時の容子を眞似るかのやうにして、少し氣取つた風ではあるが、然し、綺麗な長い齒を見せて、如何にも巧みな、少しも無理のない作笑ひをして云つた。『あなたは、裁判所から非常に鬱ぎ込んでいらつしやいましたさうですね。人情のある方には耐りませんわね』と、彼女は佛蘭西語で附け加へた。

『えゝ、さうです』と、ネフリユードフは云つた。『あゝ云ふ所へ行きますと、人は誰でも自分の不完全……人は人を裁く權利のないことを知ります。』

『全くねエ』と、夫人は、此の言葉にさも感じ入つたやうに云つた。誰と話をしてもうまく御世辭を云ふのが此の夫人の癖であつた。『ですが、あなた、畫の方は如何ですの?。わたし畫は大好きなんで

す、わたし早くから拜見に上らうと思つてますけど、こんな慘めな病氣だものですから――』と、夫人は云つた。

『畫はすつかり斷念しました』と、ネフリユードフは、卒氣なく答へた。夫人の空々しい御世辭が、今日は何うしたのか、彼女が何時も隱さう〳〵としてゐる年齡と同じやうに明瞭と見え透いたので、ネフリユードフは、何うしても、丁寧に上品に云ひ出す事が出來なかつた。

『まあ、惜しい事ね……』と云つて、今度は、コロソフの方を振り返り、『レーピンから聞きましたが、ネフリユードフさんは、本當にそれや畫才がおありなさるんださうですよ』と云つた。

『よくもまあそんな空々しい事を云つて恥かしくもないものだ』と、思つて、ネフリユードフは顏を顰めた。

ネフリユードフがひどく不機嫌で、どんなに調子よく手際よく話しかけても、迚もそれに誘ひ込むことは出來ないと知ると、公爵夫人はコロソフの方へ向いて、新しい芝居の意見を尋ねた。コロソフの意見次第で色々なすべての評判が定つて了ひ、その一言一句は永遠の價値あるものかのやうにして聞くので、コロソフは好い氣になつて、芝居と作者との缺點を上げたり、彼自身の藝術論を始めたりした。夫人は役者の辯護をしたが、同時に又、コロソフの議論に感動して、やがてはすつかりそれに降服したらしかつた。少くとも自分の意見を少しづつ改めてゐた。ネフリユードフは、自分の目前に進行しつゝあるこれ等の事を見聞きしながらも、然し實は何を話してゐるのか眼にも耳にも入らなかつた。

が突然氣が附いて、夫人の話とコロソフの話に不圖耳傾けると、二人とも、實は芝居の事なんか

何うでも好いので、たゞ食後の運動に喉と舌との筋肉を動かすだけで滿足してゐるやうに思はれた。それに、コロソフはウオーツカや葡萄酒やリキユールやを飮んだので少し醉つてゐた。尤も時偶飮む百姓のやうに醉拂つてゐるのではなく、始終飮みつけてゐる上戸のほろ醉ひ機嫌なのであつた。別段よろけたり管を捲いたりなどはしないけれども、普通のやうにきちんとしてはゐられず、昂奮して何がなし得意になつてゐた。ネフリユードフは又、公爵夫人が話をしながら、斜めに射し込む日光が、年寄つた自分の顏をます〳〵照らし出しはしないかと氣遣ふやうに、ちよい〳〵窓の方へ眼を配るのに氣がつくと、彼の目は次第にその夫人の方へ這ひ寄つて行くのだつた。

『全くねエ』と、夫人はコロソフの話に調子を合せて云つて、寢椅子の傍の電鈴の紐釦を押した。醫者は立ち上つて、丁度家族同樣の心易立てから、何の挨拶もしないで無言つて部屋を出て行つた。ソフイヤは、それをじつと見送りながら、尙ほ話を續けてゐた。

『フキリツプや、その帷帳を引いてお吳れ』電鈴に應じて美男の用人が來ると、夫人は窓の方を指しながら、恁う云つて命じた。

『いゝえ、あなたが何と有仰らうとも、あの作者のものには何處か神祕的な所があります、神祕的な所がなければ詩とは云へないでせう』と、夫人は、帷帳を引いてゐる用人の動作を、黑い一方の眼を光らして腹立たしさうに睥んで云つた。

『詩のない神祕は迷信で、神祕のこもらない詩は……散文ですわ』夫人は尙ほ、用人と帷帳とから眼を離さないで、寂しげな微笑を浮べて云つた。『フキリツプ、その帷帳ぢやないよ、こつちの大きな

窓の方のだよ』と、いら〳〵した調子で叫んだ。ソフィヤ夫人は、恁うした事を云はねばならぬ自分の身を哀れだと思つたが、又思ひ返して氣を紛らさうとして、寶石のぴか〳〵光る指で、香ひの好いパチトスを挾んで唇へ持つて行つた。

胸幅の廣い、筋骨の逞しい、美男のフヰリップは、詫びるやうに低く腰を屈めて、大きな强さうな足で輕く絨氈を踏んで從順しく默つて他の窓の方へ步いて行き、夫人の頭を振り返つて見、ちつとでもその顏に陽の射さぬやうにと氣を配りながら、注意深く帷帳を引き始めた。けれども、まだそれが思ふ通りにならないので、夫人はまたいら〳〵した調子で、飽まで自分を苦める氣のきかないフヰリップを叱り飛ばした。その刹那フヰリップの眼からは電氣がひらめいた。

『畜生！どうすれば可いんだ』とは、多分この時、フヰリップが腹の中で云つた文句であらうと、その有樣をすつかり見てゐたネフリユードフは思つた。けれども、頑强な美男のフヰリップは、堪忍袋の切れかゝつたのをじつと押へて、我が儘な病身な、死に損ひのソフヰヤ・ワシリエウナの言附け通りに、溫和しく御用を勤めた。

『勿論、ダーウヰンの說には十分な眞理があります』と、コロソフは、低い椅子にぐつたり倚りかゝつて搖すりながら、睡さうな眼で夫人を見て云つた。『だがネ、ダーウヰンは、論點外に踏み出して了ひましたよ。え、さうですとも』

『時に？あなたは、遺傳說を信じなさいますか』と、夫人は、ネフリユードフの默つてゐるのが氣にかゝつて、振り返りながら訊ねた。

『遺傳說？』と、ネフリユードフは問ひ返して『いえ信じません』と云つた。此の時、彼の全精神は不思議な工合に彼の想像に浮んで來た奇妙な幻象に囚はれてゐた。此の一瞬間、美術家のモデルのやうな、頑健な美男のフヰリップの傍に、甜瓜のやうな腹をした、禿頭の、杵のやうに肉のなくなつた腕を持つたコロソフの裸體が、あり〳〵と見えるのだつた。それと同じく、矢張り朦朧としてソフィヤ夫人の手足が、絹と天鵞絨とに包まれたまゝその中から透いて見え、まざ〳〵と彼の心に浮び上つて來たが、その幻象が餘りに恐しいので、彼はそれを拂ひ退けようとした。

ソフイヤ・ワシリエウナは、その容子をじつと見てゐたが、やがて

『所で、ミッシーがあなたを待つてゐますよ』と云つた。『行つておやりなさいまし、グリーグの新曲をあなたに聞かせたがつてゐました。隨分面白いものですよ』

『あの女が何を彈きたいものか、何とか彼とか虛言ばかり吐く女だ』と、思ひながら、ネフリユードフは立ち上つて、透きとほつた骨ばかりの、指環をはめた夫人の手を握つた。

客間まで來ると、カテリナ・アレキセエウナが待ち受けてゐて、例の通り直ぐ佛蘭西語で話しかけた。

『陪審員の御役で隨分當てられてゐらしやいますのね』

『さうです、失禮ですが、今日は少し氣分が勝れませんので、御對手をしても却つて御困らせしては濟みませんから――』とネフリユードフは云つた。

『何うして御氣分が惡くゐらつしやいますの？』

『何うかもう訊ねないで置いて下さい』と、彼は、帽子を探しながら云つた。

『だつていつかあなたは、何でも隱しだてするものではないと有仰つたではありませんか。そして隨分ひどいことまで、よく御話しになつた癖に、今日に限つて何故何も有仰いませんの?』其時丁度ミッシーが這入つて來たので、すぐその方へ向きかへり、『ねエ、ミッシーさんも御存じでせう』と、云つた。

『あの時は、何か勝負事をしてゐる時でした』と、ネフリユードフは嚴肅らしく云つた。『――勝負事なんかしてる時は、人は何でも話されます。けれど、實際氣分の惡い時は――私は何うも、今日は氣分が惡いんです、何だか口を利くのが厭やなんです』

『おや、お云ひ譯なんかおよし遊ばせ。何故御氣分が惡いのか有仰いましよ』と、カテリナ・アレキセエーウナは、ネフリユードフのしかつめらしい樣子には少しも氣をとめないやうにして、ふざけたやうに云つた。

『氣分が惡いなんて、自分で有仰るものぢやありませんわ』と、ミッシーは云つた。『私などはそんなことは致しません、ですから何時もこんなに元氣ですわ。まあ、いらつしやいましな、あなたのふさぎ虫を追つ拂つてあげますから』

ネフリユードフは、丁度馬が可愛がられながら、口に轡をはめられ、馬具を背負はされようとしてゐる時のやうな感じがしたが、今日は斷じて、その甘言には乘らないと思つた。何うしても歸らねばならぬと云つて、歸りかけた。ミッシーは何時もよりも長い間彼の手を握つてゐた。

『あなたに取つて大事なことなら、私達にも大事なんですから、何うぞそれを御忘れないように――明日入來つして下さる?』と、ミッシーが訊ねた。

『さア上れないかも知れません』と、ネフリユードフは答へた。そして、ミッシーに對してか、自分に對してか、どちらとも判らなかつたけれども、何だか耻しくなつて、顏を眞赧にして出て行つた。

『何うしたのでせう、おかしいのね』と、カテリナ・アレキセエーウナは云つた。『乾度探し出して見せます、ひよつとしたら何か艶事かもしれませんよ、あの方は物に動かされ易いのですからねエ、ミッシーさん』

『汚ない艶事なのよ』と、ミッシーは云はうとしたが、不圖口を噤んだ。そして前の晴々しさはすつかりなくなつて、ネフリユードフを見てゐた時とはまるで變つた顏をして下を向いた。彼女は、カテリナ・アレキセエーウナに對してもまさかこんな下品な言葉は云へないので、たゞさりげない體で

『誰にでも機嫌の良い時と惡い時があつてよ』と、云つたきりであつた。

『矢張り欺したのかしら?』と、ミッシーは考へた。『いろんな事をして置きながら、もしかさうだつたら、隨分あの方も性が惡いわ』。

『いろんな事をしておきながら』とは何の意味かと尋ねられたら、恐らく彼女もきつぱりした返事は出來まいが、然しネフリユードフが彼女の心を動かしたばかりでなく、殆ど約束をしないばかりの事をしたのを、彼女はよく知つてゐた。明瞭と言葉で約束したのではなく、たゞ眼や微笑や思はせぶりだけなのではあるが、それでも彼女は、ネフリユードフをもう自分のものだと思ひ込んでゐたので、今更ら手を切るのは甚だ辛い事だつた。

二八

『實に恥かしい愚劣なことだ。實に恐ろしい恥づべきことだ。』と、ネフリユードフは、歩き慣れた町を通つて我が家へ歸る途すがら、倦う一人で云ひ續けてゐた。ミツシーと話してゐた間の一種壓へ付けられるやうな厭やな感じが容易に離れなかつた。表面の事實だけで見れば、彼には何等不正なことはなく、ミツシーと一緒にならうなどゝは決して云ひ出した覺えもなく、又公然の申込みは勿論してゐなかつた。けれども、實際心の中では、彼女と一緒にならうと思ひ、暗に心を許してもゐたのであつた。所が、今日ではもう、何うあつても彼女と結婚することは絶對に出來ないのだと思つた。

『實に恥づべき恐ろしいことだ。實に恐る可き恥かしいことだ。』と、彼は、幾度も一人で繰り返した。これはたゞミツシーとの關係ばかりでなく、自分の今迄の行狀一切が皆さう思はせるのだつた。『總てが恐ろしい恥づべきことばかりだ。』と、彼は我が家の玄關先きへ來た時態う呟いた。茶と晩飯の仕度が出來てゐる食堂へ這入りながら、後から蹤いて來た給仕人のコルネイへ『晩飯は食べないよ』と云つた。『もう彼方へ行つて可い』

『はい』と云つたが、コルネイはすぐは出て行かないで、食卓の上の晩飯を片付けてゐた。

ネフリユードフは忌々しげにコルネイを見てゐた。少しも早く一人ぼつちになりたがつてゐたので、彼は何だか他の者がすべて、何か恨む所があつて自分を邪魔してゐるやうに思ふのだつた。やがてコルネイが晩飯をすつかり片附けて運んで行つて了ふと、ネフリユードフはサモワルの傍へ行き、一人で

茶をいれようとしたが、その時又、今度はアグラフエーナ・ペトローヴナの跫音が聞えて來たので、彼は彼女と顔を合せるのを嫌つて、急いで客室へ駈け込みさまパタリと戸を閉めて了つた。此處は三ケ月以前、母が死んだ所であつた。部屋の入口には反射鏡の附いたランプが二個點つてゐた。一つは父の肖像を照し、もう一つのは母の肖像を照してゐた。すると彼は、不圖母の臨終の際に於ける自分のことを思ひ出した。

それは實に不正な厭やな思ひ出であつた。恥づ可き恐ろしいことだつたのであつた。母が迚も助からない最後の病氣にかゝつた時、彼は早く母が死んで呉れゝば好いと只管願つたことを記憶してゐた。尤もそれは、母のために願つたので、母も亦苦みから早く遁れたがつてゐたのだと、自分に辯解するのであつたが、然し事實彼は、母の苦みを見まいとする彼自身のためにそれを願つたのであつた。

母の懷しい憶ひ出を呼び起すために、五千ループリ出して有名な畫家に描かした母の肖像畫に近寄つてそれを見上げた。母は、襟開きの黑天鵞絨の衣服を着てゐた。畫家は、云ふまでもなく、その胸の輪廓や中間の部分や、艶やかな肩と首などに殊に念を入れて畫いてゐた。これは全く恥づ可き恐ろしいことであつた。半裸體の美人としての母の肖像畫には、何か非常に忌はしい、みだらなものがあつた。更に厭やな事は、三年前、此の部屋で、その同じ母が、木伊乃のやうに痩せ細つて、この部屋ばかりではなく、家一杯に、何を以てしても消すことの出來ない、實に耐へられない一種厭やな臭ひを漲らしたことであつた。ネフリユードフは、今も尙ほその臭ひがするやうに思つた。そして彼はまた母が死ぬ二三日前に、その骨ばつた色の褪せた指で、彼の手を取り、眼をじつと見詰めて、『ミーチヤ、私

がせねばならぬことをしなかつたと云つて、それを咎めてお呉れでないよ』と云つて、病苦に艶のなくなつた眼から、涙を流したことを思ひ出した。

『あゝ、實に恐ろしい。』と、彼は、美しい大理石のやうな肩と腕とを露はし、唇に誇りがな微笑を浮べた半裸體の婦人を、もう一度見上げて云つた。この肖像畫の半分露はな胸が、二三日前、これと同じやうな容子をしてゐたもう一人の別な若い婦人をネフリユードフに思ひ出させた。それはミッシーで、丁度舞踏會へ出掛けようとした時、その舞踏服をネフリユードフに見せようとして、態々自分の部屋に彼を呼び入れたのであつた。その時のあでやかな肩や腕を思ひ出すと、ネフリユードフはたまらなく厭やな氣持になつた。『あの野郞な、何を爲て來たか判らない、殘忍酷薄な動物的な彼女の親爺と、それからおかしな噂のある、結構な魂を持つて御座るあの母親』かう思つて來ると、また厭やな氣持がして來て、自分自身でも耻かしくなり、『實に耻かしい恐るべきことだ。實に恐るべき耻かしいことだ』

『いや〳〵。』と、彼は思つた。『俺は自由にならねばならぬ。コルチヤーギナ家とも、マリヤ・ワシリエウナとも、相續の一件とも、その外總ての莫迦げた關係から自由にならねばならぬ。さうだ、自由に生きるために外國へ行くのだ。羅馬へ、そして畫を描くのだ。』然し彼は不圖自分の畫才の怪しいことを思ひ出した。『何、介意ふことはない。たゞ自由に生きさへすれば可いのだ。最初はコンスタンチノープルへ、それから羅馬へ。だが、兎に角裁判一件を片附けて了つてからだ。それには先づ辯護士と相談しなくてはならぬ。』

すると突然、あの黑い少し斜視な眼をした被告の姿がまざ〳〵と現れ、そして最後の徒刑の云ひ渡しを受けた時の、あの叫び出した光景が思ひ出された。ネフリユードフは、あはてたやうに紙莨の燃半(えさし)を灰皿に投げ捨て、更にもう一本新らしく吸ひ付けて、部屋の中をあちこちと歩き出した。あの田舍の伯母の家で、彼女と一緒にゐた時の色々なことが順々に思ひ出されて來た。最後の出會ひの時の燃えるやうな獸慾、それを滿足させた後の慚愧、明け方のお祭り、青い帶付の白い衣服などが浮んで來た。『さうだ、あの晩は俺はあの女を戀してゐたのだ。本當に淸淨潔白な戀をしてゐたのだつた。イヤ、あれよりもつと以前から戀してゐたのだ。論文書きに始めて伯母の家に行つた時から戀してゐたのだ。』すると、その頃の自分自身のことがまた色々と思ひ出された。あの時の元氣な呼吸、若々しい、活き〳〵した生活が、目の前にちらつくやうに思はれたが、それは總て、次第に遣瀨ない悲哀に陷つて行つた。

あの頃の彼と今の彼との間には大變な相違があつた。それはあの晩の教會でのカチユーシヤと、商人の敵娼(あひかた)に出て、今朝裁判を受けた賣女との差以上ではなかつたにしても、略それに似たやうなものだつた。あの頃は自由で、何等恐るゝところもなく、何でも出來ないことはないと云ふ希望が洋々として彼の前途に見えてゐた。然るに今は、たはけた、空虛な、安價なくだらない浮世の網に縛(つな)まつて了つたので、よし逃げようと思つたところで、もう何うして可いかも解らず、それに又逃げようとも思はなければ、實際逃げる力もないやうに思はれるのだつた。昔は生一本な直情徑行を誇り、常に眞理を語るのを掟とし、實際又眞實に行つたものであつたが、今は深く虛僞に——周圍の人達からは却

つて眞理であるかの如く認められてゐる最も恐るべき虚僞に陷つてゐるのであつた。そして、幾ら探しても、その虚僞から逃れる道は見附からなかつた。彼は泥溝にはまり、それに馴れ、それに溺れてゐるのであつた。

マリヤ・ワシリエウナと手を切り、又その良人や子供達と憚りなく顏を合せられるやうにするには何うすれば可いか。ミッシーから自分を引き離すには何うすれば可いか。土地私有を不正とする自分の確信と、母から讓り受けた土地を所有してゐることとの矛盾を何うすれば可いか。カチユーシャに對して犯した自分の罪を何う償へば可いか。何はともあれ、この最後の事だけは、このまゝ捨てゝ置く譯には行かなかつた。自分の戀したことのある女が、西伯利亞に苦役にやられると云ふのを放擲して置く譯には行かないので、それから救ひ出すために、金を積んで辯護士に賴み込んだのだつた。彼女は決してそんなひどい刑を受けるやうな惡い事はしてゐなかつた。金で罪が償はれるであらうか。然し彼は、あの金を彼女につかませたので、自分の罪はもう償はれたと考へはしなかつたか?。

すると、廊下でカチユーシャを呼び止めて、そのエプロンの衣兜に金を捩ぢ込んで駛け出した時の事があり〳〵と憶ひ出された。

『おゝ、その金。』と、その當時と同じ不快と恐ろしさとを感じて。『あゝ、あゝ、何と云ふ厭やなことだ。』と、その當時したと同じやうに聲高く叫んだ。『こんなことは、破廉恥漢や卑怯者に限つてするのだ。そして自分――自分も矢張り破廉恥漢で卑怯者だ。』と、更に聲を張り上げて叫び續けた。『しかしそんなことがあり得やうか?。』――彼は口を噤んで尙ほ立ち止つてゐた。『俺は本當にそんな破廉恥

漢なのか?いや、俺のやうな破廉恥漢が他にゐるものか。』と、自問自答した。

『それから、まだこればかりではないんだ。』と、更に自分を責め續けた。『マリヤ・ワシリエウナとその良人とに對する俺の行爲は卑しく穢らはしくはなかつたか?。金錢に對する俺の態度は?。母から讓り受けたと云ふのを口實に、心には不正だと思ひながら、多くの富を吾が物にして貪つてゐるのは何うした事か?。それから、毎日〳〵の俺の怠慢な唾棄すべき生活は何うしたのだ。それから又、何よりもカチユーシャに對した俺の行爲は何うだ。全く放蕩無賴漢のする事だ。世間の者は何と云はうと介意はぬ。世間を欺くことは出來るが、自分を欺くことは出來ない。』

すると、突然、彼は近頃、殊に今日、――公爵や、ソフイヤ夫人や、コルネイやミッシーなど、總ての人に對して感じた一種の憎惡の念は、實は自分自身に對する憎惡の念であつたことが解つた。不思議なことには、自分のさもしい下品なことに氣附くと、何となく苦痛ではあつたが、又一種喜ばしい落着いた感じが湧き起るのでもあつた。

ネフリユードフの生活には、これまでも屢々、彼の所謂『靈魂の淨め』――と稱する事があつた。『靈魂の淨め』と云ふのは、內生活が長い間の眠りから覺めて全然停止してゐたその活動を新に始め、これまで靈魂の中に堆高く積もつて、眞の生活を妨げてゐた汚穢を一掃し始めた心の狀態を意味するのであつた。かうした覺醒の後には、ネフリユードフは何時も、何かしら規箴を作り、永遠にそれに從はねばならぬと覺悟をし、決して二度と變つてはならぬと誓つて、それを日記に書き付けるのであつた。然し又、何時しか世の中の誘惑に陷り、そんな

事は忘れて了ひ、前よりも一層深く墮落して行くのだつた。

けれども兎に角、ネフリユードフの生活には、屡々恁うした覺醒が起り、自己淨化をするのであつた。一番最初に起つた覺醒は、夏、伯母の家に逗留してゐた時で、その時の覺醒が、最も感動した有頂天なもので、その效果も可なり永い間續いた。もう一度は、戰爭に召集せられ、文筆を擲つて、軍隊に入り、生命を犧牲にしようと思つた時であつた。然しこの健氣な決心は永くは續かなかつた。それから第三の覺醒は、軍隊を去つて、外國へ行き、藝術に身を委ねようとした時であつた。

その時から今日までの長い間は、何等の淨化なしに過して來たので、良心の要求と、實際生活との間の隔りが、前よりも一層甚しくなつてゐた。その距離の餘りひどいのに氣附いて、彼は思はずぞつとした位であつた。殆ど淨化が出來ない程その距離は大きくなり、すつかり腐敗し切つてゐた。

『お前はこれまでも、幾分か眞人間にならう〳〵として來たのだが、矢張り元のまゝぢやないか?。』と心の中で惡魔の聲が囁いた。

『更にまた同じことを繰り返す必要があるのか。お前一人だけではないぢやないか。皆同じだ。それが人生だ。』と、その聲がまた囁いた。けれども、この時は旣に、比類なく眞實な、比類なく力强い永劫不變の自由精神が、ネフリユードフの心の中には眼醒めてゐて、何うしてもそれを信ぜずにはゐられなかつた。自分の希望と自分の現在の狀態との間が如何に隔つてゐようとも、この新しく眼醒めた精神の前には、何事も成し遂げられないものはないやうに思はれた。

『如何なる代價を拂つても、自分を束縛してゐた此等の虛僞を打ち破つて了はう。誰にも眞實を語り、眞實な行ひをしよう。』と、彼は決然として叫んだ。『俺はミツシーにも眞實な事を打ち明けねばならぬ。放埒で結婚する資格のないこと、そして、今迄たゞ無益にあの女を飜弄してゐたことも告白せねばならぬ。マリヤ・ワシリエウナにも打ち明けねばならぬ——いや、あの女には何も云ふことはない。あの女の良人に。破廉耻な自分が今迄彼の眼を盜んでゐたことを白狀して了はう。眞實を認めようとすると同じ仕方で遺產問題も處理して了はう。カチユーシヤにも、自分が破廉耻なばかりに、彼女を罪惡の淵に陷れたことを謝り、力の及ぶ限り彼女の運命を輕くするやうに努力すると云つてやらねばならぬ。さうだ、カチユーシヤに會はう。そして、俺の罪を宥して呉れと賴まう。』

『さうだ、子供がするやうに、カチユーシヤに謝罪らう……。』と言葉を途切らし『……もし何なら結婚しても可い。』と、又言葉を切つて、子供の時からし馴れてゐるやうに胸に手を合せ眼を上げて、誰かに呼びかけるやうに、『神樣!何うぞ私を助けて下さい、敎へて下さい。私の心の中へ入つて來て、穢れ果てゝゐるこの私を淨めて下さい。』

彼は、神が自分の心の中に這入つて來て、自分を淨めて助けて呉れるやうにと、祈つた。そして尙ほ今迄旣にして了つたことを懺悔して祈りを續けたが、此の時は旣に神は彼の心の中に這入つて彼の良心の眠りを覺してゐたのであつた。神と共にある心持がし、それに依つて自由、及び人生の充實と歡喜とを感ずるばかりでなく、あらゆる正義の力を感得した。凡て、人間に出來る善事は皆、自分にも成し遂げ得られるやうに思はれた。彼の眼は、此の自問自答の間に、淚で一杯に充たされた。が、それは善と惡との二樣の淚であつた。即ちこの數年間ずつと眠つてゐた精神の覺醒を喜ぶ善の淚と、これ

も皆自分の天性の善なるに由ると云ふ自分に阿る惡の涙とである。暑苦しく感じられたので、彼は窓の傍へ行つて、窓を開けた。窓からは庭が見渡された。物靜かな淸らかな月夜で、何か車の音が轣りすぎると、後はしんと靜まり返つて了つた。窓の丁度向ふに、靑いポプラの樹が、地に影を落して、葉の落ち盡したその枝々の相交錯した網の目が、綺麗に敷きつめた砂利の上に、くつきりとあざやかに映つてゐた。左の方には、馬車小屋の屋根が月に照らされて白く光り、正面には、庭を圍んだ土塀の眞黑い影が、植込みの綻れ合つた技越しに見えた。

ネフリユードフは、屋根や、月に照し出された庭や、ポプラの影などを眺めながら、爽かな、新鮮な空氣を吸ひ込んだ。

『好い氣持だ、本當に好い氣持だ、おゝ神樣!。本當に好い氣持だ。』と、彼は次第に靈魂に近づいて行くやうな心持がして云つた。

二九

マースロワは、夕方の六時に辛つと監房へ歸りついたが、平常步き馴れてゐないのに、その日は往復十哩も石ころ道を步いたので、すつかり疲れ切つて了ひ、底肉刺さへ出來た。思ひがけない重い刑を宣告されて、がつかりして、その上たまらなく腹が空いて來た。審問の最初の休憩時間に、護衞の兵士がすぐ傍で麵麭と茹で卵とを食ひ初めたのを見ると、唾が催して來てひどく空腹を感じたが、それ

でも彼等に物を請求るのは、自分の見識を下げると思つた。それから三時間と云ふものは、空腹も忘れて、たゞ疲れを覺えるだけであつた。そこへ思ひがけない重刑の宣告を受けたのだつた。最初彼女は聞き違ひだと思つた。西伯利亞にやられるなどゝは夢にも思はなかつたことなので、自分の耳を信ずることが出來なかつた。

けれども、裁判官や陪審員などが、その宣告文の朗讀を聞いても、さも當然な知れ切つた事のやうに平氣な事務的な顏をしてゐるのを見ると、彼女は赫となつて聲を張り上げ、その寃罪を法廷に訴へたのであつた。するとその叫び聲まで、當然さうある可きだと云つたやうな皆の樣子なので、もう何うすることも出來ないことが判り、何うでもその殘酷な不當な宣告に從はねばならぬかと思ふと、絕望のあまりわつと泣き出したのだつた。

殊に驚いたのは、若い人達——兎に角老人達ではなかつた——その人達は、始終自分に見惚れてゐた癖に(その中の一人の副檢事は全く變人だと彼女は思つた)到頭自分を罪人にして了つた。開廷前や數度の休憩時間中、被告人控室に腰かけてゐると、それ等の若い男達は、何か用事があつて通りかゝつた者のやうに見せかけて、開け放しの戶口を覗いたり、中には、部屋へ這入つて來て、じつと顏を見詰めたりする者もあつた。然るにあとでは、實際罪のないことも知つて居りながら、譯の判らない理由の下に、ひどい苦役の罪を到頭自分に課して了つた。初めは泣いたが、軈て氣が落ち着いて來ると、全るで氣脫けがしたやうにぼんやりとなつて、被告人控室に腰掛けたまゝ、連れ歸られるのを待つてゐた。そしてたゞもう煙草が喫みたいだけであつた。所へ、ボーチコワとカルチンキンとが、宣告を申

し渡されて其の室へ這入つて來た。ボーチコワはいきなりマースロワを『罪人』と呼んで罵り出した。

『おい、ざま見やがれ、云ひ譯なんかしたつて通るかい。このすべた女が。自業自得だよ。西伯利亞へ行つたら、もうベタ〳〵おしやれしようつたつて出來ないぜ』

マースロワは、袖口の手を引き込め、首を垂れて、自分の前の汚い板の間を見詰めながら、身動きもしないでじつと腰掛けてゐたが、『わたしは、お前さんに何もがまひなんかしないよ、だからお前さんもわたしには默つてゐておくれ……わたしは何もまかつてゐないのに、何かかまつてるとでも思つてるのかね』と、二三度繰り返したゞけで、再び默つて了つた。すると間もなくボーチコワとカルチンキンとが連れ出されて行つた後へ、廷丁がやつて來て、

『お前がマースロワかい？』と尋ねて、

『さうか、ぢやこれを何處かの奥さんがお前へ與つて呉れつてだつたよ』と云つて、三ルーブリの金を渡したので、マースロワは心が幾らか晴れて來た。

『奥さんて、何麽方？』

『まア受取れば可いんだよ、そんな話をしに來たんぢやない』

此の金は妓樓の女將キターエワがやつたのであつた。女將は法廷を去る時、廷吏を振り返つて少しばかりマースロワに金をやつて可いかと尋ねた。廷吏は可いと云つた。それで女將は三つ紐釦の小羊革の手袋を脫つて、肥つた白い手で、絹の裾裏の衣兜から、しやれた紙入れを取り出し、その中から妓樓で儲けた債券の利券の束を出し、二ルーブリ半に當る一片を切り取り、（露西亞の債券の利券は紙幣と同じく通用する）それに二十カペイカ錢二枚と、十カペイカ錢一枚を附けて廷吏に賴んだ。廷吏は廷丁を呼んでキターエワの前でその金を手渡した。

『間違ひなく渡して下さい』と、カロリーナ・キターエワは云つた。廷丁は何だか疑ぐられたやうなその云ひ振りが癪にさはつて、その餘憤をマースロワへ持つて來て突慳貪に當つたのである。

マースロワは、丁度今欲しいと思つてゐるものがそれで買はれるのだと思ふと、金を貰つたことを非常に喜んだ。『紙莨が買へて、一服喫へたらな？』と、心の中で思つた。そして總ての考へは煙草を喫みたいと云ふ方へ向いて行つて了つた。廊下へ開いた他の部屋の戶口から煙草の匂ひがして來ると、彼女はその空氣を貪り喫つた程、ひどく煙草を欲しがつてゐた。けれども、退出命令を傳へる役の書記が、檢閲官に禁止された新聞の社說に就いて、一人の辯護士と話し合ひ、尚ほそれに就いて議論さへしたりして、罪人のことなんかすつかり忘れてゐたので、長い間待たせられた。

漸く五時頃になつて退出を許され、ニージユニイ人とチユワーシ人の二人の護送兵に護送されて、後ろの戶口から連れ出された。それからまだ裁判所の入口を出て了はないうちに、マースロワは、二十カペイカ錢を一つ護送兵に與つて、卷麵麭を二つと紙莨とを買つて呉れと賴んだ。チユワーシ人は、その金を受け取つて笑ひながら云つた。『よし、俺が買つてやらう』そして、本當に卷麵麭と紙莨とを買つて來て與つて、正直に釣り錢を返した。四人は途中で喫煙するのを禁じられてゐたので、監獄へ着くのが待ち遠しくて、途々焦り〳〵しながら歩んだ。監獄の門まで連れられて來ると、汽車で送られて來た百人ばかりの囚徒が、ぞろ〳〵と連れ込まれてゐるところであつた。鬚を生やしたのや、剃

つたのや、年を老つたのや、若いのや、露西亞人や外國人や、中には、頭を剃り丸めたのなどが、何れも足には鎖をぢやら〳〵云はせてゐたが、監獄の控室はそれ等の囚人の叫び立てる聲と、埃(ほこり)と、酸つぱい汗の匂ひとで一杯になつてゐた。マースロワの傍を通る時、囚人等は皆顏を差し覗いてゐたが、中には、近寄つて來て、車體を擦つて行く者もあつた。

『やあ、別嬪が居らア――綺麗なのが』と、一人が云つた。

『今日(こんち)は――姐さん』と、もう一人が眼をぱちくりさせながら云つた。

頸(えり)から顎まで綺麗に剃つて、口鬚だけ殘してゐる色の黑い男が、鎖を足にからませて、がちや〳〵云はせながら、後ろからマースロワに抱き付いた。マースロワは喫驚して振り離すと、その男は齒を現して眼を光らせ、

『おい、昔の情夫(いろ)を忘れたのか？　さあ顏を見せて吳れよ』と叫び立てた。

『何をするんだ、この奴郎は』と、副典獄が後から飛んで來て怒鳴りつけたので、その男は縮み上つて飛び去つた。副典獄はマースロワへ向つて、

『お前は何で此處にゐるのだ』

マースロワは、今裁判所から連れられて來た所だと云はうとしたが、疲れ切つて口を利く氣力さへなくなつてゐた。

『この女は、今裁判所から戾つて來たところです』と、護送兵の一人が、帽子へ手を擧げて云つた。

『それぢや看守長に渡して了へ、わしは、そんなことしてゐられない』

『はア』

『ソコロトフ、此の女を連れて行け』と、副典獄は叫んだ。

看守長がやつて來て、ぷり〳〵憤りながら、マースロワの肩を小突き、後から隨いて來いと、顋で指圖して、女囚檻の廊下へ連れて行つた。そこで身體を檢査され、禁制品を持つてゐない事が解ると(マースロワは紙莨の箱を卷麵麭の中へ祕してゐたので)今朝出て行つた同じ檻房へ連れ込まれた。

三〇

マースロワの容れられてゐる檻房は、間口十六呎、奧行二十一呎の細長い室で、二つの窓と、破れかゝつた一つの大きなストーブがあつた。部屋の三分の二は板張りの寢臺で占められてゐた。その寢臺の板は、乾き切つて反(そ)り返つてゐた。戶口の正面の壁には、黑く燻(くす)ぶつた蠟燭附きの聖像がかゝつて、時代も判らぬやうに古び果てた房がそれに垂れてゐた。左手の戶の陰の薄黑い床の上には、臭い桶が置いてあつた。檢閱が濟むと、女囚達は皆一室に閉め切りにされて了ふのだつた。

此の部屋に收容されてゐるのは、十五人で、その內の三人は子供である。マースロワが歸つて來た時はまだ明るかつた。臥てゐるのはたゞ二人だけだつたが、その一人は竊盜犯の肺病患者で、も一人のは、旅行劵が無くて拘留された白痴で、大抵眠つてばかりゐた。肺病患者の女は、疊んだ上衣を枕にして橫になつてゐたが、ぱつちり眼を開けて、痰を制へようとして咽喉をごろ〳〵云はせながらまだ睡付き得ないでゐた。

て來る囚人を眺めてゐた。坐つて裁縫をしてゐるのは三人だけだつたが、その中には、今朝マースロワが出がけに會つた婆さんもゐた。コラブリョーワと云つて、背の高い、力の強さうな、氣難しさうな顔の女で、額には皺が寄り、だぶ／＼肥つた二重顋で、短く編んだ綺麗な髪が顳顬のあたりで白くなつて、後毛が頬に亂れかゝつてゐた。此の女は、亭主が自分の連れ子に手を出したのを怒つて、斧で殺した罪で西伯利亞行きの重刑を宣告されてゐた。此の檻房の牢頭で、內祕で女囚達に酒を賣つてゐた。その傍には別の女が、これも坐りながら、ほそ／＼したズックの袋を縫つてゐた。此の女は線路番の娘で、汽車の通る時に役目の旗を振るのを怠つたために、不慮の災難を出來した罪で、三ケ月の禁錮に處せられたのであつた。黑い小さな眼の、背の低い、獅子ッ鼻の女で、世話燒きでおしやべりであつた。色白のほんのりとした大變可愛らしい、まだほんの娘ッ子で、くり／＼した子供のやうな眼をして、長く編んだ綺麗な髪を、頭に圓く束ねてゐる一人の裁縫をしてゐる女は、フィョードシヤと云つた。此の女は、亭主を毒殺しようとして入獄させられてゐるのだつた。結婚すると直ぐ（十六の時、自分に相談もなしに結婚させられたので）この事件を爲出來したのである。けれども、八ケ月間保釋されてゐる中に、亭主を再び殺さうなぞとはしないのみか、段々仲がよくなつて、愈々裁判となつた時には、もう互に切つても切れぬ深い間柄になつてゐた。亭主も舅も、別して姑は、ひどくフィョードシヤが好きになつてゐたので、どうかして免訴にしたいと、皆して手を盡したが、到頭そのかひなく矢張り西伯利亞へ徒刑に宣告されて了つた。

柔しくて、愛嬌があつて、いつもにこ／＼してゐる此フィョードシヤは、マースロワと隣り合ひに寢臺があつたので、特別に仲がよくなり、自分でマースロワの世話をしたり用をしたりするのを役目のやうにしてゐた。その他に尙ほ二人の女が、何の仕事もせずに寢臺の上に坐つてゐた。一人は四十歳位の蒼白い瘦せた顏で、恐らく若い時には、さぞ美しかつたらうと思はれるやうな女であつた。瘦せた眞白な胸に赤兒を懷いて坐つてゐた。その甥が徵兵に取られた時、村の百姓達はそれを不法な召集だと考へ、巡査を呼び止めて免除を願つたが、この女は、殊にそれが自分の甥なので、猶更先へ立つて、甥を乘せて連れて行かうとする馬の口を取つて動かなかつたところから、禁錮されたのだつた。何もせずに坐つてゐるも一人の女は、人の好さゝうな、もう腰の屈つた、灰色の頭のお婆さんだつた。ストーブの後ろの寢床に腰かけて、肥つた四つ位の男の兒が面白さうに笑ひながら、その前を往つたり來たりするのを捕へるふりをしてゐた。この男の兒は、たゞ小さなシャツを一枚着てゐるだけで、髮の毛は短く刈り込んでゐた。婆さんの前を通り拔ける每に、『ほうら、捕まらなかつた。』と、幾度も繰り返してゐた。

この婆さんは自分の息子と一緒に放火罪であつた。入獄したのを却つて大變喜んでゐたが、然し一緒に這入つた息子のことや、それよりも尙ほ「老夫」が誰も洗濯して吳れる者もなくてさぞ困つてゐるだらうなどゝ心配するのだつた。

此の七人の外に、尙ほ四人の女が、開かれた窓の所に、何れも鐵格子に摑まつて立つてゐた。彼等は、マースロワが歸つて來る時會つた男の囚人等が、今丁度中庭を通つてゐるので、それに向つて呼び

かけたり、相圖をしたりしてゐるのであつた。その中の一人は、でぶ〳〵肥つて、髪の毛は赤く、青く黄ばんだ顔や手や、それから紐釦のはづれた襟から喰み出してゐる太い頸などは斑點だらけであつた。大きな皺枯れ聲で、何か淫らな事を喚き立てゝけら〳〵笑つてゐたが、この女は窃盜犯で服役してゐるのであつた。その傍に十歳の子供位しか背のない、不樣な格好の、色の黒い小さな女がゐた。胴が長く、足が馬鹿に短く、腫物の痕だらけな赤ら顔で、眼の間が遠く離れ、出齒で脣が厚かつた。中庭で何か起つたと見えて、キーキー聲上げて笑ひこけてゐたが、この女は、放火窃盜犯に問はれてゐた。お洒落が好きなので、ホロシヤーフカ（おしやれの意）と云ふ綽名が付いてゐた。その又後ろには、瘠せて、手頼りなさゝうな顔をした姙み女が甚く汚れた灰色の下襦袢を一枚着て立つてゐたが、この女は贓品隱匿罪で捕まつたのであつた。默つたまゝ、窓の下で何か騷いでゐるのを見て面白さうに笑つてゐた。

それと又一緒に立つてゐる、出目で氣樂さうな顔の、背の低い、ずんぐりした田舍女は、お婆さんと遊んでゐる男の兒と、七歳になる女の兒との母親であるが、この子供達を誰も引き取り手がなかつたので一緒に監獄へ伴れて來たのであつた。酒の密賣をして入獄したのである。窓から少し離れて立ち、靴下を編みながら、他の女囚達の言葉を聞いてゐたが、不快で堪らないやうに首を振り、顔を顰め、眼を塞いでゐた。けれども、小さな下襦袢を着て、亞麻色の髪の色をばら〳〵にしてゐる七歳になるその娘は、青い眼を据ゑ、赤毛の女の裾に攫まつて、女囚達と男囚達とが互に罵り合つてゐる淫らな言葉を熱心に聞きながら、それを覺え込まうとでもするやうに、口の中で靜かに繰り返してゐた。こんな騷ぎには少しも眼も呉れないでゐる十二番目の女は、教會の執事の娘で、背が高く、キチンと

した女であるが、自分の赤ん坊を井戸へ投げ込んだので捕まつたのである。たゞ一枚、汚れた下襦袢を着て、素足で歩き廻つてゐた。房々した綺麗な髪を短く編んでゐたのが解けて、亂れて垂れ下つてゐた。他の者には側目も觸れず、監房内を往つたり來たりして、壁に突き當る度に急に又引き返してゐた。

三一

ガチヤ〳〵と海老錠の鳴る音がして、戸が開いて、マースロワが中へ入つて來ると、一同は皆そちらへ振り向いた。教會の執事の娘もちよいと立ち止つて、眉を上げてマースロワを見てゐたが、然し一言も云はないで、再び大股に力を入れて歩き出した。

褐色のズックに針を刺して、コラブリヨーワ婆さんは、樣子を聞きたげに眼鏡越しにマースロワを見た。

「オヤまあ、歸つて來たのかい、屹度お前さんは放免になるんだと思つてたんだよ。うまく行つたかい？』と、婆さんはまるで男のやうな、皺枯れた、低音で云つて、眼鏡をはづし、縫物を止めて、病床の上へ押しやつた。

『今もお婆さんと噂してたんだよ、「お前さんはすぐ放免になるに違ひない」つて。』お役人もさう云つてたんだからね。皆な氣の毒がつてたから、ひよいとしたら誰かお金を呉れる人があるかも知れないなんて』と、線路番の婦は、キン〳〵した聲を出して云つた。『だけども、又恁うして歸つて來たと

ころを見ると、うまく行かなかつたと見えるね。俺達の推量は間違つたね。神様に又別なお考へがあるんなら仕方がねえこつた』と、歌でも歌ふやうな調子の聲で云つた。

『そんなことはないさ。お前さん罪を受けて來たのかい？』と、フイヨードシャは、明るい青い、子供のやうな眼で、マースロワをじつと見て、柔しい調子で訊ねた。そしてその晴やかな若々しい顔を泣き出しさうに曇らせた。

マースロワは、何とも答へないで、端から二番目の自分の場所へ行つて、コラブリヨーワの傍へ腰かけた。

『何か食べて來たの？』とフイヨードシャは立ち上つてマースロワの傍に來て云つた。

それでも、マースロワは尚ほ返事をしないで、卷麺麭を寢臺の上へ投げ出し、塵になつた上衣を脫ぎ、汚れた黑い髮の毛を包んだハンケチをとつた。子供と遊んでゐた婆さんがやつて來て、マースロワの前に立つた。『ちツ・ちツ、ちッ』と舌を鳴して、可哀相にと云つたやうに首を振つた。男の兒も婆さんと一緒に隨いて來て、上唇を突き出して、眼を見張つて、マースロワが持つて來た卷麺麭を見詰めてゐた。マースロワはその日色々なことに遭遇つた後で、恁うした人々の同情ある顔を見ると、唇が震へて、泣き出したくなつたが、この婆さんと男の兒とがやつて來るまではじつと耐へてゐた。けれども、婆さんの柔しい慇はつて呉れるやうな舌打ちを聞き、男の兒が罪のない眼で、卷麺麭とマースロワの顔とを交み代りに覗くのを見ると、もう我慢が出來なくなつて、顔を慄はして歔欷り上げた。

『だから、確固りした辯護士をお頼みつて、あれほど執拗く云つたぢやないか』とコラブリヨーワ

は云つた。『だが、何だえ、お流しかい？』

マースロワは返事が出來ないので、卷麺麭の中から、襟開きの衣裳を著て髮を高く束ねた、ほんのりと淡紅い顔色をした美人の繪のついてゐる紙莨の箱を取り出して、コラブリヨーワに渡した。コラブリヨーワは、そんな無法なものにマースロワが金子を費ふのを感服しなかつたので、それを見ると首を振つた。でも、その中から一本拔き出して、ランプで火を點け、一服喫つてから、まるで押し返すやうにしてマースロワの手へ渡した。マースロワは、尚ほ泣き續けてゐたが、煙草を受け取ると嬉しさうにそれを喫ひ始めた。『お流しになつちやつたのよ。』と、煙を吐き出して、小聲で恁う云ひながら、彼女は又歔欷り上げた。

『神樣が恐くないのかね、あの罰中りの人非人の奴郎共は？。』と、コラブリヨーワは呟いた。『罪もない、こんな可愛い娘を流し者にするなんて。』この時、まだ窓際に立つてゐた連中から、突然聲高い下卑た笑ひがどつと起つた。小さい女の兒も笑ひ出したので、嗄れた鈍聲の中にその甲高い黃色い聲が交つて聞えた。窓外の男囚の一人が、何か笑ひ出さずにゐられないやうな事でもしたのであらう。

『御覽よ、あのくり／＼坊主のやつてる態を？。』と、赤毛の女が、肥つた身體を搖つて笑ひながら云つた。そして、尚ほ鐵格子に掴まりながら、聞くに堪へない淫猥な言葉を喚き立てた。

『ふつ。またあの肥つちよのお化がぎや／＼云つてやがる。何がそんなに可笑しいんだ？、』と、コラブリヨーワは呟いた。そしてまたマースロワの方を向いて『何年行くのさ？。』と訊ねた。

『四年』と、マースロワは云つた。と、涙が止め度なく頬を流れ傳つて、その一滴が紙莨の上に落

ちた。彼女は腹立たしげにその濡れた紙莨を捻ぢ曲げて、新しく又別な一本を取つた。

線路番の婦は、煙草を喫みもしない癖に、マースロワが捨てたのを拾ひ上げて、それを眞直ぐに直しながら、またくだ〳〵と饒舌りだした。

『だけどもねエ、今の世の中ぢや、それが本統なんだよ。本統の眞實なんてものは、もう違うに犬が食べつちまつて、各自が好きな眞似をやつてるのさ。俺達は今お前さんの噂をしてたんだよ。コラブリョーワは、『乾度放免になる』つて云ふんだ。妾は『さうでない』と云ふんだ。『さうでないよ、をばさん、乾度あの娘はやられるよ、何だか妾はさう思はれてならない』つて云つてたのさ。所が、矢張りその通りだつたぢやないか。』と、自分で自分の聲に聞き惚れながら喋り續けた。

皆を面白がらせてゐた囚徒の行列が終つたので、窓際に立つてゐた女囚等も、マースロワの傍へやつて來た。一番最先に來たのは、酒の密賣をして捕まつた女と、その小さい女の兒とだつた。

『何うしてまあ、そんなひどい罪になつたんだね。』と、マースロワの傍に腰を下ろして、せつせと編物をしながら訊ねた。

『何うしてつて？お金がないからさ。さうだよ、お金があつて、良い辯護士さへ頼まれゝや、巧く辯護して呉れるから、無罪放免にして呉れたのさ、乾度。』と、コラブリョーワは云つた。『何と云つたつけなあ、あの人の名前は？――鼻の高い、髪の長い人さ。あの人なら、乾度立派に立證を立てゝ巧くやつて呉れるがなア。あの人に頼みさへしたらなア。』

『あの人なら全く宜いねエ。』と『お洒落さん』は、みんなの傍に腰を掛けて、歯をむき出しながら云

つた。『だけど、あの人は千ルーブリ以下では請合つちや呉れまいよ。』

『お前も悪い星に生れついたと見えるね』と、放火犯で入獄つてゐる婆さんが云つた。

『だが、俺の事でも考へて諦めさつせ。悴の嫁をチョロマカされて、此の老齢をして悴と一緒に牢屋でヘェ虱を飼つてるでねエか。』と、百遍も繰り返した愚痴をまた始め出した。『乞食にならねエだと牢屋だ。全く乞食か牢屋か、どつちかは遁れねエこつだ。』

『あゝ、誰でもみんな同じ事だと見えるね。』と、酒密賣の女は云つた。そして、小さな女の兒の頭を見てゐたが、やがて編物を投げ出して、その娘を膝の間へ引き寄せ、器用な指頭で虱狩りを始めた。『何故お酒の密賣をしたかつて？』と云ひ續けた。『何故つてばね、だけどもね、密賣でもしなきや子供を食はして行けないぢやないか。』

此の言葉を聞くと、マースロワは、頻りに酒が飲み度くなつて來た。

『ウォーッカを少ツとばかし。』と、彼女はコラブリョーワに云つた。袖で涙を拭きながら、尚ほ彼女は、時々歔欷り上げてゐた。

『あいよ、今上げるよう。』と、コラブリョーワは云つた。

三二

マースロワは、巻麵麭の中に隠して置いた利券を取り出してコラブリョーワに渡した。コラブリョーワは幾らだかそれが讀めないので、物識りの『お洒落さん』に見て貰ふと、二ルーブリと五十カペイカ

に當ると云ふので、早速ウォーッカの罎を隱して置いた風拔きの穴へと登つて行つた。これを見ると、他の連中は皆其處を外して了つた。その間にマースロワは、上衣や、頭のハンケチの塵を拂ひ、寢臺へ上つて、卷麵麭を食べ始めた。

『あんたにお茶を保つて置いたわ。』と、フイヨードシヤは、襤褸に包んだ錫の急須と猪口とを棚から取り卸して云つた。『けども、もう冷め切つて了つたか知れないよ。』いかさまお茶は冷め切つて、茶よりは錫の臭がしたが、それでもマースロワは、猪口に一杯注いで、麵麭と一緒に飲み干して了つた。『フキナーシユカ、お出で。』と云つて、卷麵麭を引き割いて、さつきから自分の口元ばかり見詰めて立つてる小男の子に分けて與つた。

所へ、コラブリヨーワが、ウオーツカの罎と猪口とを持つて來てマースロワに渡したので、まづ自分で一口飲んで、『お洒落さん』にも薦めた。この四人達は、何時も幾らか金を持つてゐたので、檻房内では貴族のやうに考へられ、お互にその持つてゐるものは分配し合つてゐた。二三分經つと、マースロワはすつかり陽氣になり、副檢事の身振りを眞似たりなどして法廷での一伍一什を元氣に話し出した。何よりも一番驚いたのは、みんなが蒼蠅く彼女に食付いて廻つたことで、法廷でもみんなが彼女の顏ばかり見詰めて、休憩中、囚人の控室へ行つてゐる時でも、ノコノコ態と這入つて來た者があつたなどゝ語つた。

『護送兵の一人もさう云つたのよ、「あの連中が此處へ來るのは、皆お前の顏を見にだ。」つて、中には、「惩う云ふ書類は何處にある？」とか何とか云つてね、這入つて來るんだよ。だけど、なあにね、

書類なんか探してるんぢやないのさ。その人の眼はじつとわたしの顏ばかし見詰めてるんだもの。』と云つて、彼女は首を振つた。『工夫のない手合ひさ。』

『さうだつたらうね、屹度。』と、線路番の婦は調子の好い聲で流暢に云つた。『砂糖に集る蠅みたいなものさ。彼奴等は砂糖さへあればいゝんで、中身のあるなしには關らずにたかつて來るんだよ。』

『それから又。』と、マースロワは遮つた。『又同じひどい目に會つたのよ、丁度此處へ歸つて來ると汽車で着いた囚徒がどやどや這入つて來てね、それが又蒼蠅いつたら、本統に何うして可いかわたしには判らなかつたわ。所が有難い事に副典獄が出て來て追拂つて呉れたのよ。一人の奴が執拗くしがみ附いて、中々放れないので本統に何うしようかと思つてたの。』

『それは何麼風な奴だエ。』と、『お洒落さん』が訊ねた。

『色の黑い、鬚のある奴だつたよ。』

『ぢや、あいつに違ひない。』

『あいつて誰なの。』

『シチエグローフつて奴、今通つて行つたよ。』

『シチエグローフつて誰？。』

『え、シチエグローフを知らないの、西伯利亞から二度まで逃げ出した男だよ。今度捕まつたんだけど、屹度また逃げるわね、看守達も彼奴には恐がつてるんだぜ。』と、男囚達と通信して獄内の出來事は何も彼も知つてゐる『お洒落さん』は云つた。『屹度また逃げるよ。定まつてらアね。』

『何うせ逃げるものなら、俺達も連れてつて貰ひ度いもんだねェ。』と言つて、『お洒落さん』はマースロワの方を振り向いた。『だけど、お前さんは、辯護士が控訴して與れるつて云やしなかつたかね、それなら今直ぐでないといけないよ。』

マースロワは、そんなことは少しも知らないと答へた。

この時、赤毛の女が、斑點だらけの兩手を濃い髪の毛の中へ突き込み、ボリ〳〵と爪で掻きながら此の『貴族達』の傍へやつて來た。そして、

『その事なら、あたいがすつかり教へて上げよう、カテリーナ。』と、彼女は口を切つた。『まづ取り敢へず、申し渡しに不服だと云ふ書附を出して置かなくちやならぬ。それから副檢事に申告するんだよ。』

『何しに來たんだよ。』と、『お洒落さん』が腹立たしく云つた。『ウォーッカの臭ひを嗅ぎつけて來たんだらう。お前のお饒舌なんか聞きたくないよ。お前の差し出口なんか聞かなくたつて、その位のことアみんな知つてるからね。』

『誰もお前に云つてやしないよ、何だつて餘計な嘴を容すんだ。』

『お前はウォーッカが欲しいんだらう。それでそこらをうろ〳〵のたくつてるんぢやないか。』

『ぢや、少しお與りよ。』と、いつも持つてゐる物はみんな誰にでも分けてやる癖のマースロワが云つた。

『よし、與れてやるかな。』

『さあ、來て見ろ。』と、赤毛の女は、コラブリョーワの方へ進み寄つて云つた。『汝等のやうな者が恐くつて何うするものか。』

『極道奴。』

『それや汝のこつたア。』

『この、すべつため。』

『何？すべつたァ。此の泥棒！人殺し！。』と、赤毛の女は金切聲で叫び立てた。

『行つちまへと云ふに。』と、コラブリョーワは、恐ろしい權幕で云つたが、赤毛の女は却つてにじり寄つて來たので、コラブリョーワは胸を突き飛ばした。赤毛の女はそれを待ち構へてゐたやうに、素早くコラブリョーワの髪の毛を片手で掴んで、片手で横面を毆りつけた。コラブリョーワはその手を捕へた。マースロワと『お洒落さん』は、その中へ這入つて、赤毛の女の兩腕を取つて引き離さうとしたが、中々離さない。婆さんの髪の毛を掴んだ手をちよいと弛めたゞけで、今度は直ぐそれを拳に巻きつけて了つた。コラブリョーワは、頭を一方へ傾けて、片方の手で相手を滅多打ちに毆りつけながら、尚ほその手に噛み付かうとした。その間に、他の女囚達がどや〳〵とその周圍に集つて來て、金切聲をあげながら、二人を引き分けようとした。肺病患者までが起きて來て、コン〳〵咳をしながら立つて、喧嘩を見てゐた。子供は互に抱き合つて泣いてゐた。この騷ぎを聞き付けて女の取締と看守とが駈け付けて來た。で、二人は辛つと引き分けられたが、コラブリョーワは、引掻き拔かれた頭の髪毛を除きながら、赤毛の女は、引裂かれた下襦袢を黄色い胸の上に掻き合せながら、互に大聲で、尚ほ

泣き言を云ひ始めた。

『判つてるよ、ウオーツカの事からだらう。まあお待ちよ、明日、典獄にお話するから、典獄が裁いて下さるよ。香ひがしないと思つてるの？氣を付けなさい。そんなものは何處かに納ひ込んで置かないと、お前達の爲にならないよ。』と、女の取締は云つた。『私達は喧嘩の裁判なんかしてる暇はなんだからね、みんな自分の席へ行つて靜かにしておいで。』

けれども中々すぐには靜まらなかつた。暫くは、尙ほ互に罵り合つて、一體最初はどつちが惡かつたのだとか善かつたのだとか饒舌り立てゝゐた。軈て女の取締と看守とは檻房を去り、女囚等も漸く靜かになつて、各自の寢臺へ歸り始めた。婆さんは聖像の前に行つて、お祈りを始めた。

『獄舍鳥が二羽揃つてやがる。』と、赤毛の女は、部屋の向ふ端の寢臺から突然嗄れ聲で、又喧嘩を挑みかけるやうに、惡口雜言を喚き立てた。

『もう與りやしないから、さう思へ。』と、コラブリヨーワも毒づきながらそれに應じたが、軈て兩方とも靜かになつた。

『止め手がなかつたら、汝がその極道眼を刳り拔いてやつたんだ。』と、赤毛の女はまた惡口し始めた。コラブリヨーワも亦同じやうな返答をしないではゐられなかつた。それからまた暫く默つて、更にまた惡口を吐いた。然し、段々その間が長くなつて行つて、お終ひには、夕立雲が通り過ぎて了つたやうに、寂と靜まりかへつて了つた。

みんな寢床に這入つて、中にはもう鼾をかくのもあつた。何時も永いことお祈りをする婆さんだけ

まだ聖像の前に叩頭いてゐた。教會の執事の娘は、取締が行つて了つてからまた部屋の中をあちこちと歩き廻つた。マースロワは、自分はもう重刑の宣告を受けた囚人であると云ふ事や、そして既に二度まで罪人呼ばはりをされた――一度はボーチコワに、一度は赤毛の女に――事などを考へ續けてゐたが、何うしても自分が實際罪人だとは思ひ諦めることが出來なかつた。隣りのコラブリヨーワは、マースロワの方へ寢返り打つた。

『何うしたつて。』と、マースロワは低い聲で云つた。『誰だつて諦められはしない、他の人は隨分色々な事をしてゐても何ともされずにゐるぢやないか。』

『まア心配しなさんな、西伯利亞にだつて人間は住んでるよ。お前さんだつて、其處で死ぬ氣遣ひはないのだから。』と、コラブリヨーワは、マースロワを慰めようとして云つた。

『わたしだつて、まさか其處で死なうとは思はないけど、屹度辛いわね。ほんとに厭やだわよ、わたし、これまで暢氣に樂をして來たんだから。』

『あゝ、誰でも神樣のお思召しには逆らはれない。』と、コラブリヨーワは溜息をついて云つた。『まア諦めなよ、ねエ、何うにもならないこつたから。』

『それや判つてるよ、小母さん。だけど、辛いわネ。』

二人は暫くの間默つてゐた。

『ちよいと、あのすべたが、しく／＼やつてるよ。』と、コラブリヨーワは、部屋の向ふの端から何か變な聲が聞えて來るので、それにマースロワの注意を誘ひながら囁いた。

それは正しく赤毛の女の啜り泣きの聲であつた。赤毛の女は、ひどく惡口つかれて莫迦にされた上に、飲みたくてたまらなかつたウオーツカには到頭一杯にもありつけず、それから又、今まで自分が他から莫迦にされ、弄ばれ、辱められ、打たれ通しであつた事などを不圖思ひ返して來るので、無闇と悲しくなつて泣き出したのであつた。氣を引き立てようとして、自分の最初の戀人であつた工場職人のフェーヂカ・モロデーンコフとの間の甘い戀を記憶に呼び起さうとしたが、然し又、その戀がお終ひになつた時の事をも思ひ浮べた。モロテーンコフは、或日非常に醉拂つて來て、惡戯半分に、大切な所へ流酸を塗りつけて、女が痛さに身を踠くのを見ながら、友達と一緒に笑ひこけてゐた。恁麼事を思ひ出すと、自分が情けなくなり、誰か聞いてゐる者はなからうかと思ひながら、鼻を鳴し、涙を飲んで、子供のやうにもくもく泣き出したのであつた。

『可哀さうだわネ。』とマースロワは云つた。

『可哀さうは可哀さうさ。』と、コラブリョーワも云つた。だけどあの女のやうに餘計な嘴を容れちやいけないよ。』

三三

次ぎの朝、ネフリユードフは眼を覺ますと、何かしら自分の身の上に起つて來さうな氣がしたが、然しそれば、何か重大な吉兆であるやうに思はれた。

『カチユーシヤ——再審!。』さうだ、彼はかうして寢てはゐられない、一部始終を話しに行かなければならなかつたのだ。

すると妙なことには、この朝、かねて待ち焦れてゐる貴族長の妻のマリヤ・ワシリエウナから——殊に必要な用件のその手紙を受け取つた。女はすつかり手を切るから、思ひのまゝ目出度く結婚して呉れと云つて來た。

『結婚!。』と冷かに繰り返した。

『現在では、もうそんな事は思ひもよらぬ。』

それから彼は、何も彼も女の良人に打ち明けて、胸中を潔にし、喜んで向ふの滿足の行くやうに身をまかせると決心した昨夜の自分の覺悟を思ひ起した。けれども、今日になつて見ると、昨日思つたやうに、さう容易くは實行されさうにはなかつた。それに又、何も知らないでゐるのにこちらから態々それを打ち明けて人を不幸にする必要はなかつた。さうだ、もし向ふから訊きに來た時こそ始めてすつかり話してやれば可いのだ。態々自分から行つて話すことはない。要らないことだ。

又、ミツシーに打ち明けるといふ事も、今朝になつて見ると中々容易でないやうに思はれた。これもまた氣を悪くされては困ると云ふので云ひ出し難いことだつた。世間には明らさまに打ち明けてはならない事が幾らもあるものだ。そんなことよりもたゞあの家を斷じて訪れないことだ。もし向ふから訪ねて來たらその時すつかり話してやれば可い。

然しカチユーシヤの事は、默つて濟ますわけには行かない。『監獄へ行かう。そしてすつかり打ち明けて、許して貰はう。それからもし必要だつたら……さうだ、もし必要だつたら、あの女と結婚をし

よう』と彼は考へた。

道徳上の見地から云つて、總てを犧牲にしても、カチユーシヤと結婚せねばならぬと云ふ此の考へが、彼自身には非常な慰めとなつた。

財産の事に關しても、土地私有を不正とする自分の信念に適ふやうに、處理しようと決心した。たとへ何も彼も實際に捨てゝ了ふ程強くなかつたにしても、自分も他をも欺かずに、自分で出來る限りの事は實行しようと覺悟した。

これ程眞劍な覺悟で、將來に對したのは久振りであつた。アグラフエーナが部屋へ這入つて來ると、思つたよりは一層斷乎とした調子で、もう此の邸にも、アグラフエーナ自身にも、用はなくなつたと告げた。一層恁麼大きな費用のかゝる邸宅を構へてゐるのは、結婚しようと思つてゐるからだと云ふことが暗默の裡に判つてゐた。それで、此の邸宅を突然捨てると云ふことには、何か特別な意味がなければならなかつた。アグラフエーナ・ペトローウナはひどく驚いて主人をじつと見詰めた。

『色々御世話になつて本當に有り難かつた。だがもう俺は恁麼大きな邸宅も多勢の奉公人も要らなくなつた。なほお前が俺の世話をしたいと思ふのなら、家財道具をよく調べて、お母さんの在世中にあつた通りに片附けて置いて呉れ。そしたらナターシヤが來てすつかり處分するだらうからね』ナターシヤはネフリユードフの姉であつた。

アグラフエーナ・ペトローウナは首を振つて『道具を調べて片附けるのでムいますか?、でも、また要る時が參りますよ』と云つた。

『いや、もう要らない。屹度もう要ることはないんだ』と、ネフリユードフは、アグラフエーナ・ペトローウナが首を振つたのに答へて云つた。『それからね、コルネイにも二た月分の手當をして暇をやるからと云つてお呉れ』

『そんなことをお考へになつてはいけません。ドミトリイ・イワーノウイチ様』と、彼女は云つた。『外國へでも御出でになります御心算でせうけれども、それにしてもまた御邸宅が要るにきまつてゐますから』

『お前は考へ違ひをしてるんだ。俺は外國へなんか行く心算はないよ。何處へか行くにしても、それは外國へではない。全く違つた所へ行くんだ』彼は俄かに顏を赧くした。『さうだ、打ち明けてやらなければならない』と考へた。『何も秘さずに、誰にでもすつかり話して了はねばならない』

『實はね、昨日、俺には不思議な、大變なことが起つたんだ。お前は、マリヤ・イワーノヴナ伯母さんの宅にゐたカチユーシヤを覺えてるかい』

『えゝ、覺えてゐますとも、わたしはあの娘にお針を敎へてやりましたのですもの』

『そのカチユーシヤが、丁度昨日、法廷で調べられたんだよ。俺は陪審員で列席してゐたんだがね』

『まあ、可哀さうに』と、アグラフエーナ・ペトローウナは叫んだ。『何を調べられましたのでせう』

『人殺しだよ。そしてそれはみんなこの俺がしたんだ』

『まア、だけど何で御座いますね、あなたがそんなことをなさいますなんて?』と云つて、彼女は

老眼をきらりと光らせた。

アグラフェーナ・ペトローウナは、ネフリエードフとカチユーシヤとの一件を知つてゐた。

『いや、所がその原因が皆俺にあるんだ。それで俺の將來に對する考へはすつかり變つて了つた』

『まア何うしてそんなに。變で御座いますね！』と、アグラフェーナ・ペトローウナは可笑さをじつと堪へながら云つた。

『それもね、カチユーシヤをあんなに墮落させた原因は俺なんだから、俺は全力を盡して彼女を助けなけりやならんのだ』

『それは結構なお道樂で御座いますけど、あんな過失はあなたばかりではありません。どなたにもあることで、話さへ解れば、圓くをさまつて、すつかり忘れて了うことなんですのに』と、彼女は、眞面目に更つて云つた。『何故それを御自分の罪になさいますのですか、そんな必要は少しもありません、あの女は道に外れた渡世をしてゐたと云ふではありませんか、ですから、誰の罪と云ふことはありません。』

『イヤ、俺の罪なんだ　それで何うしてもあの女を眞人間にしてやらなければならない』

『ですけれど、あの女を眞人間になさるのは、大變なことで御座いますよ』

『それが俺の義務なんだ、けれどもお前が自分の身の振り方に就いて心配してるのなら、お前に話して置かう。死んだ母の遺言だが……』

『わたくしは自分の身の振り方のことを心配してゐるのではありません。お亡くなりになつた奥樣には身に餘る程御恩を受けてゐますから、この上何の御願ひが御座いませう。リーザンカが（他へ縁づいてゐるアグラフェーナの姪）かねてから引き取るやうに申してゐますから、愈々御暇を頂かねばならない時はわたしは其處へ參ります、たゞあなたがそんな御考を起しなさいましたのを殘念に思ひます、その位の過失ば誰にでもあるのですから。』

『でも、俺はさうは思はない。まア、この邸を初め家財道具を片附けるのに手傳ひしてお呉れよ。何うか腹を立てないでね。俺は、本當に、本當に、感謝してゐるんだよ。色々お前には親切にして貰つてるからね』

不思議なことに、ネフリユードフは、世の中で、最も憎むべき厭ふ可き者は、自分自身であつたと氣がついた瞬間から、他の者を嫌ふ心がすつかりなくなつて了つた。まして、アグラフェーナ・ペトローウナやコルネイに對しては、柔しい慈愛の心が起つて來た。で、彼は、コルネイにも自分から行つて告白したかつたのだが、コルネイのいつもの態度が、餘りに自分にへりくだつて尊敬しすぎてゐるので、その勇氣が出なかつた。

昨日も同じ辻馬車に乘つて同じ街路を通つて裁判所へ行つたのだが、それにしても今日の自分の心の變りやうにはネフリユードフも自分で驚いた。ツイ昨日までは、殆ど約束が出來さうになつてゐたミッシーとの結婚が、今日はもう全く不可能なことになつた。昨日は、結婚するもしないも自身の考へ次第で、又ミッシーに取つても自分と結婚するのが確かに彼女の幸福であると考へたのだが、今日は、結婚のことはさて措いて、親密な交際をして行く資格さへ自分にはないやうな氣がされて來た。『もし

ミッシーが、自分の事を本統に知つて了つたなら、迚も寄せつけもしないだらう、ツイ昨日自分は、ミッシーが他の男達と巫戯けてゐるのを見ると幾らか嫉妬けて厭やな氣持がした。然し今はそれどころではない。假にミッシーがそれでも自分と一緒にならうと云つたとしても、一方には今、一人の女が監獄につながれて、今日が明日にも西伯利亞へ遣られようとしてゐるのだもの、幸福どころか、何うして落ちついて居られるものではない。自分のために墮落した女が流刑にされようとしてゐるのに、自分ばかり若い妻と一緒に、披露の訪問をしたり、祝つて貰つたりしてゐられるものではない。又、貴族長――その妻君とは仇し關係を結んでゐるのに――然もぬけぬけと白ばくれて彼の後援のために會議に列席し、地方視學の議案に反對した投票をしてやつたりなどが出來るものではない。それから又、何時ものになるか判りもしない繪の修業を續けようとして、そんな事に無駄な時を過してもゐられない。自分は今、そんな暢氣なことは一切してはゐられないのだ』自分が恁麼心持ちに變つて來たのを喜んで、彼は尙ほ思ひ續けるのだつた。『何は兎もあれ、辯護士に會つて、意見を聞かなければならぬ。それから――それから監獄へ行つて、あの女に、昨日の女囚に會つて、何も彼も打ち明けるんだ』

三四

それからネフリユードフは、カチユーシヤに會つて、一部始終を語り、自分の罪を懺悔し、その罪を償ふためには能ふ限り盡し、ことに依つたら結婚しても可いと語る時の模樣を頭に描いて見ると、一種特別な歡喜の情が湧き起つて來て、淚が兩眼に流れて來た。

裁判所へ著くと、ネフリユードフは、廊下で昨日の廷吏に又出會つたので、宣告濟みの囚徒は何處に收容されてゐるか、そして、それに面會するには、誰に許可を願つたら可いかと訊ねた。すると廷吏は、宣告濟みの囚徒は、諸方に收容されてゐるが、更に確定した宣告が云ひ渡されるまでは、面會の許可は檢事に願へば可いと云つた。

『裁判が濟んだら、又私があなたを呼びに參りませう、そして檢事のところへ御案內します。檢事は今此處にはゐません。いづれ裁判が濟みましてから――、何うぞ彼方で御待ち下さい。私の受け持ちの方は只今から始まる所で御座います』

『ネフリユードフは廷吏に(今日は氣の毒な程親切にして呉れた)御禮を云つて、陪審員控室の方へ行つた。控室に近づくと、丁度他の陪審員が其處を出て、法廷へ行かうとしてゐるところであつた。例の紳商は、相變らず少しきこし召して、昨日と同じお機嫌でネフリユードフへ、まるでお馴染みの友達のやうに挨拶した。今日はピヨートル・ゲラシモーウイチの、例の馴れ馴れしい無遠慮な高笑ひに對しても、ネフリユードフは少しも不愉快な感じが起らなかつた。

ネフリユードフは、昨日の被告と自分との關係を、陪審員の前ですつかり告白して了ひたかつた。

『本當は……』と彼は考へた。『昨日裁判中に起立して、自分の罪を懺悔すべきだつた。然し、他の陪審員達と一緒に法廷へ出て昨日と同じやうな順序――「開廷」が宣告され、金モールの襟飾の裁判官が三人高座に上り、陪審員が、背後の高い椅子に昨日と同じやうに掛け、同じ憲兵、同じ宣言、同じ收師――それ等を見ると、懺悔しようと思つてゐても、昨日と同じやうに今日もまたこの壯嚴を犯すこと

が出來なかつた。

裁判の順序は、昨日と同樣であつたが、陪審員の宣誓と、裁判長の彼等に對する說明とだけは省略された。

此の日法廷に持ち出された事件は窃盜犯であつた。拔劍した二人の憲兵に引き出された被告は、血色の惡い、黃ばんだ顏の、痩せた胸の狹い、二十歲位の若者で、鼠色の上衣を着てゐた。彼は被告席にたつた一人腰を掛けて、法廷へ這入つて來る人達を、眉を陰氣に顰めて見詰めてゐた。此の若者は、も一人の合棒と、物置小屋の錠前を破つて、三ルーブリ六十七カペイカに當る古蓆を數枚盜み出したので捕まつたのであつた。告訴狀によると、此の若者は、蓆を擔いだ合棒と一緒に通る所を巡査に呼び止められたのであつた。二人共すぐ白狀して、牢屋へ打ち込まれて了つた。合棒の錠前職は、牢死したので、此の若者だけが今調べられる所であつた。テーブルの上には古蓆が證據物件として、載せてあつた。

審問の順序は、すべて昨日の通りで、證據書類、證據物件、證人、宣誓、尋問、鑑定人、對審と云ふ陣立てであつた。證人の一人である巡査は、裁判長や、副檢事や、辯護士などから色々と質問をされる每に、型の如く『えゝ。さうです』とか『知りません』とか、答辯した。この巡査は、かねての教練で、神經が鈍くなり、全く一つの器械のやうになつてゐたが、それでも遉に、此の囚徒の捕縛の顚末を陳べるのは如何にも嫌やさうな樣子であつた。も一人の證人は、家主で、その古蓆の持主で、如何にも肝癪持ちらしい老人で、此の蓆はお前のかと訊かれた時、澁々自分の所有らしいと答へた。そ

して副檢事が、此の蓆は一體何に使ふのか、お前に取つては大切な品かと訊ねると、忽ち腹を立て、『畜生こんな役にも立たぬ蓆なんか盜みやがつて、俺はもう要らんのだ。こんな面倒臭い事になるのが判つてたら、探すんぢやなかつた。こんな所へ引張り出されたり調べられたりする位なら、一層のこと十ルーブリ札の一枚や二枚は附けてやつたが餘程ましだ。俺はもう、辻馬車に、五ルーブリばかり取られて了つた。おまけに、身體の加減が惡いんだ。脫腸と僂麻窒斯で苦んでるんだ』

證人の陳述は恁麽鹽梅であつた。被告自身は何も彼も白狀して、罠にかゝつた獸のやうに、キョトキョトと四邊を見廻しながら、吃り吃り一部始終を陳述した。事件は明瞭してゐたのだが、副檢事は昨日と同じやうに肩を聳やかして、狡猾な犯人でも罠に陷め込まうとするやうに、巧い質問を發した。その辯論によると、これは人家の錠前を壞して闖入した竊盜犯であるから、此の若者は嚴しく罰しなければならぬと云ふのである。

裁判所指定の辯護士は、この竊盜は人家で行はれたのではないから、犯罪そのものを否定することは出來ないが、被告は、今檢事が論告した如く、社會に危險を及ぼすやうな性質のものではないと論辯した。裁判長は、前日の通り、絕對中立の公正な役目を守つて、陪審員に對つて、皆によく解つてゐる、そして又當然解らないではゐられない事實をくどくどと說明した。昨日の通り、休憩が命じられ、陪審員は再び紙莨をふかしてゐたが、やがてまた廷吏が『開廷』と、喚き立てた。その間二人の憲兵は、拔劍して、被告に座睡させまいとして脅かしてゐた。

調書によると、此の若者は、親爺から煙草製造場へ丁稚にやられて、そこで五年間奉公してゐた。

所が丁度今年、ストライキがあつて後、雇主から追ひ出され、それから仕事の口がなくて、町をうろついてゐる中に、持つてゐる物はすつかり飲んで了つたのだつた。或居酒屋で、自分と同じやうに長い間仕事の口がなくてぶらついてゐた、飲んだくれの錠前職と一緒になつた。そして或晩二人は、酒に酔つて、とある物置小屋の錠前を破して、手當り任せに攫ぎ出したのだつた。捕まるとすぐ白狀して監獄に入れられたが、錠前職は公判を待たないで死んで了つた。そして、若者だけが今、社會から隔離しなければならない危險な動物として調べられてゐるのであつた。

『丁度昨日の犯人と同様に、これも矢張り危險な動物なんだなあ』と、ネフリユードフは、自分の目の前に進行しつゝある凡ての事に耳傾けながら心の中で思つた。「なる程、彼等は危險だ。然し彼等を裁判してゐる吾等は危險でないのかしらん？放蕩者で、詐欺師のこの自分、我々全體は、しかし自分を知つてゐる人達は皆、少しも自分を卑めないばかりか、却つて尊敬してゐるぢやないか……』

『此の若者が、大した惡人でなく、尋常普通の人間であることは判り切つてゐる——誰にもよくそれは判る。——此の男が恁うなつたのは、根が單純なだけ、境遇が境遇だつたからに過ぎない。だから、恁うした少年の惡事に走るのを防ぐには、さうした不幸な人間を作り出す周圍の惡弊を取り除いてやらねばならぬ。この男も、家が貧乏で町へ奉公にやられた時、誰か憐んで助けてやる者がゐたら、こんなことにはならなかつたらうに——』と、ネフリユードフは、若者の弱り切つたキヨト〳〵した顔を見詰めながら、心の中で思つた。

『奉公に行つてからでも遲くはなかつたのだ。工場で十二時間の勞役を終つてから、年上の仲間に

連れられて、居酒屋へ出掛ける時、誰かゞ來て「あんな所へ行くなよワーニア、ためにならない」と一言云つてやる者があつたら、屹度行かなかつたに違ひない。随つて惡い横道にも外れず、惡事もしなかつたらうに——』

『然るに、長年、みぢめな小さな動物のやうに、町で奉公してゐる間、誰一人情けをかけて呉れる者もなく、虱がわかないやうにと云つて頭の毛は短く刈り込まれ、他の職人などの走り使ひにこき使はれてゐた。尚ほ、人を欺瞞したり、酒を飲んだり、惡い虚言を吐いたり、喧嘩をしたり、だらしなくなつたりする者が、立派な人間だと、年上の職人や仲間から教へられて來たのだ。

『おまけに、過度の勞働と、酒と、淫行とで身體をこはし、途方に暮れて夢現のやうになり、何のあてもなしに町中をうろつき廻つて、ツイ、うか〳〵と、物置小屋の中へ忍び込み、何の役にもたゝぬ古蓆を盗み出したのだ。然るに吾々は、此の若者をして、こんな事をさせるやうに導いた原因を取り除かうとはしないで、此の男を處刑することに骨折らうとしてゐる。

『恐るべき事だ』

ネフリユードフは、裁判の進行などはもう聞かうともしないで、頻りと恁麼事ばかり考へながら、その實例を目のあたり見て恐怖に打たれた。何うして今までこれが解らなかつたのか、そして、他の者にも何故まだこれが解らないのであるか、合點のゆかぬ事であつた。

三五